ナナミさんは我が家の無知無恥無感情型メイドセクサロイド

1

「新品のパートナーロイドを？　僕に？」
「売れ残りの旧型だけどな。一人暮らしでＰＲがいるとマジで便利だぞ」
突然やってきた叔父さんのその言葉に、僕は目をしばたたかせた。
パートナーロイド、通称ＰＲ。僕が生まれる少し前から本格的に一般に普及しだした、生活全般のサポートをしてくれるアンドロイドである。炊事洗濯掃除などの家事全般や、日常生活のサポートをしてくれるお手伝いロボットだ。古い漫画とかだと「メイドロボット」とか呼ばれてるやつだが、ＰＲは男性型も女性型もあるので「パートナーロイド」という性別を限定しない名称になっている。
実家にも物心ついたときから「ミヨコさん」という女性型ＰＲがいて、僕も散々お世話になった。ミヨコさんは僕にとって第二の母親みたいな存在で、大学に入って親元を離れて一人暮らしをするにあたって何が一番不安だったって、ミヨコさんが居ないことである。大学の学費を払ってしまうと我が家には僕に新品のＰＥを買い与えるほどの経済的な余裕

はなく、両親もミヨコさんを手放せず、僕は完全な一人暮らしを余儀なくされたわけだが……。

大学生活、一人暮らしが始まってひと月。案の定、ミヨコさんのサポートを失った僕の生活態度は堕落の一途を辿っていた。

そんなところへ、突然母さんの弟であるこの叔父がやってきたわけである。

「そりゃ、ありがたいけど……どうして急に？」

「姉さんから、やっぱりアキラが心配だからＰＲを用立ててやりたいんだけど安く手に入れる方法ないかって相談されてな。ちょっとばかり伝手があったんで、お前の意向を聞きにきたわけだ」

「母さん……」

それなら最初からそうしてくれればいいのに。僕は溜息をつく。

「伝手って？」

「知り合いにＰＲの販売代理店やってる奴がいてな。売れなくて倉庫で埃被ってる旧型が一台あって、引き取り手を探してるんだと。お前さえ良ければ明日にでも持って来させるぞ。代金は姉さん持ちだからお前は心配しなくていい」

「うおおあああ、叔父さん、ありがとう！　もー、ミヨコさんのありがたみをこのひと月

思い知るばかりでさ……」

「はっはっは、感謝するにはまだ早いぞ我が甥っ子よ」

何の仕事をしてるかよくわからない風来坊の叔父は、ニヤリと笑って僕に囁いた。

「こいつはお前の両親には内緒だが……タイプＳだ」

「……マジで？」

僕は思わず、ごくりと唾を飲んだ。

パートナーロイドには、日常生活のサポートだけでなく、セックスの相手をしてくれるセクサロイドタイプ――通称「タイプＳ」が存在する、ということは僕も知っている。ミヨコさんはそのタイプではなかったし（タイプＳは基本的に独身者用だから当たり前だ）、街にＰＲを連れ歩く人は多いけどタイプＳか否かパッと見で見分けがつくわけでもないので、僕にとってタイプＳのＰＲというのはネット上の情報でしか知らない存在であった。

「た、タイプＳのＰＲって高価いんじゃないの？」

「旧型の売れ残りだからな。向こうも投げ売りワゴンセール価格なんだよ。だからもちろん、最新型に比べると性能は見劣りする。でも、お前んちのミヨコさんだったか？　基本スペックはあれと変わらんから、ＰＲとしては充分だろう」

そういえば、ミヨコさんは僕が物心ついたときから家にいたから、製造から 15 年は経

っているはずだ。それでもミヨコさんの性能に不満を感じたことはない。あれで旧型なら、最新型はどれだけ凄いんだ？

気にはなるけども、ミヨコさんと同程度の性能なら何の文句もない。

「……まあ、タイプＳとしては若干ピーキーな型なんで、あまり過度な期待はするなよ？」

「ピーキーって？　なに？　……ゴリゴリのデブ専の人用とか？」

うまい話には罠がある。ぐっと僕の中の警戒心が高まった。そりゃそうだ、いくらなんでも美味しい話すぎる。タイプＳのＰＲは利用者の性的嗜好に合わせていろんな型があるという話は聞いたことがある。ものすごく太った型とか、四肢のどこかがわざと欠損してる型とか、老婆型とか……。

「いや、そのレベルは普通オーダーメイドだからな」

「……だよね」ほっと一息。

「見た目は普通の、お前と同年代の女性型だ。黒髪ロング前髪ぱっつんの清楚タイプ。身長１６０センチ。ほれ、この子だ」

叔父さんがスマホの画面に写真を出した。

眠るように目を閉じた、美しいメイド服姿の少女が映っている。僕は食い入るようにその画面を見つめた。首元にあるＰＲであることを示すラインがなければ、人間にしか見え

ない。

……か、かわいい。この子がウチに来るの？　セクサロイドとして？　マジで？

「ちょっと待って叔父さん」

「どうした？　不満か？」

「なんで僕の好みのど真ん中ストライクなの」

「そりゃ何よりだ」

叔父さんは呵々と笑う。こんなの期待するなという方が無理だ。

しかし、こんな普通に売れそうな外見で、なんで売れ残るのだろう？

「じゃあ、何がピーキーなのさ。この見た目なら多少のことは我慢するけど」

「うーん、実物が届いてからでもいいんだが……そこまで食いつかれてお前の期待を極端に裏切ったりしたら申し訳ないな」

叔父さんは頭を掻き、「まあ、何が問題かってーとな……」と続けた。

◇　◆　◇

翌日の夕方。

「ホントに届いたよ……」

昨日、叔父さんのスマホの画面で見た黒髪のメイド服の少女が、僕の部屋の中にいた。

届いた巨大なダンボール箱を、指示に従って開くと、箱の中にはメイド服姿で体育座りしたこの子が入っていた。替えの服やメンテナンス用品、充電パックなどの付属品を取りだして、長い黒髪をかき上げると、首の裏に設定および充電用のコネクタがある。このへんはミヨコさんが充電している姿などで勝手はある程度わかっていた。

付属のケーブルでスマホを繋ぐと、そのまま初期設定画面がスタートする。

《本製品はＵＮＤＯ社製パートナーロイド・タイプS-12型、シリアルナンバー７７３となります。マスターの個人情報を登録します。……ユーザー名は仲上アキラ様でよろしいでしょうか？》

「は、はい、オッケーです」

ちょっと緊張する。画面の指示に従い、初期設定を進めていく。

《本製品の固有名称を設定してください。特に指定がなければ、「ナナミ」とします》

「じゃ、じゃあナナミでいいです」

ゲームで主人公の名前を考えるのがいつも苦手なので、デフォルトネームがあるのは助かる。しかしシリアルナンバー７７３だからナナミって安直だなと思ったけど、ミヨコさ

んも３４５番だったのか……。

《マスターへの基本呼称を設定してください。随時、変更も可能です》

画面に色々な呼び方の選択肢が表示される。「アキラ様」「ご主人様」「マスター」あたりはわかる、「アキラくん」「アキラさん」あたりもいいだろう、しかし「お兄ちゃん」とか「お父様」とか「お前」とか「少年」とか、なんかニーズの偏りを感じさせるな……。

どうしよう。……このメイド服姿を見ていると、やっぱり「ご主人様」って呼ばれたい気がする。慣れなかったら変えよう。「ご主人様」で。

《マスターへの基本態度を設定してください》

縦軸が「従順――反抗」、横軸が「好意――冷淡」というマトリクス図。好意で反抗にするとツンデレになるのか？　しかし――叔父さんの話だと、確かこの子が売れ残った原因というのが……。

画面をスクロールすると、「態度変化」の設定項目の下に、その注意書きがあった。

《本製品は感情抑制型のため、設定にかかわらず感情表現は希薄となっております》

――そう、これがこの子が売れ残って僕の家に来ることになった原因らしい。

『これ、いわゆる敢えて感情表現を抑制した無感情タイプなんだよ。もちろんタイプＳとしてもだ。だから、セクサロイドとしてもダメなやつは全然ダメなんだよな、ただのマグロで萎えるって。そーゆーのがいいって需要は一定数あるんだが、知り合いの代理店の客層にはそーゆー好みのユーザーがいなかったらしくてずっと売れ残ってたってわけだ』

僕はひとつ息を吐いて、態度設定画面に戻り、初期設定を決める。

そうして設定を進めていくと――最後に、セクサロイドとしての設定項目がある。

《タイプＳはマスターの反応を学習して成長します》

その文章とともに、「性知識」「羞恥心」などの初期設定項目がある。ここまで設定できるのか……。なんか性癖を暴露しているような気恥ずかしさを覚えたが、どうせ僕専用のＰＲなのだ。開き直って、ひとつずつ僕好みに設定していく。

そうして、全ての設定が完了して、首のコネクタからケーブルを抜き、最後にスマホで「完了」のボタンを押すと。

――彼女は目を開けて、ゆっくりと立ち上がった。

そして、僕に向き直り、ぺこりと行儀良く一礼する。

長い黒髪が、さらりと揺れた。メイド服の白いエプロンと、ロングスカートの裾がひらりと揺れる。

「はじめまして、ご主人様。パートナーロイド、ナナミと申します。今日よりご主人様の身の回りのお世話をさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします」
感情のこもらない、どこか無機質な声と無表情のまま、彼女はそう名乗った。

◇　◆　◇

パートナーロイドにはミヨコさんで慣れているつもりだったけれど、実家のミヨコさんは家族全員のPRだったから、僕ひとりにかかりきりだったわけではないし、ミヨコさんの見た目はもっと年上だった。一人暮らしの僕の部屋で、僕と外見年齢の変わらないメイド服の少女がいるのとは話が違う。しかもその外見が好みのど真ん中ストライクで――しかも僕専用のセクサロイドなのだ。落ち着けという方が無理である。
その少女――ナナミは今、台所で夕飯を作ってくれている。
「なっ、何か手伝おうか、ナナミ、さん」
「ナナミで構いません、ご主人様。どうぞお気遣いなく」
「う、うん……な、ナナミ」
「はい、どうぞ私にはお構いなく、お夕飯が出来るまでおくつろぎください、ご主人様」

「あ、うん……了解」

そうは言っても、やはりそわそわしてしまうし、どう接したものかと考えてしまう。

初期設定では自分の好みに合わせたパラメータにしたわけだけれど、それが本当に反映されているのかどうか……。彼女がタイプＳのＰＲだと解っていても、いきなりそれを確かめにちょっかいを出すのは気が引けてしまう。設定がうまくいっていなかったらただのセクハラご主人様だ。

だいたい、起動してすぐそっちを要求するのはがっつきすぎだろう。落ち着け、落ち着け……。

「ご主人様、お夕飯です」

「あ、ありがとう」

一人暮らし開始ひと月で既に自炊に挫折した僕だが、挫折前に買った食材がまだ冷蔵庫に残っていた。ナナミがそれで作ってくれた夕飯は、なるほど僕の自炊などよりずっと美味しかった。うう、これがパートナーロイド……。ミヨコさんで解っていたけど、偉大な発明だ……。

もちろんナナミは食べないので、テーブルで僕がひとりで食べていると、台所の片付けを終えたナナミがテーブルを挟んで僕の前に立った。好みのどストライクな顔に人形のよ

うな無表情で見つめられ、僕はどぎまぎする。
「ご主人様、次は何をいたしましょう？」
「え？　あ、えーと……」
「ご入浴なされるのでしたら、お風呂の用意をいたしますが」
「あー……じゃあそれで」
「かしこまりました」
ナナミはメイド服姿のまま浴室の方へ姿を消す。ほどなく、風呂掃除をしているらしい音が聞こえてきた。ああ、風呂掃除までしてくれるのだ……。これまた一ヶ月で既に面倒臭くなっていて、ここ一週間はシャワーばかりで済ませている僕である。ああ、なんてありがたい……。
そうして僕が夕飯を食べ終える頃には、ナナミは風呂掃除を終えて戻って来た。
「ごちそうさま。……美味しかったよ」
「恐縮です」
言い添えた言葉に喜んでくれているのかどうかも、その無表情と無感情な声音からはよくわからない。
ナナミが洗い物を片付けてくれているうちに、風呂が沸いたというアラームが鳴る。あ

あ、なんでもやってくれる人がいるって素晴らしい。
「じゃあ、僕は風呂入ってくる、けど」
「はい、どうぞごゆっくり」
浴室の方に向かいかけて、僕は台所のナナミに声を掛ける。洗い物の手を止めて振り向き、無表情にそう答えたナナミに、僕はひとつ唾を飲みこんだ。
……試してみるか？　さっきの初期設定が、実際どんな感じで反映されているのか……。
ベッドで確かめるのは、あからさますぎて気恥ずかしいし……。
「……ええと、ナナミ」
「はい、なんでしょう」
「その洗い物が終わったら……せ、背中流して、くれないかな」
「かしこまりました」
当たり前だけど、超あっさりＯＫが出てしまった。
僕はどぎまぎしながら服を脱いで、ナナミが掃除してくれた湯船に浸かる。大して広くもない浴室だけど、ちょうどいい湯加減で、誰かが用意してくれた風呂の心地よさを味わいつつ、僕は何度も唾を飲んでナナミが来るのを待った。
――そして、数分後。くもりガラスの向こうに、人影が現れる。

その人影は……明らかに、着ているものを脱ぎ去る動きをしていた。
僕は息を呑んでそれを見つめ……そして。
「ご主人様。お背中をお流しに参りました。お邪魔してよろしいでしょうか」
「はっ――はい」
声が上ずってしまった。「失礼いたします」との声とともに、浴室のドアが開く。
現れたのは、タオル一枚も身につけない、完全な裸身のナナミだった。

パートナーロイドの姿が限りなく人間そっくりであることは解っている。
セクサロイドであるタイプSは、そっちの方の再現度もしっかりしていると、話には聞いていた。
いや、僕は童貞なので、本物の生身の女体と比べることなんてできないけども……。
『あ、あと胸は普通だ。下はパイパンだけどいいか？』
『いいです』
――叔父さんとの昨日の会話が頭をよぎった。その通りだった。

大きすぎず小さすぎず、形のいい胸と、その先端にある桜色の綺麗な突起も。

綺麗な無毛の下腹部の、割れ目の先っちょも。
ナナミは何ひとつ隠すことなく、無表情のまま、浴室の入口に立っていた。
その美しい裸身に――僕は見惚れてしまう。
湯船の中で、反射的に欲望が硬く張り詰めてしまう。

そんな僕の、食い入るような視線を受けて。
――ナナミは、無表情のままに小首を傾げた。

「いかがなさいましたか？　ご主人様。私の身体に、何かおかしな点がありましたでしょうか？」
「……い、いや、綺麗だな、と思って」
「そうですか。ご主人様にお褒めにあずかり、光栄です」
「も……もう少し、そのままそこに立ってて……見てても、いい？」
「はい、どうぞご自由に」
ナナミは浴室のドアを閉めると、下腹部の前で手を重ねて立った。ああ、下腹部が……おまんこが手で隠れてしまう……。

「な、ナナミ。ちょっと手、もう少し上げて……」
「こうですか？」
「そ、そう。……うん、そのまま」
お腹の前で手を組んでもらう。ああ……これ、夢じゃなかろうか。
好みど真ん中ストライクの女の子が、何の羞恥心もなく僕の前に裸で立っている……。
おっぱいも、おまんこも、全部丸見えで……それを何も気にしていない無表情で……。
みっともないという意識は既に消し飛んで、食い入るように僕がその姿を見つめていると、ナナミは無表情のまま口を開いた。
「ご主人様は、私の身体をご覧になるのがお好きですか？」
「えっ、あ、はい……好きです」
「かしこまりました。では、いつでもお申し付けくださいませ」
――そう言ったナナミの表情は、ほとんど変わらなかったけど。
でも、ほんのちょっとだけ微笑んだように見えたのは、僕の錯覚だったのだろうか？

【パートナーロイド・タイプS-12型　《ナナミ》初期設定値】

一人称……「私」。

マスター呼称……「ご主人様」。

基本態度……「従順・好意」ＭＡＸ。態度変化「不変」。

性知識……ゼロ。

羞恥心……ゼロ。

特記事項――感情抑制型につき、感情表現は希薄。

2

「ご主人様、痛いところや触られたくないところなどございますか」
「いや……特にないです」
「かしこまりました。では、お背中お流しします」
狭い浴室。ほとんど密着するような距離で、裸のナナミに垢すりタオルで背中を擦られる。
目の前の湯気でくもりがちな鏡にチラチラと映る、ナナミの裸身。
他人に背中を流されるこそばゆい感覚に、僕は黙って悶々とするしかない。
さっきまで見せてもらっていたナナミの裸身のせいで、ペニスはガチガチで収まりそうになかった。
「力加減はいかがでしょうか」
「あ……う、うん、ちょうどいい……と思う」
無感情な声。さっきの裸身を見せてくれたのもそうだけど、性知識ゼロ、羞恥心ゼロに

設定したのは僕自身とはいえ、なんというかこう、実際にここまで平然と狭い浴室に裸で一緒にいられると、どう反応したらいいかわからない。

これ、最初から性知識マックスとかにしてたら、身体で洗ってくれたりしたんだろうか？

それはそれで心臓に悪そうだけど……。

彼女は僕のパートナーロイドだ。しかもタイプSの。もっと開き直って、あけすけに欲望をぶつけたって誰に怒られるわけでもない。ないのだが……。ううむ、自分がこれほど小心者だったとは思わなかった。単に女性への免疫がないだけか。切ない。

「お流しします」

「あ、はい」

ざぶん、とお湯が背中にかけられる。はあ、と僕が息をつくと、背後でナナミが立ち上がる気配。

「御髪も洗わせていただいてよろしいですか」

「おぐし？　……ああ、髪の毛か。じゃ、じゃあお願い」

「かしこまりました。では、目を瞑ってくださいませ」

目を瞑ると、シャワーのお湯を頭から浴びせられる。それからナナミの手でシャンプーが頭の上で泡立てられる。うう、他人に髪を洗ってもらうなんて、床屋以外ではいつ以来

だろう……。
「かゆいところなどございませんか」
「だ、大丈夫」
これじゃまるっきり床屋だな……。目を瞑ってるので少し気が楽だ。
再びシャワーで頭を洗い流され、それからリンス。ああ、至れり尽くせり……。
「終わりました、ご主人様」
「あ……ありがとう」
「他に何かご要望はございますか」
ようやくリラックスできたところで洗髪も終わってしまう。顔を手で拭って目を開けると、鏡に映るナナミの無表情な顔。胸の突起がチラチラと見えて、股間で硬くなっているものに意識が戻ってしまう。
……お、落ち着け。大丈夫だ。さっきだって裸をガン見したって怒られなかったじゃないか。タイプSのPRなんだから当たり前だ。そもそも彼女はそのためにセクサロイドとしての機能を持っているのだ。だったら――変な遠慮なんてしない方がいい、はずだ。
「ご主人様、どうぞご希望があればご遠慮なくお申し付けください」
ナナミのその言葉が、僕の背中を押した。

ごくりと唾を飲んで、僕はくるりとバスチェアの上で身体の向きを変え、ナナミの方に向き直る。

ナナミは浴室のタイルに敷いたマットの上に正座していた。相変わらず、胸の突起も、下腹部も隠す素振りすらなく、膝の上で手を組んで僕を見つめている。

その感情のない視線が、僕の股間で反り返っている逸物に向いても、彼女の表情は全く揺らがない。……性知識も羞恥心もゼロに設定したもんなあ。そもそも勃起したペニスが何なのかもわかっていないのかもしれない。驚きや好奇心すら見せないのは、なるほど感情抑制型……。

ああ、それにしても本当に綺麗な裸身だ……。いつまででも見ていたくなる。

「ご主人様、また私の身体をご覧になりますか？」

「う、うん……。でも、それだけじゃなくて」

「はい」

「こ、今度は僕が、ナナミの身体、洗ってあげるよ」

我ながら完全に発言がセクハラ親父である。しかしナナミは、無表情に自分の身体を見下ろし、それから僕に向き直る。

「どうかお気遣いなく。ですが、ご主人様がどうしてもと仰られるなら構いませんが」

「……じゃあ、どうしても」
「かしこまりました。では、お願いいたします」
ナナミは石鹸で泡立てた垢すりタオルを僕に手渡して、マットの上に膝立ちになる。
僕はまた唾を飲んで――まず、彼女の胸に手を伸ばした。
いいんだよな？　怒られないよな？　絶対大丈夫だよな？
自問自答しつつ――僕の手は、その形のいい双丘を掴んだ。
むにゅ。
「うわっ……柔らか……！」
もにゅもにゅ。申し訳程度に垢すりタオルを当てながら、石鹸まみれの手で、僕はその柔らかな塊を手で弄ぶ。手の中でにゅるにゅる、ふにゅふにゅと形を変えるナナミのおっぱい。な、なんて素晴らしい触り心地……。これがおっぱい……！
撫で回すように胸を掌でなぞって、先端の桜色の突起に触れる。くりくりとした硬い突起を指でつまんでみる。ううっ、乳首も綺麗だ……。この硬めの感触がまた……。
ぱさりと垢すりタオルがマットの上に落ちるが、それはもうどうでもよかった。石鹸で泡だった手で、僕は夢中になってナナミのおっぱいを弄ぶ。柔らかくて弾力があって、いつまででも触っていたくなってしまう……。

「ご主人様、それほど念入りに洗っていただかなくても大丈夫ですが……」
と、頭の上から聞こえる冷静な声。顔を上げると、ナナミが無表情に僕を見下ろしている。
うっ、なんか怒られてるような気分になる……。というか、そうか、感情抑制型って、こういうことしても特に反応しないってことなのか。つまり、ナナミは僕が性的なことをしても、基本的に喘いだりとかの反応はしないのか……。そういえば叔父さんも『ただのマグロで萎えるって言う層もいる』って言ってたもんな……。
「い、嫌だった？」
僕がおそるおそるそう問うと、ナナミはゆっくりと首を横に振った。
「いえ、そのようなことは全く。私が不愉快に思っているように思われたのでしたら、申し訳ありません。ご主人様にこの身体を洗っていただけて、大変光栄に思っております」
「じゃあ……こうされて、嬉しい？」
「はい、とても嬉しいです、ご主人様」
どこまでもナナミは無表情のまま、平板な声のまま。
でも、その言葉に嘘はないはずだと思えた。何しろ、彼女はＰＲなのだから……。
ああ、もう我慢できない。彼女が喜んでくれるなら、僕は欲望のままに振る舞ってしま

おう。
「なら……他のところも、洗っていいかな」
「はい、どうぞご主人様のしたいようになさってくださいませ。私は、ご主人様のしてくださることでしたら、どんなことでも嬉しく思います」
「じゃあ――」
僕は石鹸で滑る手を、ナナミのおっぱいから脇腹に滑らせて――左手を後ろに回してお尻を撫で、右手はナナミの太股の間に滑り込ませた。お尻も太股も、おっぱい同様しっとりと柔らかい……。
「次は、ここ……洗ってあげるね」
太股の間に滑り込ませた右手で、僕はナナミの股間に触れた。つるつるの無毛の股間は、しっとりと僕の指に吸い付いてくる。指先がその割れ目に触れる。割れ目はシャワーのお湯なのか、それともそれ以外の何かなのかでしっとりと湿っていた。
ううっ、こ、これが女の子のおまんこ……。PRのものとはいえ、初めて触ってしまった……。なんか、ぷにぷにして、しっとりして、柔らかくて、ああ、語彙が足りない。
「はい、ありがとうございます、ご主人様」
僕に股間を触られて、あくまで平然とナナミは頷く。

その受け答えに促されるように、僕は掌全体でナナミのおまんこを包み込むようにして触れて、石鹸のついた手でそこを擦り始めた。

割れ目が指先に吸い付いてくる。柔らかなおまんこの感触が掌全体に伝わって、ああ……なんかもう天国……。こっちもずっと触っていたい……。左手でお尻も撫でて軽く揉んだりしてみる。ナナミはやっぱり反応しないけど、黙って僕の手にされるがまま。

「ご主人様、私の股間部を丁寧に洗ってくださり、ありがとうございます」

こかんぶ？　ああ、股間部……。この無機質な喋り方には合ってるけども。

というか、わざわざ性知識ゼロに設定したんだから、ここはやっぱりアレだよな。

「ナナミ。……ここは、おまんこ、って言うんだよ」

「おまんこ、ですか。記憶しました。……ご主人様に、私のおまんこを丁寧に洗っていただけて、とても嬉しいです」

くあああっ、たまらん。

エロ漫画でしか見たことがない淫語教えのシチュが現実に出来るなんて……。

無感情な喋り方が、根本的に何もわかっていない感じがして、尚更背徳感をそそる。

「ううっ……ナナミのおまんこ、柔らかくて……とってもいい触り心地だよ」

「光栄です、ご主人様。私のおまんこを触るのがお好きでしたら、どうぞご自由にお触り

ください」
ああっ、そんなこと言われたらそれだけで射精しそう。
というかもう限界だ。うう、射精したい……。
「な……ナナミ。僕の……お、おちんちんも、洗ってくれないかな」
「おちんちん……ですか」
「ここ、これ……ナナミの手で洗ってほしい」
「かしこまりました」
どんどん躊躇がなくなっていく僕である。お願いしてみると、ナナミは何の逡巡もなく、その手に石鹸を塗りたくって、僕のそそり立ったペニスへと手を差し伸べた。
にゅるんっ、とナナミの手にペニスを優しく包まれて、僕は思わず声を洩らす。
「うぁぁぁっ」
「ご主人様、大丈夫ですか。痛かったでしょうか」
「い、いや……気持ち良くて……うぅっ」
「気持ち良いのですか？　力加減はこのぐらいでよろしいでしょうか」
ナナミはきゅっと優しく僕のペニスを掴んで、石鹸でぬるぬるの手でペニスを優しく擦ってくれる。ううっ、自分でするより弱い力でもどかしいけど、でもこれはこれで……。

「あっ、ああ……気持ちいいよ、ナナミ。じっくり、丁寧に洗ってね……」
「かしこまりました」
「僕も、ナナミのおまんこ、綺麗にしてあげるから……」
「ありがとうございます、ご主人様」
にゅるるっ、とナナミの手が亀頭を優しく撫で、指先がカリ首をなぞる。
掌で裏筋をなぞられると、一気に快感が背筋に突き抜けた。
「うあああっ……」
快感に負けないように、僕はナナミのおまんこに触れた指に意識を集中する。
僕の指に吸い付いてくるナナミの割れ目。指先で割れ目を何度もなぞってやると、ナナミの中からとろりとした液体が溢れてくる感触が伝わってきた。……PRもちゃんと濡れるんだ。当たり前か。そのためについてる部分なんだしな……。
「ううっ……な、ナナミ。ナナミはおまんこ……気持ちいい？」
「……申し訳ありません、ご主人様。『身体を洗われて気持ちいい』という感覚は、私にはよくわかりません。ですが、ご主人様に手でおまんこに触れていただけることは、とても幸せです」
「そ、そうか……。ナナミが喜んでくれてるなら、良かった」

「お気遣いありがとうございます、ご主人様」
目礼して、ナナミは右手で亀頭を撫で回し、左手では玉袋の方を撫で回してくる。股間の奥の方からこみ上げてくる射精欲。うううっ、もうダメだ……っ。
「ごっ、ごめんっ、射精るっ」
びゅるっ、びゅるるるるっ、びゅくびゅくっ、びゅうぅぅ――っ。
ナナミの手の中で、快感が弾けて、白い欲望が溢れ出した。粘ついた僕の欲望はナナミの右手に受け止められて、びくびくと震えるペニスをナナミはじっと無表情に見下ろしている。
うああ、そんな平然とした顔で射精するところを見守られると、何か変な性癖に目覚めそう……。
「うあ……あはぁ……」
「大丈夫ですか、ご主人様」
「あ、ご、ごめん……ナナミの手、気持ち良すぎて……」
僕の答えに、ナナミは自分の右手に飛び散った白濁液をじっと見下ろした。
「ご主人様、これは何でしょうか」
――あ、そうだった。性知識ゼロなんだから、ナナミはザーメンも知らない設定になっ

ているのか……。

「こ、これは……ええと、ザーメン、といって……おちんちんが気持ちいいと出るものだよ」

「ザーメン……記憶しました。なるほど、ご主人様が気持ち良くなられた証と考えればよろしいのですね。ご主人様が気持ち良くなっていただけましたなら良かったです」

ザーメンまみれの右手を、ナナミはなんだか大事そうに握りしめた。

なんとなく、無表情な彼女が喜んでいるかどうかが少し解るようになってきた……ような気がする。気のせいかもしれないけれども。

ああ、それにしても、女の子に手コキ（なのか？）されて射精するのがこんなに気持ちいいとは……。ううっ、これからこのナナミと一緒に暮らすのか。なんだかもう、自分がどうなってしまうのか想像もつかない。

「ではご主人様、お流ししますね」

「あ、うん……」

シャワーで股間を洗い流される。ああ、人として堕落する感覚……。

それから僕も、ナナミの太股の間から右手を引き抜いた。もっといくらでも触っていたかったけれども、それはそれとしてしたいことがある。

「じゃあ、僕も流してあげるから……ええとナナミ、これに座って」
僕は自分が座っていたバスチェアを差し出す。ナナミは素直に受け取って、それに腰を下ろした。僕はマットの上に膝立ちになり、シャワーのノズルを手に取る。
「ナナミ、足、広げて」
「かしこまりました」
バスチェアに座って、一切の躊躇もなく大胆に足を広げるナナミ。ううっ、そんな大胆にパイパンおまんこ丸見えにされたら……。石鹸の泡で白く染まったそこの割れ目から、卑猥なピンク色が覗いている。僕はどこに視線を向けたらいいかわからないまま、その股間に、シャワーのお湯を当てて僕の手が塗りたくった石鹸を洗い流していく。
シャワーを止めると、泡が洗い流されて、お湯が滴るだけになったナナミのおまんこが、僕の眼前に改めて晒される。ぷにっと盛りあがったそこの柔らかい肉に走る一本のクレバス、そこから覗くピンク色の深奥……。こ、これが女の子のおまんこ……。改めて、こんなに間近で見たのは初めてだ。
「ご主人様、私のおまんこは綺麗になりましたでしょうか？」
「あ……ああ。ナナミのおまんこ、とっても綺麗だよ……」
「光栄です、ご主人様。私のおまんこをお気に召していただけましたなら、とても嬉しく

思います。どうぞご覧になるなり、お触りになるなり、ご主人様のお好きなようになさってくださいませ」

足を広げたまま、鼠径部に手を当てて、ナナミはそう言った。

お、お好きにって……。や、やっぱり、ここは……。

ごくり、と僕は唾を飲む。ペニスがまたガチガチに硬くなる感覚がした。

タイプSのPRとするのって、童貞を捨てるって言うんだろうか？

わからないけれど――ここはもう、最後まで行っちゃうしかないのでは。

ここで撤退するのは、据え膳食わぬはなんとやらというやつだ。

「す、好きにしていいんだよね？」

「はい、どうぞご自由に」

「じゃあ――今度は、ナナミのおまんこに……おちんちん、挿れさせて。ナナミのおまんこで、おちんちんを気持ち良くしたい……」

僕が膝立ちでにじり寄り、ペニスをナナミのおまんこに近づけると。

ナナミはじっと僕のペニスと自分の下腹部を見下ろして。

「かしこまりました、ご主人様。どうぞ、私のおまんこがお役に立てるのでしたら、ご自由にお使いくださいませ」

変わらない無表情と無感情な声で、そう答えた。

3

「ご主人様、私のおまんこに、ご主人様のおちんちんを挿れるというのは、どのようにすればよろしいのでしょうか？」
「い、いや、僕に聞かれても……ええと、おまんこ、ちょっと触るね」
「はい、どうぞ」
恥ずかしながら僕は童貞である。その上、ＰＲ相手に挿れる場所を間違えるという恥は避けたい。
足を広げたナナミのおまんこを覗きこんで、再び触れる。くぱ、と割れ目を押し広げてみると、綺麗なピンク色の襞が露わになった。こ、これがおまんこ……。どこまでリアルなのかは判断しがたいけど、タイプＳのＰＲのおまんこってこうなってるんだ……。
挿れる穴は……確か、前の方にあるのが尿道のはずだから……こっちだろうか？　僕は広げた割れ目の中に、おそるおそる人差し指を挿れてみる。途端、にゅるん、とぬめった感触とともに指が穴の中に吸い込まれ、きゅうっと締め付けてきた。こ、ここでいいみた

いだ、けど……ううっ、締め付けられる指が気持ちいい。こんな狭い穴に入るんだろうか？
「な、ナナミ。大丈夫？　痛くない？」
「はい、問題ありません。私のおまんこの穴に、ご主人様の指が入っているのがわかります。ここにご主人様のおちんちんが入るのでしょうか？」
「う、うん……じゃあ、ナナミはそのまま、足広げてじっとしてて」
「かしこまりました」
名残惜しさを覚えつつ、つぷ、と指を引き抜く。そして僕は膝立ちでナナミににじり寄ると、ペニスを握りしめて、その穴の入口へと先端をぐっと押し当てた。
にゅぷ、と柔らかくあたたかい感触が亀頭を包み込んで、それだけで射精しそうになる。ううっ、せ、セックス……。ＰＲ相手とはいえ、これから僕、セックスするんだ……。ナナミのおまんこに、おちんちん挿れて射精……くぅぅっ。
「じゃあ……い、挿れるよ」
「はい、どうぞ、ご主人様。私のおまんこを、ご自由にお使いください」
うあああっ、たまらん。
僕はナナミの腰を掴んで、ぐっと自分の腰を前に突き出した。にゅぷぷぷっ……とペニスが柔らかい感触に包まれて、にゅるんっ、と奥へと吸い込まれていく。とろとろの潤滑

油に導かれて、僕のペニスはナナミの身体の中に沈んでいく。
「うううううっ、ぁぁぁぁぁぁっ――」
ずんっ、と一気に根元まで僕のペニスが沈み込み、ぎゅううっ、と膣内の肉壁が僕のペニスを四方から握り潰さんばかりに締め付けてきた。背筋に痺れるような快感が突き抜けて、僕は呻くように悲鳴をあげる。な、なんだこれ……気持ち良すぎる……っ。女の子のおまんこ、オナニーするのとはまるで違う……っ！
「ご主人様、大丈夫ですか」
「う、うう……は、入った……。ナナミのおまんこに、僕のおちんちん、全部入っちゃったよ……」
「はい、ご主人様。私のおまんこの穴の中に、ご主人様のおちんちんが根元まで入っています。ご主人様、大丈夫ですか。痛くありませんでしょうか」
「うううっ……き、気持ちいい……。ナナミのおまんこ、気持ち良すぎるよ……っ。こ、こんなの、すぐ射精ちゃうよぉ……っ」
僕はぎゅっとナナミの身体にしがみつく。胸元に当たる、ナナミのおっぱいの柔らかな感触と、乳首の硬めのコリコリした感触。そっちを敢えて意識しないと、全身の感覚が締め付けられるペニスに集まって、すぐにでも射精してしまいそうだった。

せ、セックスって、こんな気持ちいいの？　ヤバくない？　それとも、ナナミがセクサロイド型だから特別に名器ってやつだったりするの？　うううっ……。

「ご主人様、どうぞご無理はなさらず。ご主人様が私のおまんこで気持ち良くなってくださっているなら、大変光栄です。ザーメンが出そうなのでしたら、どうぞ先程のように遠慮なくお出しになってください」

「うあああああっ」

耳元でそんなことを囁かれたら、それだけでもう限界だった。

どくっ、どくどくっ、びゅるっ、びゅううううっ、びゅるるるるるっ――。

ナナミの膣内で、僕の欲望が情けなく暴発する。挿れただけで即射精とは、あまりにも童貞すぎて我ながら泣けてくるが、出てしまうものは止められない。

びゅっ、びゅるっ、びゅ……。

「あ……ああ……あはぁぁぁ……」

僕はナナミにしがみついたまま、情けない早漏射精の快感に打ち震えた。そんな僕の背中を、ナナミの手が優しくさすってくれる。うああ……余計情けない……。

「ご主人様、大丈夫でしょうか」

「……ううっ、ご、ごめん、ナナミ……。こんな、いきなり……」

「どうしてご主人様が謝られるのですか？　私のおまんこで気持ち良くなっていただけたという証を頂戴できて、私はとても光栄です、ご主人様。私のおまんこにザーメンを出してくださり、ありがとうございます。とても嬉しいです」

僕を優しく抱きしめたまま、ナナミは耳元でそう囁いてくれる。

ああ……こんな情けない早漏チンポに、そんな風に優しくしてくれるなんて……天使か。

僕はナナミの肩を掴んで上半身を少し離して、彼女の顔を見つめる。さっきから全く変わらない無表情。気恥ずかしくなって、僕は視線を下に逸らした。

ナナミと僕の結合部から、どろりと白い液体が溢れている。射精して少し力をなくしたペニスを、ナナミの膣壁はきゅうきゅうと優しく締め付けてくれている。うう……気持ちいい……。

「ご主人様、私のおまんこはご満足いただけましたでしょうか」

「え、あ、う、うん……めちゃくちゃ気持ち良かった……」

「ありがとうございます。大変光栄です。私のおまんこの穴は、このようにご主人様のおちんちんを挿れていただき、ご主人様に気持ち良くなっていただくためのものなのですね。記憶しました。ご主人様、どうぞこれからはいつでも、私のおまんこの穴を自由にお使いになってくださいませ」

ぐは。そんなことを言われたら、またペニスが硬くなってしまう。
ナナミの膣内に入ったままのペニスが硬さを取り戻す。そのことに気付いてか、ナナミが結合部を一度見下ろした。
「ご主人様、私のおまんこの穴の中で、ご主人様のおちんちんが大きく硬くなられたようです」
「う、うん……。ナナミ、も、もう一回、ナナミのおまんこで射精していい……？」
「射精、ですか。それは、おちんちんからザーメンを出す行為のことでしょうか」
「そ、そうだけど」
「射精、記憶しました。つまり、ご主人様はもう一度私のおまんこの穴でおちんちんを気持ち良くして射精されたいのですね」
「……はい」
そう即物的に言われるとなんかこう……。いやでもこれはこれで……。
「かしこまりました。大変光栄です、ご主人様。どうぞお好きなだけ、私のおまんこの穴に射精なさってくださいませ」
「うううう、ナナミっ……！」
たまらず、僕はもう一度ナナミに強くしがみついて、今度は遠慮なく腰を揺すった。

ずぷぷぷぷっ……ずんっ。ずずずっ、ずぷぷぷぷっ……ずんっ。
腰を引くときゅうっと吸い付いてくるナナミの膣壁。それを掻き分けるように奥に突き入れる瞬間の摩擦が、僕の脳髄をあっという間に痺れさせる。うあああっ、なんだこれっ、気持ち良すぎて頭がおかしくなりそう……っ！　おちんちんが溶ける……！　全身が快感で溶けてしまいそうだ。
「うぁぁぁっ、ナナミっ、ナナミぃっ」
「はい、ご主人様。私のおまんこの穴は気持ちいいでしょうか？」
「すっ、すごいっ、すごいよナナミっ……こんなのっ、こんなのもう、ナナミのおまんこじゃなきゃ満足できなくなる……っ！」
「それは大変光栄です、ご主人様。……ご主人様は私のおまんこの穴でおちんちんを擦られると気持ちいいのですね」
「うんっ、うんっ、ナナミのおまんこにおちんちん締め付けられて溶けそう……っ。な、ナナミはどう？　おまんこにおちんちん挿れられて、おまんこの中擦られて、きっ、気持ちいい……？」
「申し訳ありません、ご主人様。私には『気持ちいい』という感覚がよくわかりません。ですが、ご主人様のおちんちんが、私のおまんこの中で動かれて、どくどくと脈打ってい

らっしゃることはよくわかります。これがご主人様が気持ち良くなっていらっしゃるということでしたら、私はそのことがとても幸せで、嬉しく思います」

「うううっ……」

無表情、無反応。僕に何回ペニスで膣奥を突かれても、ナナミは喘ぎ声ひとつあげない。性感というものをそもそも彼女は一切感じていないのかもしれない。

でも、彼女は優しく僕の背中をさすって、僕におまんこを突かれることを嬉しいと囁いてくれる。

マグロだって？　いいじゃないか。だってナナミは嬉しいと、幸せだと言ってくれているんだ。だったらそれでいいじゃないか……！

「じゃ、じゃあ、ナナミはっ、おまんこにおちんちん挿れられるの、好き？」

「はい、ご主人様。私はおまんこにご主人様のおちんちんを挿れられるのが好きです。ご主人様が射精なさってくださるのが好きです。ご主人様に私のおまんこを使って気持ち良くなっていただけるのが幸せです。ですからどうぞご主人様、私のおまんこでたくさん気持ち良くなってくださいませ」

「うぁぁぁぁっ、ナナミっ、ナナミいいいっ――！！！！」

びゅるるるるるっ、びゅうううううっ、びゅくびゅくびゅくっ、びゅっ――。

たまらず、僕は三度目の射精。三回目なのに勢いはさっきより強いぐらいで、僕は欲望のありったけをナナミの中に白濁液としてぶちまけた。

「うぁぁぁぁぁぁ……」

「お疲れ様です、ご主人様」

快感に腰が抜けて、僕は浴室のマットの上にへたり込む。にゅぽん、と力をなくしたペニスがナナミの膣内から抜け出て、ナナミのおまんこの割れ目からはトロトロと僕の吐き出した白濁した欲望が溢れ出した。

「ご主人様、大丈夫ですか」

「う、うん……気持ち良すぎて腰抜けそう……。あ、ありがとう、ナナミ……。ものすごく気持ち良かった……。気持ち良すぎて頭おかしくなりそうだよ……」

「こちらこそありがとうございます、ご主人様。ご主人様が気持ち良くなっていただけた証を、こんなにたくさんおまんこの中にいただけて、たいへん幸せです」

無表情のまま、ナナミはお腹のあたりをさするように手で押さえる。とろりと割れ目から滴る精液。うう、溢れザーメン、エロすぎ……。

「ご主人様、おちんちんが小さくなっておいでですが」

「あ、こ、これは射精したから……」

「……理解しました。ご主人様のおちんちんが大きくなられるときはそこにザーメンが溜まっており、射精されるとザーメンが抜けて小さくなられるのですね」
「……う、うん、まあ、だいたいあってる……かな」
「記憶しました。では、またおちんちんにザーメンが溜まりましたら、いつでもお申し付けください。ご主人様が射精されたくなりましたら、またいつでも私のおまんこをご自由にお使いくださいませ」
僕の手を取って立ち上がり、狭い浴室の中でナナミは小さく一礼する。
その股間から、マットに僕の精液がぽたぽたと垂れていた。うう、これもエロい……。
「ご主人様。そろそろ浴槽に戻られないと身体が冷えてしまうかと思います」
「あ、う、うん」
「私はどうすればよろしいでしょうか。ここに立ってご主人様にまた裸身をお見せすればよろしいでしょうか。浴槽に入られながら、胸部やおまんこを触られますか」
「え、ええと……いや、ちょっとひとりでゆっくりしたいから、先に上がっててくれるかな」
さ、さすがにこれ以上興奮させられると本気でのぼせそうだ。ナナミの裸身は名残惜しいけど、これからいつだって見られるってことだよな……うん。

「かしこまりました。では、どうぞごゆっくり」
僕が浴槽に戻って肩までお湯に身体を沈めると、ナナミはまた一例して浴室を出ようとする。
「あ、待ってナナミ」
「はい、なんでしょうか」
「……おまんこに僕が出した精液、床にこぼれないようにちゃんと洗ってね」
「承知しました」
ナナミはシャワーノズルを手に取って、バスチェアに腰を下ろし、足を広げておまんこにお湯を当てて僕の中出しザーメンを洗い流し始める。ううっ、羞恥心ゼロでそんな格好見せられたら……。
「な、ナナミ。……僕がやってあげようか」
「よろしいのですか、ご主人様。どうぞお気遣いなく」
「いや、やってあげるよ。こっち向いて」
もう一度僕は浴槽を出て、足を広げたナナミの前に膝をつき、そのおまんこを覗きこむ。シャワーのノズルを受け取って、お湯を当てながら、ナナミのおまんこの穴に人差し指を差し込んだ。きゅうきゅう締め付けてくるぬるぬるの膣壁を掻き分けて中を指でまさぐる

と、トロトロと僕の精液が指を伝って溢れてくる。
うう、これなんかすごい背徳感……。ああ、指も気持ちいい。
「うーん……僕、こんなに出したんだな……」
「はい、ご主人様にたくさん射精していただけて嬉しく思います」
「ああ……ナナミのおまんこ、中出しした後でも綺麗だな……好き……」
「中出し、ですか」
「あ、ええと……おまんこの中で射精すること」
「中出し、記憶しました。ご主人様に中出ししていただけた私のおまんこを、ご主人様がお気に召していただけていること、とても光栄です」
うーん、なんかよくわかってなさそうな反応……。いや当たり前か。
僕がナナミのおまんこをむにむにと弄んでいると、ナナミは僕を見下ろして口を開く。
「ご主人様、それほど私のおまんこをお気に召していただけましたのなら、ご主人様に常時おまんこをお見せできるよう、ご主人様の前では常に服を着用せずにいることも可能ですが、いかがでしょうか」
「……え？　つまり、いつでも裸でいるってこと？」
「はい。ご主人様が喜ばれるのでしたら、喜んで」

そ、それは……し、刺激が強すぎる……。
「い、いや……服はちゃんと着てほしい、かな、うん」
「かしこまりました。出過ぎた申し出、申し訳ありません」
「いや、いやいや、ナナミがそう言ってくれるのは嬉しいよ、すごく。……僕が見たいときに見せてくれればいいから」
「承知しました、ご主人様。では、いつでもお申し付けくださいませ」
ふう、と僕は息を吐く。ナナミのおまんこからは、トロトロとまだ僕のザーメンが溢れてシャワーに洗い流されていた。

4

ナナミが浴室を出て行ったあと、僕は湯船に浸かって天井を見上げ、大きく息を吐いた。童貞を捨てた……と言っていいのだろうか？　わからないけれども、とにかく夢のような体験だった。ナナミのおまんこ、めちゃくちゃ気持ち良かった……。しがみついたナナミの身体も、おっぱいも、何もかも柔らかくて気持ち良くて……夢みたいだけど、夢じゃないのである。ナナミはこれから僕のパートナーロイドとして一緒に暮らすわけで、つまりこれからは、毎日いつでもナナミとセックスできるというわけで……。

ううう、ヤバい。そんなの、僕の身体、保つんだろうか……。というか、なんでまた元気になりつつあるんだ我が息子よ。もう三回も出したあとだろう。

「ああ……はぁぁぁ……」

いかんいかん、このまま呆けていたらのぼせてしまう。いい加減身体も温まったし、僕はバシャバシャと顔を洗って、風呂を出ることにした。

浴室のドアを開け、すぐ脇の棚のバスタオルを取ろうとすると、ナナミの声。

「ご主人様、入浴はお済みになりましたか」
「な、ナナミ？　あ、う、うん、お風呂出たけど……」
「では、お身体お拭きします」
「うえ？」
バスタオルを掴んだまま振り返ると、メイド服姿に戻ったナナミが脱衣スペースに入って来るところだった。素っ裸で立った僕に表情ひとつ変えず（いやそれは元々そうだ）、ナナミは僕の手にしていたバスタオルを受け取り、僕の身体を当然のように拭き始める。まずは頭を拭かれ、首から肩へ、腕へ。な、なんだこれ、王侯貴族か何かか。
「な、ナナミ、何もそこまでしなくても……」
「お嫌でしたか」
「あ、いや……嫌ではない、けど」
「では、お任せくださいませ」
いや、お任せくださいと言われても……。
ナナミの手にしたバスタオルが背中を拭い、お腹に回り、そして下腹部へ。
つまり――また半勃起しているペニスへ、ナナミの手がバスタオル越しに向かう。
「ご主人様。またおちんちんが硬くなられているようですが」

「あ、だ、大丈夫……」
「どうぞご遠慮なさらず。また私のおまんこをお使いになって構いません」
ううっ、だからそんな平然とした顔でそんなこと言われたら、困る。
露出のほとんどない、長袖ロングスカートのメイド服姿のナナミ。その姿に、先程の裸身がダブって、ペニスがまたますます硬くなってしまう。
「いや……え、ええと、ここは狭いから……。ナナミ、あとは自分でやるから、ちょっと向こうで待ってて」
「かしこまりました。では、ご主人様のお着替えを取って参ります」
ナナミはぺこりと一礼してバスタオルを僕に返し、脱衣スペースを出て行く。僕が大きく溜息をついて残りの部分を拭き、勃起したペニスをどうにか誤魔化しながら腰にタオルを巻いて脱衣スペースを出ると、すぐ脇でナナミが畳まれた僕のシャツとパンツを手に待機していた。
「わっ、ナナミ」
「ご主人様、肌着はこちらでよろしかったでしょうか」
「あ、う、うん、ありがとう……ええと、ちょっと向こう向いてくれる？」
「はい」

ナナミが背を向ける。うう、やっぱり気恥ずかしいな、これ……。そう思いながらナナミの持ってきたシャツとパンツを身につける。ズボンは……無い。ナナミには判断つかなかったから自分で選べってことかな。ううん、下着だけで女性の前を歩き回るのは……って、今さらか。

と、視線を巡らすと、ナナミはいつの間にか冷蔵庫の方に歩み寄っている。何をしているのかと思っていると、ほどなくナナミは麦茶の入ったコップを持って戻ってきた。

「ご主人様、どうぞ、お飲み物です」

「あ、ありがとう……」

コップを受け取り、ダイニングの椅子に腰を下ろして、麦茶を一気に飲み干す。風呂上がりの身体に冷たい麦茶が染み渡る。くううっ、たまらん。

はあ、とコップを置いて大きく息を吐くと、ナナミは僕の横に歩み寄ってきた。

「ご主人様。本日はこの後なにかご予定はございますか」

「え？　今日？　今日は特にもう何も……明日の大学の支度だけかな。課題とかも特に無いし、寝る前にちょっと準備すればいいだけだから……何もないよ」

「把握しました。では、明日のご予定はいかがでしょうか」

「明日は……大学が二コマ目からだから、九時ぐらいに起きて十時前までに家出ればいい

かな」
「かしこまりました。では、明日は朝の九時にご主人様が起床されるようにいたします。お帰りは何時頃になりますでしょうか」
「帰りは……六時半ぐらいかな。五コマ目まであるから」
「承知しました。昼食のお弁当と、夕飯の支度は必要でしょうか」
「え？　あ、作ってくれるなら、両方お願い」
「かしこまりました。それでは明日、ご主人様が大学へ行かれている間、食材の買い物をしてきてもよろしいでしょうか」
「え、買い物？　ナナミひとりで？」
「はい。近隣の地図データはダウンロード済みですので、どうぞご心配なく」
ああ、なんかとてもパートナーロイドっぽい。そうだ、ナナミの本分はこうやって日常の雑事を代行してくれることだもんな。タイプＳとしての性行為の機能はあくまでオプションなのだ。
言われてみれば、パートナーロイドが単体で買い物している姿など別に珍しくもない。このメイド服姿も、ＰＲとしてはまあ、目立つというほどでもないか。
「解った。じゃあ、それもお願い」

「承知しました。夕飯のご希望や、食べられないものはございますか。特にご指定がなければ私の判断でメニューを決めさせていただきますが」
「うーん、アレルギーとかは無いけど……生のトマトはダメなんで、それだけはパス。あとは、魚より肉が好きかな」
「記憶しました。では、今後は肉料理を中心にお食事のメニューを決定いたします」
うう、一人暮らし開始ひと月で既に面倒臭くなったことを全部やってくれる……。これがパートナーロイド。強い。あまりにも強い。便利とかそういうレベルではない。こんなの、一度使ってしまったら二度と手放せなくなるやつでは？
「それではご主人様、私は待機しておりますので、何か御用があればお呼びください」
「え、あ、うん」
僕が頷くと、ナナミは一礼してすっと退くと、そのままダイニングの壁際に立って目を閉じた。ああ、漫画とかアニメでよく見る、主人が応接室で客と話している間、ドアのところにずっと立ってるメイドさんの姿みたいだけど……。
いかんせんここは１ＤＫの学生向け賃貸マンション。ダイニングと寝室の間にドアもないわけで、どう考えても部屋のどこにいようとナナミの姿が目に入ってしまう。その状況でナナミを放置して何か別のことに集中できるほど、僕の神経は図太くない。

「……ナナミ」
「はい、ご主人様。何か御用でしょうか」
呼びかけてみると、ナナミはすぐに目を開けて顔を上げた。
「ええと、そこにずっと立ってるの？」
「いけませんでしたか。申し訳ありません。では、どこで待機すればよろしいでしょうか」
「いや、そういう問題じゃなくて……」
パートナーロイドだから、別にずっと立ってても疲れたりはしないんだろうけど、だからといって立ちっぱなしにさせておくのは気が咎めるのである。彼女がうちに来て数時間でそこまで割りきれるわけがない。
寝るにはまだあまりにも早すぎるし……じゃあ、ナナミに何をしてもらおう？
何を……って、そりゃやっぱり……アレか？　アレなのか？
ううう、思いだしたら収まってた愚息がまた自己主張を……。
参った。何もさせないでナナミを放置するのは気が咎める、じゃあ何かしてもらおうと考えると、そっちのことしか思いつかない。これじゃただのスケベマスターだ。でも……うう、お風呂で僕が何をしても「嬉しい」と言ってくれたナナミの声が蘇る。い、いいのか？　いいんだよな？　僕が何をお願いしてもナナミが喜んでくれるんであれば……。

僕は溜息を押し殺して、もう開き直ることにした。ええい、誰に見られているわけでもなし。誰に憚ることもなし。ナナミは僕のＰＲだ！　どう扱っても僕の勝手じゃないか！

「ナナミ、こっちおいで」

「はい、ご主人様」

僕が意を決して手招きすると、ナナミはすっと足音もほとんどたてずに歩み寄ってくる。僕はダイニングの椅子に腰掛けたまま、ナナミに向き直り、改めてナナミのメイド服姿を上から下までじっくり眺めた。

長いさらさらの黒髪。ゆったりしたメイド服の上からだと盛り上がりがわかる程度の胸。ロングスカートに隠れた腰回り。……うん、何度見てもかわいい。僕の好みのど真ん中ドストライク。こんな女の子を好きにしていいというのなら、その役得を存分に味わおう。

決めた、僕は恥を捨ててスケベになる！

「ナナミ。……お風呂ではおまんこ使わせてくれてありがとう。気持ち良かったよ」

「恐縮です、ご主人様。私こそ、ご主人様に気持ち良くなっていただけて嬉しく思います。また私のおまんこをお使いになりますか？」

「ナナミは、僕におまんこ使ってほしいの？」

「はい。いつでもご主人様に、私のおまんこで気持ち良くなっていただきたく思います」

ああ、平然とした無表情でこんなこと言ってくれるナナミ……好き……。
「じゃあナナミ、スカートめくってパンツ見せて」
「かしこまりました」
僕が命じると、ナナミはスカートを掴んでゆっくりとたくし上げていく。
メイド服の長いスカートが捲れ上がり、内側の白いフリフリの中から露わになるナナミの両足。そしてその付け根の下腹部は、シンプルな白いショーツに覆われていた。
ううっ、女の子が自分からスカートめくってパンツ見せてくれるシチュエーションが現実にできるなんて……。タイプSのPRって素晴らしい。素晴らしすぎる。
無表情にスカートをたくし上げて下着を晒したナナミは、僕を見つめて口を開いた。
「ご主人様、これでよろしいでしょうか」
「うん、いいよナナミ……。かわいいパンツ穿いてるんだね」
「お褒めにあずかり恐縮です」
「パンツの上からおまんこ触っていい？」
「もちろんです。どうぞご自由にお触りください」
もちろんあっさり許可が下りる。僕は椅子を下りてナナミの前に膝立ちになると、ショーツの上からそのおまんこに触れた。さらさらした布地越しに、ぷにぷにと僕の指先に弾

力を返してくるナナミのおまんこ。割れ目をショーツの上からなぞると、布地が割れ目に食い込んで、下着の上からおまんこの形が露わになる。うわ、これ予想以上にエロい……。
「はあ……ナナミのおまんこ、パンツの上からでも触り心地最高……」
「ありがとうございます、ご主人様。下着越しにおまんこを触っていただけるのも、とても幸せです。ご主人様に私のおまんこをそこまでお気に召していただけたこと、心から光栄に思います」
「そんなに僕におまんこ好かれて嬉しいなんて、ナナミはエッチだなぁ」
「……ご主人様、エッチとはどのような状態を指すのでしょうか」
「あ、それもか……」
そうだった。ナナミの性知識はゼロなのだった。エッチという語彙も無かったか……。
「エッチって言うのは……そうだなあ、僕におまんこやおっぱいを見られたり、触られたり、僕のおちんちんを気持ち良くして射精させたりすることが好きだってことだよ」
「記憶しました。その意味であれば、確かに私はエッチであると言えます。ご主人様に身体を見ていただいたり、触っていただいたり、ご主人様のおちんちんを気持ち良くしてさしあげて、ご主人様に射精していただくことが、私は好きです」
「ううっ……ナナミのエッチ」

「はい、ご主人様。私はエッチですので、どうぞ私のおまんこをお好きなようにお使いください。それでご主人様に喜んでいただければ、私はそれが一番の幸せです」
「うん、じゃあ……ナナミのおまんこ見たいから、パンツ脱がすよ」
「ご主人様に脱がせていただけるのですか。恐縮です。よろしくお願いいたします」
ナナミのショーツに手を掛け、僕はゆっくりとずり下ろしていく。下ろすたびにくるくると丸まっていくショーツ。
股間の割れ目が露わになって、太股のあたりまで下がったところで、僕は手を止めた。ナナミのショーツは太股のところで丸まって止まる。うん、全部脱がすより、この脱ぎかけがエロい……。
つるつるぷにぷにの、ナナミのパイパンおまんこ。僕はそれをぐっと顔を近づけて眺め、指先で割れ目の周りの肉をぷにぷにと軽く揉む。ああ……触ってるだけで幸せになれるやつ……。
「はあ……ナナミのおまんこ……好き」
「はい、下着を脱がせてくださり、ありがとうございます、ご主人様。おまんこをご主人様に間近でご覧になっていただけて、とても幸せです」
「そんなに僕におまんこ見られるの好きなら、ナナミはいつでもおまんこ露出した格好の

方が幸せかな？」
「ご主人様がそれを望まれるのでしたら。私は何よりもご主人様に喜んでいただくことが幸せですので、ご主人様が私のおまんこをご覧になることを望んでおられないときまで、私からお見せしようとは思いません。ご主人様は私が常時おまんこをお見せした方がよろしいですか？」
「うーん、悩ましいな……。やっぱり、とりあえずは見たいときだけでいいよ。今は見たいし触りたいから、いっぱい見るしいっぱい触るね」
「承知しました。どうぞ私のおまんこをお好きなようになさってくださいませ」
うううっ、たまらん。僕はむにむにと揉んでいた指を、ナナミの割れ目の中に滑り込ませた。つぷ、と中指がナナミの膣内に潜り込み、きゅうっと膣壁が指先を締め付ける。ああ、指が射精しそう……。
「ご主人様、おまんこに指を入れてくださるのですね。ありがとうございます」
「指入れられるのも好き？」
「はい。ご主人様の指がおまんこの穴の中に入る感覚、とても幸せです」
「うううっ、ナナミは本当にエッチだなぁっ」
じゅぽじゅぽっ、と中指をナナミの中で動かすと、トロトロとした潤滑液がナナミの膣

内から溢れて手に伝ってくる。ああ、ナナミ自身は性感を感じていないのだとしても、おまんこがちゃんと濡れるというのはこう……なんか……背徳感というか……。

ちゅぽんっ、と指を引き抜き、てらてらと指を濡らした液体を、僕はぺろりと舐めてみる。……あれ、なんか美味しいかも……？

「……ナナミ、おまんこ舐めてみてもいい？」

「はい、もちろん構いません。私の身体は清潔ですし、体内から分泌される液体についても害はありませんので、ご主人様に舐めていただいても問題はありません」

ああ、この突然のひどく即物的な発言がまた……。こういうところがアンドロイドなんだなと思わせるナナミだ。でも、そういうところも含めて興奮してきてしまう自分は、なんかどんどん変な性癖に目覚めてきているような……。

「ご主人様がお望みでしたら、どうぞ私のおまんこをお舐めくださいませ」

「ううっ、じゃあナナミ、その椅子に座って」

「かしこまりました」

さっきまで僕が座っていたダイニングの椅子にナナミを座らせ、太股に溜めていたショーツを足下まで下ろさせる。そのままショーツは片足首に引っかけさせて、僕はナナミの足を広げた。くぱぁ、と僕の眼前でピンク色を露わにするナナミのおまんこ。ううっ……

なんか、美味しそう……。

僕はナナミの前に膝を突いて、その太股の間に顔を突っ込む。

「そ、それじゃあ……ナナミのおまんこ、いただきますっ」

「はい、どうぞご主人様、私のおまんこを召し上がってくださいませ」

たまらず、僕はそのままナナミのおまんこにむしゃぶりついた。

5

僕自身としては、クンニにそれほどこだわりがあるわけではなかった。

童貞なりの好奇心はあるけれど、ちょっと調べてみるだけでも現実では生臭い（いろんな意味で）話が聞こえてくるので、女の子のおまんこが良い匂いがして美味しいというのはエロ漫画とかの中だけのファンタジーなんだと理解するぐらいの分別はあった。童貞で分別も何もあったものではないが、何にしたって変な期待をして現実に裏切られるのは辛いものである。

――そう、思っていたのだけれど。

結論から言うと、ナナミのおまんこはそんな僕の変な分別を一撃で粉砕してしまった。タイプSのPR、恐るべしという話である。

「んっ、んむぅっ……はぁ、はぁ……れろ、れろ……ちゅぅぅっ……」

あ、これヤバい。ナナミのおまんこにむしゃぶりついた瞬間、電流のようなもので頭が痺れる感覚があった。衝撃。それは、僕が頭の中で勝手に創りあげていた「どうせ、現実

のクンニは別にいいものじゃないだろう」という予測を完膚なきまでに叩き壊す衝撃だった。

いやまあ、パートナーロイドにするクンニが現実のクンニと呼んでいいかと言われればアレだけども。それはそれとして――。

ナナミのおまんこは、本当に良い匂いがして美味しかったのである。

鼻腔をくすぐるその匂いも。

割れ目から舌を伝って口の中に注がれる蜜の味も。

思わず陶然とするほどに甘美だった。

え、ヤバ、なにこれ、女の子のおまんこってこんな美味しいの？　マジで？

いやいや、これはナナミがセクサロイド型だからで、つまりマスターがクンニしても不快にならないように最初からチューンされてるということだから……と、頭の中では理解しようとしても、その前に口の中に溢れるナナミの蜜の味と匂いが問答無用で僕の理性を焼き切っていく。

うわ、すご……。こんなの、いくらでも舐めてられる……！

僕は夢中になって、ナナミのおまんこを舌でまさぐり、溢れてくる蜜を啜り上げる。僕が舌で割れ目をなぞり、ピンク色の内側に舌先を滑り込ませてまさぐるたびに、こんこんと泉のように湧き出てくるナナミの蜜。その甘美な味と匂いに包まれて、僕は陶然としながらナナミのおまんこをもぐもぐと味わう。ああ……なんだこれ……。なんでこんなに美味しいの……。

「ご主人様、私のおまんこの味はいかがでしょうか？」

「ううっ……美味しいっ、美味しいよっ、ナナミのおまんこ……っ！　んちゅうぅぅっ、んむぅっ、ぷあぁぁ……はぁっ、はぁ……。すごい、こんなに美味しいなんて思わなかった……。ナナミのおまんこ、味も匂いも最高だよ……っ」

「光栄です、ご主人様。私のおまんこを美味しく召し上がっていただけて、とても嬉しいです。どうぞご主人様のお好きなだけ、おまんこをお舐めくださいませ」

ダイニングの椅子に座り、スカートを持ち上げたまま、ナナミは変わらない無表情で僕を見下ろしてそう言う。うう、言われなくても舐めます、こんな美味しいおまんこならいくらでも舐めますとも……！

「んぷっ、ちゅぅぅっ……れろれろっ……。はぁ……ナナミ、おまんこ舐められるの、好き？」

「はい、ご主人様。ご主人様におまんこを舐めていただけて、とても幸せです。ご主人様の舌が私のおまんこを舐る感覚が好きです。ご主人様の舌がおまんこの中をまさぐってくださると、ご主人様が私のおまんこを、舌で舐めてくださるほどお気に召してくださったのだと理解できて、心から幸せになります。そんな私のおまんこを、ご主人様に美味しいと仰っていただけるのは、無上の喜びです」

「くぅぅっ……ナナミ……っ。美味しい、美味しいよ、ナナミのおまんこっ……」

そんなこと言われたら、舐めるの止められなくなっちゃうじゃないか……。

しかし、それにしても……ナナミは性感を感じていないはずなのに、舐めれば舐めるほどそのおまんこからは蜜が溢れてくる。

これ、どうなるんだろう？　このまま舐め続けたら、ナナミはイッてくれるんだろうか？

感情抑制型で何をしても表情や声は完全に無反応なナナミに、エクスタシーは存在するんだろうか……？

「ぷあ……。ナナミ、ナナミのおまんこから、舐めれば舐めるほどいっぱいお汁溢れてくるよ……。美味しいナナミのおまんこのお汁……」

「はい、ご主人様におまんこをご覧になっていただけたり、触っていただけたり、舐めていただけたり、ご主人様のおちんちんを挿れていただけたりすると、私のおまんこの穴か

らは自動的に潤滑液が分泌されるようです。ご主人様のお身体に害はないと思いますが、ご主人様は私のおまんこの潤滑液のお味がお好きですか？」

ああ、毎度根本的に即物的というか散文的なナナミの発言……。この無知な感じがいい……。

「ナナミ……この潤滑液のことは、ナナミも『おまんこのお汁』って言って」

「承知いたしました。ご主人様は私のおまんこのお汁がお好きですか？」

「うんっ、好き……。ナナミのおまんこのお汁美味しい……好き……」

「ありがとうございます、ご主人様。ご主人様が私のおまんこを舐めてくだされば、私のおまんこのお汁は分泌され続けますので、どうぞお好きなだけお召し上がりください」

ううっ、嬉しいけど、やっぱりそれって性感とは無関係に分泌されてるってことだよな……。どうせなら、こんな美味しいおまんこを舐めさせてくれるナナミをイカせてあげたいけれど……。

僕はナナミのおまんこを指で広げて、その先端に見えるクリトリスらしき突起を露わにする。ナナミのおまんこ、ちゃんとクリもあるんだし、ナナミが反応しないだけで本当はちゃんと性感を感じてるんじゃないのだろうか？

舌先でそのクリトリスを転がしてみる。……やっぱりナナミは無反応だけれど、割れ目

からはまたトロトロと蜜が溢れ出してナナミのスカートに染みを作っていく。
「ナナミ、やっぱり気持ちいいって感覚はわからない？　背筋がぞくぞくしたり、おまんこが変な感じになったりしない……？」
「はい、申し訳ありません、ご主人様。『気持ちいい』という感覚が私には理解できないようです。ご主人様の舌に舐めていただいているという感触は理解できますし、そのことは嬉しく幸せに思いますが、それ以上の身体的な感覚は特にありません」
うーん、これは感情抑制型というより感覚抑制型なのでは……？
「ただ、ご主人様。先程から、おまんこのお汁の分泌量が増加していることはわかります。ご主人様におまんこを弄っていただけるほどに、私のおまんこのお汁の分泌量は徐々に増加しているようです。これが、ご主人様の仰る『気持ちいい』ということなのでしょうか？」
「……うーん、そう、かなあ」
それがナナミなりの性感なのだろうか。声や表情は無反応でも、潤滑液――愛液の分泌量でどのくらい気持ち良くなっているかがわかる？
うーん、判別には経験が必要になりそうだ。
まあでも、それならもうちょっと舐めて反応を見てみよう。
僕は再び、ナナミのおまんこにむしゃぶりつき、舌で割れ目の中をまさぐって、溢れて

くる蜜を啜る。うん、確かに蜜の量が増えてる気が……。ああ、それにしてもいくら舐めても飽きのこない味だ。ううっ、美味しい……。

そうして、またしばらく僕がナナミのおまんこを舐め続けていると――。

「ご主人様、おまんこのお汁がどんどん溢れてきます。これが気持ちいいということでしょうか。私のおまんこが気持ち良くなれれば、もっとご主人様にもお喜びいただけるのでしょうか。ご主人様、私のおまんこのお汁が、溢れます、ご主人様、ご注意くださいっ」

「へっ？　――わぷっ!?」

ぷしゃっ、ぷしゃあああっ！

突然、ナナミのおまんこが僕の顔の前で潮を吹いた。ナナミの潤滑液――愛液の噴射が、むしゃぶりついていた僕の顔面に直撃する。僕は呆然とその汁を浴びながら、ナナミのおまんこの襞がヒクヒクと痙攣して、ぷしっ、ぷしっと潮を吹くのを眺めた。

――え？　これって……つまり。

「ご主人様、大変申し訳ありません。私のおまんこの潤滑液分泌システムが暴走してしまったようです。大丈夫でしょうか？」

ナナミが僕を覗きこむ。相変わらず平板な声だけど、どうやら慌てているらしい。

――潤滑液の分泌システムの暴走だって？　いやいや、それはつまり、アレだ。

「い、いや……大丈夫だよ。それより、ナナミ」
「はい」
「たぶんそれ、暴走とか不具合とかじゃないから。……僕がザーメン出すみたいに、ナナミのおまんこが気持ち良くなって、お汁をいっぱい出しちゃったんだよ」
僕が顔を上げてそう言うと、ナナミはしばし固まる。
「……診断プログラムを実行しました。体内機構にエラーは検出されませんでした。ということは、私のおまんこの潤滑液分泌システムは正常に動作したようです」
「やっぱりそうだ。――ナナミ、今のが気持ち良くなるってことだよ。僕が射精するのと同じ、ナナミも僕におまんこ舐められて、おまんこが気持ち良くなってイッたんだよ」
「イッた……ですか」
「う、うん、そう。女の子がおまんこ気持ち良くなることを、イクって言うんだ」
「記憶しました。先程の、おまんこのお汁の噴出が、イクということで、それは私のおまんこが気持ち良くなったということの証拠ということですね」
「うん、きっと……」
「理解しました。つまり気持ち良くなるということは、おまんこの潤滑液の分泌システム内の圧力が高まることなのですね。ありがとうございます、ご主人様。『気持ちいい』を

理解できました」
「……う、うん」
何か根本的にズレてるような気がするけど……。
まあ、どっちにしても喘いだりするのは今後も期待できなさそうだ。まあ、ナナミが完全な不感症型というわけでなく、絶頂ができるＰＲだったということは僕としても嬉しい。やっぱり、自分だけ一方的に気持ち良くなるのって気が引けるし……。
「しかし、申し訳ありません、ご主人様。断りもなくご主人様のお顔におまんこのお汁を噴出してしまいましたこと、お詫びいたします。お拭きいたしますね」
ナナミはメイド服からハンカチを取りだして僕の顔を拭ってくれる。
「いや、いいよいいよ、ナナミが気持ち良くなってくれたなら僕も嬉しい。これからも僕におまんこ弄られて気持ち良くなったら、遠慮なくイッて僕におまんこのお汁かけていいよ。僕、ナナミのおまんこのお汁好きだからさ」
「かしこまりました。寛大なお言葉、感謝いたします、ご主人様。しかし、今後はきちんと噴出してしまう前にご主人様にその旨お伝えするようにいたします」
「う、うん。……噴出って言い方はアレだから、イク、って言ってくれる？」
「承知しました。では、今度は私のおまんこがイクときはご主人様にそうお伝えします」

なんだろうな、この会話……。まあいいか。ナナミのおまんこ美味しかったし……。

苦笑して僕は息を吐き、それからまだトロトロと蜜をこぼしているナナミのおまんこをもうひと舐めしてあげる。

「ご主人様、もっと私のおまんこをお舐めになりますか」

「んー、ナナミのおまんこ美味しいからいくらでも舐められるけど……」

それはそれとして、ナナミのおまんこに集中していて忘れていた股間の盛り上がりが、いよいよ我慢できなくなりつつある。

僕はナナミの股間から顔を上げ、ナナミの前に立ち上がると、痛いぐらいに固くなったペニスをパンツの中から取りだした。ちょうどナナミの顔の近くに僕のペニスが屹立する。

「ああ、ご主人様、おちんちんがこんなに大きく硬くなっておいでしたか。気付かず申し訳ありません。どうぞ、私のおまんこをご自由にお使いになって射精なさってくださいませ」

「うん、それもいいけど……ナナミ。僕がナナミのおまんこ舐めたみたいに、今度はナナミが僕のおちんちん舐めてくれない？」

「かしこまりました。どのようにすればよろしいでしょうか？」

ナナミは持ち上げていたスカートを下ろし、僕のペニスを両手で包み込むように握った。

ううっ……ナナミのすべすべの手……。軽く握られただけで射精しそう……。
「ううっ……じゃあ、お口で頬張ってしゃぶって……。舐めたり、口全体で擦ったりして……」
「かしこまりました。では、ご主人様のおちんちんを、口に咥えさせていただきます。失礼いたします」
ナナミはそう言って、あーん、と大きく口を開け、僕のペニスを一気に口の中に拭くんだ。
にゅるんっ、と亀頭にまとわりつく舌と、あたたかいナナミの口内の感触に、一気に快感が背筋を突き抜ける。ナナミはそのまま喉奥まで一気にペニスを咥えこんだ。うあああっ、ナナミの口の中、気持ち良すぎる……！
「んむっ……んぐっ」
「うぁぁぁっ、ナナミ、ナナミぃっ」
たまらず、僕はナナミの頭を掴む。フリルつきのカチューシャを押さえるようにして、僕は思わず前屈みになってナナミの後頭部を覗きこんだ。
ああ、フェラチオされてる……。僕、ナナミにおちんちん咥えさせてる……ううっ。
「んっ、んむぅっ、ちゅっ、ちゅぅぅっ……れろれろ……ぺろ、んぐっ、んんんっ」

「うぁっ、ぁぁぁっ、くぅぅぅ――っ、き、気持ちいいっ、気持ちいいよナナミ……！」
ナナミは一度喉奥まで咥えこんだのを、顔を引いて唇をカリ首のところまで這わせた。そうして、れろれろと亀頭やカリ首を舌で舐め回し、鈴口や裏筋を責めてくる。うわっ、なっ、なんかっ、ちょっと、ナナミ、それっ、上手すぎないっ……？　いや、フェラされたのなんて初めてだけど、ヤバ、こんなの、早漏チンポになる……！
じゅぽっ、じゅぽぽっ、とナナミの口全体にペニスを扱かれ、舌で亀頭の敏感なところを舐られるたびに、僕はナナミの頭を掴んで情けない声をあげるしかない。うあああっ、無理っ、こんなの我慢できるはずがない……！
「うううううっ、ナナミっ、ごめんっ、もう射精るっ」
どくっ、どくどくっ、びゅるるるっ、びゅうううっ、びゅくびゅくっ！
僕は勢い良く、ナナミの喉奥に一気にザーメンを流し込んだ。腰が抜けそうなほどの快感とともに、僕の欲望がナナミの喉に溢れ出す。
「んんっ、んむっ……んぐっ、んく、んく……ごく、ごく……ぷぁ」
そんな、僕が無遠慮に吐き出したザーメンを、ナナミは一滴残らず綺麗に飲み干して、ゆっくりと僕のペニスから口を離した。ナナミの唇と僕の亀頭の間に、ザーメンの白い筋が一条伝わって、ナナミはそれも指ですくって口に運ぶ。

「ううっ……ご、ごめんナナミ、いきなり出して……」
「いえ、ご主人様におちんちんを口でしゃぶるよう言われましたときから、口の中に射精していただくつもりでしたので、問題ありません。ご主人様、私の口の中にたくさん射精していただき、ありがとうございます。気持ち良くなっていただけましたでしょうか？」
「う、うん……。めちゃくちゃ気持ち良くてすぐ出ちゃったよ……」
「光栄です。私の口がご主人様のおちんちんを気持ち良くできましたなら、とても嬉しいです」
「……ナナミ、ザーメン飲んじゃったよね？　大丈夫？」
「はい。水分を口から飲むという行為に問題はありません」
「そ、そう？　……深くまで咥えて、苦しくなかった？」
「大丈夫です。お気遣いありがとうございます、ご主人様。ご主人様のおちんちんを口いっぱいに頬張らせていただけて、大変幸せでした。その上、射精していただけたのですから、これ以上の喜びはありません。どうぞご主人様、私の口もお気に召していただけましたなら、いつでもお申し付けください。ご主人様のおちんちんを、いつでも口でしゃぶらせていただきます」
「ううううっ、ナナミ……っ。そんなに僕のおちんちん美味しかった……？」

「いえ、私には味覚の機能はありませんので、『美味しい』という感覚は理解できません。しかし、ご主人様のおちんちんを口で頬張り、口の中で射精していただき、ご主人様のザーメンを飲むという行為には喜びを感じます。そのことを指して『ご主人様のおちんちんが美味しい』と称するのでしたら、はい、ご主人様のおちんちんはとても美味しいです」

「ううう、ナナミっ、もう一回しゃぶって……！」

「はい、ご主人様。ご主人様の美味しいおちんちんを誠心誠意しゃぶらせていただきますので、どうぞお好きなだけ私の口の中に射精してくださいませ」

ああ――もう、こんなのどれだけ精力があっても足りない。

何をしてもナナミが喜んでくれるから、いくらでもエッチなことをしたくなってしまう。

再びナナミにペニスを咥えられながら、僕は思う。

――僕の身体、これから保つの？

6

結局、もう一回ナナミの口の中に射精した。
困ったことには、これで五回目なのに、まだ全然ムラムラが治まらない。
ナナミの愛液には催淫とか精力増強効果でもあるのだろうか……。
「んく、んぷっ……ご主人様、またザーメンを飲ませていただきありがとうございます。ご満足いただけましたでしょうか」
僕の吐き出したザーメンをしっかり飲み干して、ちゅぽんっ、と僕のペニスから口を離し、ナナミは僕を見上げる。
ナナミの唾液（口内潤滑液？）でテラテラと濡れた僕のペニスは、まだ硬く反り返ったままだ。
「う、うん。ナナミのお口最高だよ」
「恐縮です。ですが、まだご主人様のおちんちんにはザーメンが溜まっていらっしゃるようです。いかがいたしましょうか。もう一度私の口を使われますか？　それとも、またお

まんこをお使いになりますか？」
「うう……ナナミ、そのままま た、おまんこ見せて」
「かしこまりました。どうぞ」
ナナミがまた座ったままスカートをたくし上げ、おまんこを晒す。トロトロに潤ったままの、ナナミの綺麗なピンク色のおまんこが、手招きでもするみたいにヒクヒクと震えている。
ああ、もう駄目だ。ナナミのおまんこの甘美な味が口に蘇ってきて、ますますペニスが硬くなってしまう。いったいどれだけ出せば気が済むんだ、我が愚息よ。
でも、それでナナミが喜んでくれるから……こうなったらもう、自分の限界に挑むしかないじゃないか。僕の性欲は、全部ナナミが受け止めてくれるんだから。
「はぁ……っ、うう、ナナミのおまんこ……」
「ご主人様、どうぞ、いつでもおちんちんをお挿れくださいませ。それともまた、おまんこをお舐めになりますか？」
「ううっ、じゃ、じゃあナナミ、一回立って、それからテーブルに手を突いて、こっちにお尻向けて……」
「かしこまりました。こう、でよろしいでしょうか？」

立ち上がったナナミは、ダイニングのテーブルに手を突いて、こちらにお尻を向ける。僕はメイド服のスカートの上から、そのお尻を撫でた。むにゅ……と手が沈み込むような柔らかいお尻。ううっ、これが女の子のお尻の触り心地……。

たまらず、僕はナナミのスカートを一気にまくり上げて、そのかわいいお尻と、こちらに向けられた割れ目を晒した。ナナミのおまんこからは、既に溢れたお汁が太股に伝っている。

僕はその白いお尻を掴んで、ペニスの先端をナナミの割れ目にあてがった。

「ご主人様、今度はそちらからおちんちんを挿入されるのですか？」

「うんっ、ナナミ、挿れるよ……っ」

「はい、どうぞお挿れくださいませ。私のおまんこで、お好きなようにご主人様のおちんちんを気持ち良くなさってください。私のおまんこの中に、ご主人様のザーメンを注いでいただければ、これ以上の幸せはございません」

「ううっ、くぅぅぅっ――！」

その言葉に導かれるように、僕は遠慮なく一気にナナミの一番奥までペニスを突き込んだ。ずぷぷぷぷっ……！　と、ナナミの膣壁を掻き分けるように最奥まで飲みこまれていく僕の逸物。根元まで一気に入ったところで、ナナミの膣内はぎゅううっと強く締め付け

てきて、ぬるぬるに蕩けた膣壁がうねうねと絡みついてくる。うあああっ、気持ち良すぎる……！

テーブルに手を突いて僕に背を向けたナナミは、首だけこちらを振り向いて僕を見やる。

「ご主人様のおちんちん、入って参りました……。私のおまんこの中で、ご主人様のおちんちんが熱く脈打っていらっしゃるのを感じます。ご主人様、私のおまんこも、お汁の量が増えているのがわかりますでしょうか」

「うっ、うん、ナナミのおまんこ、トロトロで気持ちいいよ……っ」

「はい、ご主人様。ご主人様のおちんちんが入って参りました瞬間から、おまんこのお汁の分泌量がまた増加しました。ご主人様におまんこを舐めていただいたときと同じ反応です。これはご主人様のおちんちんが挿入されたことで、私のおまんこが気持ち良くなったという理解でよろしいでしょうか？」

「え、あ、うん、いいと思う……」

「記憶しました。では、ご主人様にこのままおまんこをお使いいただくと、私のおまんこが先程のようにイッてしまい、ご主人様におまんこのお汁を浴びせてしまう可能性がありますが、ご容赦いただけますでしょうか」

「い、いいよ、そんなの……っていうか、ナナミのおまんこのお汁ならいくらでも出して

いいから、僕はナナミにイッてほしいよ。ナナミが、僕のおちんちんでおまんこ気持ち良くなってイッてくれたら嬉しい……！」

「ありがとうございます、ご主人様。私がイクことで、ご主人様にお喜びいただけるのでしたら何よりです。ではご主人様、どうぞ私のおまんこでおちんちんを気持ち良くしてくださいませ」

「くぅぅぅっ、ナナミぃっ――！」

たまらず、僕はナナミのお尻を掴んで腰を振り始める。ナナミの柔らかなお尻に腰を打ち付けるようにして、ナナミの膣内でペニスを何度も往復させる。腰を引くと吸い付いてきて、腰を突き出すとぬるぬると擦れるナナミのおまんこ……ううっ、あああっ、セックス……！　僕、ナナミとまたセックスしてる……！

メイド服の背中に広がったナナミの長い黒髪に顔を埋めるようにしながら、僕はただ腰を振ることしか考えられない。全身の感覚がペニスに集まってしまったみたいで、ナナミのおまんこの感触のことしか考えられなくなってしまう。

ぐちゅっ、じゅぷっ、じゅぽぽっ、と僕のペニスが往復するたびに、ナナミのおまんこからはいやらしい水音がして、溢れてきた蜜が僕の足にも絡まってくる。ナナミの足下にポタポタと滴った蜜は、フローリングの床に小さな水たまりを作っていた。

「ううううっ、ナナミ、ナナミのおまんこすごいっ、すごいよ……！　一番奥突くたびに、すごい量のお汁溢れて……気持ち良すぎて頭おかしくなる……っ」
「はい、ご主人様におまんこを突かれるたびに、お汁の分泌量が増えております。私のおまんこは、ご主人様のおちんちんに穴の内側を擦られて、とても気持ち良くなっているようです。ご主人様がそれを喜んでくださるのが、何より嬉しく思います」
すごい量の愛液を垂れ流しているのに、他人事のように冷静な声で語るナナミ。でももう、僕はすっかり、そういうナナミの反応にこそ興奮するようになってしまっている。
「ああっ、ナナミ、ナナミぃっ……！」
「ご主人様、おちんちんがビクビクとしておいでです。そろそろ射精されそうでしょうか？」
「ううううっ、も、もう射精そう……っ」
「はい、ご主人様。どうぞお射精なさってください。私のおまんこも、お汁の分泌の圧力が高まって参りました。まもなく、先程のようにイッてお汁を噴出してしまうものと思われます。ご主人様、私のおまんこも、このままイッてしまってよろしいでしょうか？」
ううううっ、絶頂に冷静に許可を求めてくるナナミも好き……。
「いいっ、いいよナナミっ、イッて！　僕も射精すからっ、ナナミに僕のおちんちんでイ

ッてほしい、僕のザーメン中出しでイッてほしいよぉっ！」
「かしこまりました。ではどうぞご主人様、中出ししてくださいませ」
「うぁぁぁぁぁっ、くぅぅぅぅ――っ！」
びゅるるるるるっ、びゅうううっ、びゅくびゅくっ、びゅっ――。
たまらず、僕はナナミの一番奥めがけてザーメンを吐き出した。六回目の射精なのに、全く勢いが衰えない。どくん、どくんと脈打つ僕のペニスを、ナナミの膣壁が握りつぶさんとするみたいに強く締め付けてきて――。
「ご主人様、イキます、私のおまんこもイキますので、ご注意ください――」
ぷしっ、ぷしゃあああっ！
ナナミの結合部から、また勢い良く愛液が噴き出して、僕の下腹部を濡らして足下に水たまりを作っていく。うわ、すご……。挿入されたまま潮吹きするナナミのおまんこ、エロすぎ……。
「ううっ、ううう……ナナミぃ……」
「ご主人様、大丈夫でしょうか？」
「う、うん……と、とりあえず、おちんちん抜くね……」
にゅぽんっ、とナナミの中からペニスを引き抜くと、広がったナナミのおまんこからは、

愛液と僕の精液が混ざった液体がぽたぽたと足下に滴っていく。
「あー……気持ち良かった……腰抜けるぅ……」
ナナミの背中にもたれて、僕は大きく息を吐く。ぎゅっとナナミの身体の前に手を回してしがみつくと、ナナミは僕の手に手を重ねてきた。
「お疲れ様です、ご主人様。またたくさんザーメンを中出ししていただけて、大変嬉しいです」
「うん……ナナミも、おまんこイッてくれて嬉しいよ。どうだった？」
「はい、ご主人様におちんちんでおまんこの穴の中を擦られ、ザーメンを中出しされておまんこがイクのは、とても幸せであることがわかりました。ご主人様のザーメンをおまんこの奥に感じた瞬間、先程よりもさらにおまんこのお汁の圧力が強くなり……ご主人様のおちんちんがおまんこの中でどくどくと脈打たれるのを感じながら、おまんこのお汁を大量に溢れさせることに、私は強い満足感を覚えました。私がイクことを、ご主人様が喜んでくださったおかげです。ありがとうございます」
「……ううっ、ナナミ、ナナミがエッチで僕は嬉しいよ。これからも遠慮なくどんどんおまんこイッていいからね」
「恐縮です、ご主人様。ご主人様に喜んでいただけますよう、これからもおまんこがたく

さんイケますよう務めさせていただきます」
ああ……普通なら中出しされてイッちゃった、というだけで済む話を、無機質に自分の機構の動作の話として語るナナミの平坦な口ぶり……好き……。
絶頂を覚えても声色ひとつ変わらないその声が、どうしようもなく愛おしい。喘ぎ声ひとつあげなくても、ナナミの言葉はいくらでも僕を興奮させてくれる。
なんでかって、それはナナミが、僕が何をしても「嬉しいです」「幸せです」「光栄です」と、喜んでいることをストレートに伝えてくれるからだ。どんなに平板な声でも、表情ひとつ変わらなくても、僕の行為を全部受け入れてそう言ってくれるだけで、ナナミのことがどんどん好きになってしまう……。
「ご主人様」
「ん、なに？」
「申し訳ありません。床を汚してしまいましたので、お掃除してもよろしいでしょうか」
「あ、うん、そうだね……」
「では、お掃除が終わりますまで、少しお待ちくださいませ」
ナナミは捲れ上がったスカートを戻して、足首に引っかかったままになっていたパンツを完全に脱ぎ去って拾い上げる。そしてそれを手に、僕の方を振り返った。

「ご主人様、この下着はいかがいたしましょうか。まだこの後も私のおまんこをお使いになられるなら、脱いだままの方がよろしいでしょうか？」
「あ……ナナミは、もっとおまんこ使ってほしい？」
「はい、ご主人様が望まれるのでしたら、どうぞ私のおまんこをお使いください」
うううっ、それならノーパンでいてもらう方が……。
そう思ったけれど、ふと僕はポタポタという水音に気付く。
何の音……って、アレだ。ナナミの足下に視線を向けると、ナナミのスカートの下に新しい水滴がポタポタと落ち続けているのだ。
「……ナナミ。おまんこからお汁と僕のザーメン垂れてるよ」
僕の言葉に、ナナミは足下を見下ろした。
「……申し訳ありません、ご主人様。また床を汚してしまいました。先におまんこの洗浄を済ませてもよろしいでしょうか」
——あれ、ナナミってひょっとして変なところで抜けてる？
ああ、でもそういうところもかわいいかも……。
「またお風呂で洗うの？」
「いえ、お手洗いを使わせていただければ充分です。清潔を保つように体内洗浄機能があ

りますので」
「そうなんだ……」
まあ、ＰＲの膣内が不潔で病気になったりしたら笑い話にもならないもんなあ。
でも……なんかせっかく中出ししたザーメンを即洗浄されてしまうのは、ちょっと味気ない……と思うのは、アレか、男の征服欲なのだろうか。
僕はナナミのショーツを見やる。悪い考えが浮かんでしまう。
うう、その誘惑に勝てたらもう六回も射精してない……。
「……ナナミ、別にその体内洗浄は今すぐ使わないといけないとかじゃないよね？」
「はい、基本的に清潔を保つためにご主人様がお休みなられている間に動作する機能です。たとえばご主人様が毒蛇に噛まれた際など、毒を吸い出す前に口内を洗浄するなどの形で任意で使用することも可能ですが」
例えが物騒だな……。
「……じゃあナナミ、まだおまんこの中に僕のザーメン残ってる？」
「はい、今は可能な限り零れませんように足を閉じていますので」
「それならナナミ。……そのまま、もう一回そのパンツ穿いてくれる？」
「かしこまりました。そうするとご主人様が中出ししてくださいましたザーメンが、私の

下着の中に零れてしまいますが、よろしいでしょうか」
「うん、それでいいよ……」
「承知いたしました。では、失礼いたします」
僕の前でナナミは、一度脱いだショーツをスカートの中で穿き直す。
それから台所の布巾を取ってきて、床にこぼれた液体を拭き始めた。
「……じゃあナナミ、僕は向こうにいるから、終わったら来て」
「かしこまりました」
僕は自室の奥のベッドに向かい、ベッドに腰を下ろして、床を掃除するナナミを見つめる。
――あのナナミのスカートの中で、白いショーツに僕の中出しザーメンが染みだしている。
それを想像するだけで、また僕のペニスは飽きもせず硬くなるのだった。

7

「お待たせして申し訳ありません、ご主人様」
床の掃除を終えたナナミが、ベッドの方に歩いてやってきた。僕が手招きすると、ナナミはベッドに腰を下ろした僕の前にやってくる。
「ご苦労様、ナナミ。……じゃあ、またパンツ見せて」
「かしこまりました」
僕の眼前で、ナナミはまたスカートをたくし上げて下着を晒した。
白いショーツには、ナナミ自身の愛液と、僕の中出しザーメンが滲みだして濡れて、ナナミのおまんこにぴっちりと貼り付いて、割れ目の形を浮き上がらせている。うわ、エロ……。
僕はそこに手を差し伸べて、ショーツの上からナナミのおまんこに触れる。ぐしゅ、と卑猥な音をたてて、僕の指先がナナミの割れ目の中に沈む。
「ナナミ……パンツ、すっかりグショグショだね」

「はい、ご主人様に中出ししていただいたザーメンと、私のおまんこのお汁が下着に染みこんで濡れてしまいました。ご主人様、これでよろしかったのでしょうか？」
「ううっ、いいよナナミ……。ナナミがパンツをグショグショにしてくれてると嬉しいから、パンツ穿いてるときもおまんこのお汁溢れさせちゃっていいからね……」
「かしこまりました。では今後は、おまんこのお汁で下着を汚してしまいましたら、その都度ご主人様にご報告いたしますので、ご自由にご覧になるなりお触りになるなりなさってくださいませ」
うわ、なにその報告、想像しただけで射精しそう……。
たまらず、僕はナナミのおまんこを下着の上からグチュグチュと弄り回す。柔らかく濡れたナナミのおまんこがいやらしい音を立てるたびに、僕のペニスからは我慢汁が玉になって浮き出した。くぅぅっ……。
「ご主人様、そのようにおまんこを弄られますと、ますますおまんこのお汁が溢れて、下着がこれ以上お汁を吸い取れなくなってしまいます。また床を汚してしまいますが、よろしいのでしょうか」
「ううっ……じゃあナナミ、パンツ脱がせるよ」
「はい、ありがとうございます、ご主人様」

もうこれ以上水分を含めないだろうというぐらいにクロッチがぐちゃぐちゃに濡れたナナミのショーツを、僕はゆっくりとずり下ろした。またナナミの太股でくるくると丸まっていくショーツに、ナナミのおまんこから銀色の糸が引く。うわ、おまんこからショーツへの糸引き……。

「うわ、すご……。ナナミのおまんこ、エッチすぎるよ……」

「お褒めにあずかり恐縮です。ご主人様、今度はいかがなさいますか？　どのようなご要望でも、何なりとお申し付けくださいませ」

トロトロに蕩けたおまんこから下着に糸を垂らして――そんな卑猥なおまんこを晒しながら全く変わらない無表情で、ナナミは言う。そのギャップがどうしようもなく、僕の性欲を暴走させる。ああ、今日一日で今まで自覚してなかった性癖を大量に開眼させられた気分……。

ああ、ナナミにもっとエッチな格好してほしい。

「ナナミ……おっぱいも見たい」

「かしこまりました。胸部を露出するのですね。服を全て脱いでしまえばよろしいでしょうか」

「いや、ええと、上をはだけておっぱい出せる？」

「脱がずにはだければよろしいのですね。かしこまりました。では、スカートを一旦下ろしても構いませんでしょうか」
「あ、じゃあ持っててあげる」
「ありがとうございます、ご主人様。それでは失礼いたします」
僕はナナミの手からスカートの裾を受け取る。うう、これなんかスカートめくりしてる気分。自分からナナミのスカート捲って、ずり下ろしショーツとおまんこ眺めてるこの体勢、背徳的だ……。
そんなことを思いながら僕がスカートを支えていると、ナナミはメイド服のエプロンの肩紐を外し、その下の黒いワンピースのボタンを外し始める。全てのボタンを外し、ナナミが肩をはだけると、ボタンの間からナナミの形のいいおっぱいが顔を出した。ピンク色の乳首がツンと上を向いている。
僕はごくりと唾を飲む。……あれ、ていうか、ちょっと待って。
「……ナナミ、ノーブラ？」
「はい、ブラジャーのことでしたら、特に必要ありませんので身につけておりません。身につけていた方がよろしかったでしょうか？」
「いや……それでいいよ。そっか、ナナミ、最初からずっとノーブラだったんだ……」

ヤバい、余計に興奮してきた。
「ご主人様、スカートを支えていただきありがとうございます」
「あ、うん」
僕の手からスカートの裾を受け取って、ナナミは再び自分の手でスカートをたくし上げる。
ワンピースの上をはだけておっぱいを露出し、スカートをたくし上げておまんこを晒したナナミ。露出の少ないクラシックなメイド姿から、恥ずかしいところを無表情に全部晒したナナミの姿に、見てるだけで射精しそうになってしまう。
「これでよろしいでしょうか、ご主人様」
「う、うん……ううう、めちゃくちゃエッチだよナナミ……っ」
「ありがとうございます。ご主人様にお喜びいただけて光栄です」
ああ、もう駄目だ。我慢の限界だ。
ナナミのおまんこに突っ込みたい。中出ししたい。
思い切りナナミの中に腰を突き入れて、欲望を全部吐き出したい。
「じゃ、じゃあナナミ……そのままベッドに仰向けに横になって」
「かしこまりました」

僕が立ち上がって促すと、ナナミは言われるまま、僕のベッドに横になる。スカートは持ち上げたまま、僕の枕に頭を乗せて、ナナミはベッドに仰向けになって僕を見上げた。
「ご主人様、これでよろしいでしょうか」
「う、うん。じゃあ……ナナミ、おまんこにおちんちん挿れるから、膝立てて、足広げて。パンツは脱がすよ」
「承知しました」
僕がショーツを脱がせてあげると、ナナミは膝を曲げて、ベッドの上で足を開く。トロトロに蕩けて、ピンク色が僕を誘うようにヒクつくナナミのおまんこ。僕はベッドの上にあがって、覆い被さるようにナナミの両脇に手を突いた。腰をナナミの足の間に割り込ませ、ガチガチに硬くなって我慢汁が垂れるペニスを、ナナミのおまんこの入口にあてがう。
「ううっ、じゃあナナミ、挿れるよ……」
「はい、どうぞおまんこにおちんちんをお挿れください。ご主人様のお好きなだけザーメンを中出ししていただければ幸いです」
「くぅぅっ……ナナミ、もっと言って、もっとナナミのおまんこの状態教えて」
「はい、ご主人様。私のおまんこは既にたくさんのお汁が分泌されて、下着から溢れてしまうほどです。ご主人様のおちんちんに気持ち良くなっていただけますよう、既に万全の

準備ができております。私のおまんこは、ご主人様のおちんちんを挿入していただくのを、心から待ちわびております。どうぞご主人様、私のおまんこの中でおちんちんを擦り、気持ち良くなってくださいませ。そうしてご主人様のザーメンをたくさん中出ししていただき、ご主人様がお望みでしたら、またイッておまんこのお汁をたくさん出したく存じます」

うあああ、駄目だ、そんなこと言われたら聞いてるだけで射精する……っ！

たまらず、僕は一気にナナミのおまんこにペニスを突き入れた。ずぷぷぷぷっ……と痺れるような快感とともに一番奥まで一気呵成に貫いて、ぎゅううっと締め付けてくる膣壁の感触に、また僕は全身が溶けそうな快感に包まれて呻くしかない。

「ご主人様、おちんちんが入って参りました。嬉しいです、ご主人様のおちんちんをおまんこに挿れていただき、とても光栄です。おまんこのお汁の分泌量もまた増加しております。ご主人様のおちんちんの熱がおまんこの内側から伝わって参ります。どうぞ、お好きなだけ中出ししてくださいませ」

「くぁぁぁぁぁっ……うんっ、射精すよっ、いっぱい射精すからっ、ナナミもイッて！

ナナミも好きなだけイッていいからっ、ナナミにもいっぱいイッてほしい……っ！」

「かしこまりました、ご主人様。おまんこがイキそうになりましたら随時お知らせしますので、どうぞご主人様はご遠慮無くお射精なさってくださいませ」

「うんっ、うんっ……ううう、ぁぁぁぁっ」
ナナミの太股を掴んで、僕は夢中でナナミのおまんこに腰を打ち付ける。ナナミの割れ目を出たり入ったりする僕のペニスは、溢れてくるナナミの愛液にぐっしょり濡れそぼって、結合部ではグチョグチョと愛液がいやらしい音をたて続ける。
僕が腰を打ち付けるたび、ベッドが軋み、ナナミの身体と一緒に形のいいおっぱいが揺れる。ああ、大きすぎないナナミの美乳……揺れ方も慎ましくて綺麗だな……。
「な、ナナミ……おっぱい揉んでいい？」
「はい、もちろんです。どうぞご主人様、私のおっぱいもご自由にお揉みください」
「ううう」
腰を振りながら、僕は両手でナナミのおっぱいを掴む。うあああっ、お風呂でも触ったけど、ナナミのおっぱい柔らか……っ。ぐにぐにと手のひらの中で形を変えるけれど、それでいて芯に適度な弾力があって……ううう、しっとりした質感は手に吸い付くようだ。ああ、おっぱい……ナナミのおっぱいも好き……。
そうしてナナミのおっぱいを揉んでいると、ナナミのおまんこがいっそうキツく愚息を締め付けてくる。ううう、搾り取りに来てる……っ。
「ご主人様。おっぱいを揉んでいただきましたところ、おまんこのお汁の分泌量がまた増

加いたしました。どうやら、ご主人様におっぱいを揉んでいただきますと、私のおまんこも気持ち良くなるようです」

「そ、そう？　ナナミ、おっぱい揉まれて気持ちいい？」

「はい、ご主人様。私のおまんこは、ご主人様におっぱいを揉んでいただくことで、気持ちよいことを示す反応を見せております。おそらく、ご主人様におっぱいを揉んでいただくだけでも、私のおまんこはお汁が分泌される仕様になっているようです。もちろん、ご主人様におっぱいを揉んでいただけますこと、とても光栄で喜ばしく思っております。私はご主人様におっぱいを揉んでいただくととても嬉しいです」

「うううう……僕もナナミのおっぱい好き……揉んでるだけで両手が気持ちいいよ……っ。じゃ、じゃあ、今度からはおちんちん挿れるときはなるべくおっぱいも揉んであげるね……っ」

「ありがとうございます、ご主人様。私のおまんこがとても喜んで、お汁をたくさん分泌しておりますこと、わかりますでしょうか」

「うんっ、すごいっ、すごいよナナミのおまんこっ、おちんちん溶けるっ、あああぁぁぁぁっ――」

あっという間に欲望は決壊した。

びゅるるるるるるっ、びゅくびゅくっ、びゅうううっ――。

何回目だっけ……。ああ、もういいや。とにかく僕は、そのままナナミにまた中出ししていた。僕のペニスがザーメンを吐き出すたびに、ナナミのおまんこがまたきゅうきゅうと締まって……。

「ご主人様、おまんこにザーメン中出し、ありがとうございます。私のおまんこも間もなくイキそうです。おまんこ、イッてもよろしいでしょうか？」

「あああああぁぁぁ……いい、いいよ、イッて、ナナミ……っ」

「かしこまりました。では、私のおまんこも、イカせていただきます――」

ぷしっ、ぷしゃっ、しゃあああっ……。

ビクビクッ、とナナミの膣内が痙攣して、僕のペニスを締め付けながら、結合部から愛液を吹き出す。吹き出された愛液は僕の下腹部を濡らしてから、ポタポタとシーツに垂れてシミを作っていた。

「……ご主人様、私のおまんこも、ご主人様に中出ししていただけてイクことができました。ありがとうございます。ですが、シーツが汚れてしまってはおりませんでしょうか？」

「ああ……いいよ、ナナミ、大丈夫。後で洗濯すればいいだけだから……。ナナミはそんなこと気にしないで、好きなだけイッておまんこのお汁出して……」

「かしこまりました。では、シーツは後ほどお洗濯させていただきます。……ご主人様、まだおちんちんにザーメンが溜まっていらっしゃるようですが、このままもう一度中出しなさいますか？」
「う、うん……」
僕はベッドの上のナナミを見下ろす。無表情に僕を見つめ返すナナミの顔。その唇を見て、僕はごくりと唾を飲んだ。
……あ、そういえばこれだけ射精して、まだ未経験の大事なことがある……。
恥ずかしながら、童貞を捨てられた今も、そっちは未経験。順序が逆では？
「……ナナミ、キスしていい？」
「キス、ですか。どれは、どのような行為でしょうか」
うお、性知識ゼロというのはここまでのレベルか……！
「く、唇と唇を合わせて、舌と舌を絡めたりすることだよ。……気持ちいいことというよりは、愛情表現のひとつなんだけど」
「記憶しました。つまりご主人様は、私に対して愛情表現をなさりたいということでしょうか」
「う、うん……ナナミ、好き……」

「ありがとうございます、ご主人様。それは、これ以上のことはないほどに光栄です。まだご主人様のパートナーとして起動して四時間ほどですが、既に愛情表現をいただけるほどにご主人様にご満足していただけたのでしたら、これに勝る喜びはございません」

そう言ったナナミの顔は、相変わらずの無表情。

唇の端が少しだけ持ち上がって、ほんの少し笑顔になった……ように見えたのは、たぶん僕の目の錯覚だったのだろう。

でも、それでもいい。ううん、それがいい。そんなナナミを、僕はもうどうしようもなく好きになってしまった。この数時間で、もうナナミがいない生活なんて考えられないぐらいに。

「ううっ、ナナミっ、好きっ、好きだよナナミっ、ずっと僕のところにいて……！」

「はい、ご主人様。私はご主人様のパートナーです。ずっとご主人様のおそばにおりますので、ご主人様はどうぞ私をお好きなようにお使いください。ご主人様にお喜びいただけること、そのために私はここにおります。ナナミはご主人様に愛していただけて、世界で一番幸せです」

「うううううっ、ナナミぃっ――」

たまらず、僕はナナミに挿入したまま覆い被さって、その唇に自分の唇を強引に押し当

てた。柔らかいナナミの唇の感触が、僕の唇をぎゅっと押し返してくる。ううっ、ファーストキス……！　ああっ、ナナミの唇、柔らかくて気持ちいい……！

唇を少し開いて、舌でナナミの唇を舐めると、ナナミの唇も軽く開いて、中からナナミの舌が顔を出した。舌先が触れあい、絡み合う。その瞬間、痺れるような快感が走って、たまらず僕はまた腰を振り始める。

じゅぷっ、じゅぷっ、じゅぽっ、じゅぽぽっ……。

「んぢゅ……ちゅぅぅっ、ちゅぱっ、ちゅ、んむぅっ……」

それが唾液の混ざり合う音なのか、結合部の精液と愛液のたてる音なのかもわからないまま、僕は舌でナナミの舌を貪り、ペニスでナナミの膣内を貪る。ナナミの舌は生き物みたいに僕の舌に絡みついて、唾液を吸われ、唇が擦れる快感がペニスにまで伝わる。舌が絡みあうたびにナナミのおまんこもキツくペニスを締め付けてきて、僕の射精を今か今かと待ちわびている……。

ぢゅううっとナナミの舌を強く吸って、さすがに息が苦しくなってきて一度唇を離す。僕とナナミの唇の間に伝う銀色の糸。ナナミは無表情のままに僕を見上げて、唾液でテラテラと光る唇を開いた。

「ご主人様、申し訳ありません、ご主人様がまだ射精されていませんのに、私のおまんこ

が先にイキそうです」
「……ナナミ、なに、僕にキスされてそんなに気持ち良かった？」
「はい、ご主人様にキスをしていただき、舌を舐めていただいたり、吸っていただくと、おまんこのお汁の分泌量が非常に増大します。すぐにでもおまんこがイキそうです。ご主人様、私の方が先にイッてしまってもよろしかったでしょうか？」
「う、うんっ……いいよナナミ、好きにイッていいよっ……ちゅっ、ぢゅううっ」
「んぢゅ、ちゅ……んぷぁ。ありがとうございますご主人様。では、僭越ながら、私のおまんこ、先にイカせていただきます」
ぷしっ、ぷしゃぁぁぁっ――。
ぎゅううっ、とこれまでになくキツく僕のペニスを締め付けながら、ナナミのおまんこはまた盛大にお汁を噴いた。その強烈な締め付けに、僕のペニスもあっという間に限界を超える。
「うぁぁぁっ、ナナミっ、僕も――っ」
びゅっ、びゅびゅっ、びゅうううっ、びゅるるっ、びゅくびゅくっ――。
イッて激しく痙攣するナナミの膣内で、僕の欲望も弾けて噴出した。
「ご主人様……私のイッている最中のおまんこに、ザーメン中出しありがとうございます。

光栄です」

「うぁぁぁぁぁぁ……ナナミ、ナナミぃ……」

もう僕はナナミのおっぱいに顔を埋めて、ただただ快感のままに精液を吐き出すことしかできない。頭がどんどん真っ白になって、もう何も考えられなくなる……。

快感で頭がおかしくなりそうで、でもペニスはまだ足りないとばかりに、ナナミの膣内で勝手に動いてさらなる快感を引きだそうとする。ああ……もう……駄目……。馬鹿になった……。僕のおちんちん、もう完全に馬鹿になってしまった……。

「ナナミ、ナナミ、ナナミぃ……っ」

「はい、ご主人様。まだ射精されたいのですね。どうぞ私のおまんこをご満足いただけるまでお使い続けください」

「ううっ、おまんこ、ナナミのおまんこ、おまんこ好きぃ……」

「光栄です、ご主人様。私のおまんこは、いつでもご主人様のおちんちんを気持ち良くしたいと心から望んでおります。どうぞご主人様、私のおまんこでまた射精なさってください……」

……そこからの記憶は、ひどく曖昧だった。

いったいその後何回ナナミに中出しして、いつ意識を手放したのかも定かでない。
何も考えられないままに腰を振り続けて……僕はたぶん、いつの間にか、ナナミのおまんこに挿入したまま睡魔に意識を刈り取られていた。
「……ご主人様？　お休みになってしまわれましたか？」
闇に沈んでいく意識の中で、ナナミの声が遠く響く……。
「……では、このまま添い寝させていただきます。おやすみなさいませ、ご主人様……」

……暗転。

8

「おはようございます、ご主人様」

朝の光に目を覚ますと、ベッドの横から声がした。

目を擦りながら身体を起こすと、僕の部屋のベッドの脇に、メイド服姿の黒髪ロングの美少女が佇んでいる。感情の見えない、人形のような無表情。

「お……おはよう、ナナミ」

そうだ。昨日我が家にやってきたパートナーロイドのナナミだ。

その顔を見た瞬間、昨日の出来事が一気に脳裏に蘇り、顔が熱くなって、朝勃ちした愚息はさらに硬くなる。ああ、僕、昨日ナナミと……ひたすら射精して、なんかもう凄かった……。ていうか僕、いつの間に寝たんだっけ？

布団の中を見ると、シャツとパンツだけの格好ではあったけれど、ちゃんと服は着ていて、昨日の行為の痕跡は特に残っていない。……あれ、よく見るとシーツも変わってる？

いつの間に？

「いかがなさいましたか、ご主人様」
「あ……いや、ええと、今何時？」
「朝の七時二十五分です」
「あれ、早いな!?　ゆうべ僕いつ寝たっけ……？」
「はい、ご主人様は昨晩二十三時四十分頃、私のおまんこに八回目の中出しをなさった後、すぐにお休みになられました」
「ううっ」
いきなりそんなストレートに卑猥なことを言わないでほしい。ていうか僕、昨日結局ナナミに八回も中出ししたの？　他に手コキとフェラで三回ぐらい射精したはずだから、合計十一回？　いやいや、僕ってそんな精力過多だったっけ……。
で、そんだけ射精したのに、なんで朝からこんな元気なんだ我が愚息よ。
昨晩のことが頭の中を渦巻いて、ナナミの顔がまともに見られず、僕は視線を逸らしつつ答える。
「あー……ええと、ごめんナナミ、勝手に寝落ちして」
「いえ、どうぞお気になさらず。ご主人様はよく眠れましたでしょうか？」
「う、うん。快眠、快眠。……ナナミは僕が寝たあと、どうしてたの？」

「はい、ご主人様がお眠りになられたあと、しばらくはそのまま添い寝しておりました。それから、ご主人様のお身体を拭い、ご主人様を起こさないように濡れたシーツを取り替えました。その後、体内洗浄を行い、充電しながらの休眠モードに入り、朝6時に再起動いたしました。お洗濯は既に終わり、ベランダに干してありますのでご確認ください」

ああ、ナナミってアンドロイドなんだな……と実感する発言である。休眠モードに入って充電って、そのへんのコンセントにプラグでも繋いでいたのだろうか？　……電気代かかりそうだなあ。

というか、僕を起こさずにシーツ交換ってどうやったんだ？　いや、僕がベッドから下ろされても起きないぐらい熟睡していただけか……？

なんかいろいろ気になるけど、それはそれとして……。

「ご主人様、昨日のお話では九時起床のご予定と伺っておりましたが、まだ七時半前です。いかがなさいますか？」

「え、あ、うん……。目が覚めちゃったからもう起きるよ」

「かしこまりました。朝食はいかがなさいますか？」

「あー、じゃあ作って。食パンあるよね？」

「はい、トーストになさいますか」

「うん、それでお願い。おかずは任せるよ」
「かしこまりました。では、準備いたしますので、何かありましたらお呼びください」
ナナミは一礼してキッチンの方に向かう。僕はその背中を見送り、心の中で息を吐く。
一晩寝て気持ちがリセットされてしまうと、昨晩の自分があまりにも好き放題にナナミに欲望をぶつけすぎたように思えて、いささか自己嫌悪。いくらタイプSだからってなあ……。
というか愚息よ、朝勃ちとはいえもう少し大人しくしてくれ。
……とりあえず、トイレに行って、それから顔を洗おう。
僕は掛け布団をはね除けて起き上がる。――この下着を盛り上げた勃起ペニスをナナミに見られて、話がややこしくなる前に、とりあえず排泄してしまわないと……。

◇　◆　◇

ズボンを穿き、トイレを済ませると愚息は少し大人しくなった。それから、流し台はナナミが使っているので風呂場で顔を洗う（1DKの部屋に洗面台なんてものはない）。少しさっぱりしてダイニングに戻ると、ナナミはフライパンで何か作っている。ダイニング

の椅子に腰を下ろして、僕はそのナナミの後ろ姿を見やる。
「ナナミ、何作ってるの？」
「はい、ベーコンエッグを」
卵もベーコンも自炊の挫折で賞味期限が切れかけてたやつだ。昨日の夕飯とで、たぶん冷蔵庫の中で放置されかかっていた食材は綺麗さっぱり無くなるのではないだろうか。
……ああ、それにしても、キッチンで誰かが料理してくれてるのって、実家のミヨコさんを思いだして落ち着くな……。
「ご主人様、ご朝食です」
「ありがとう、ナナミ。いただきます」
ベーコンエッグとレタスにトーストだけのシンプルな朝食。ああ、でも誰かが作ってくれるというだけで素晴らしい……。
僕が食べている間、ナナミは静かに僕の視界の背後に立っている。うーん、これはちょっと落ち着かない……。でも、ナナミに「一緒に食べよう」って言っても困らせるだけだしな。実家のミヨコさんを困らせた子供の頃の記憶。
「ごちそうさま」
「お粗末様でした。ご主人様。昨日、お昼のお弁当をご所望されておりましたが、やや食

材が足りません。いかがなさいますか？」
「あー……じゃあいいよ、学食で済ませるから」
「かしこまりました。大変申し訳ございません」
「いやいや、気にしないでいいよ。そもそも冷蔵庫に食材あんま残ってなかったわけだし」
「はい。買い出しには予定通り行って構わないでしょうか」
「うん、じゃあよろしく」
「かしこまりました」
「……あ、となるとお金預けておいた方がいい？」
「ご主人様の方で設定していただければ、キャッシュレス決済が可能です」
「スマホで？」
スマホでナナミの設定画面を起動してみると、確かにキャッシュレス決済の設定項目があった。画面の指示に従って登録完了。便利なものである。
「登録完了しました。ご主人様、月の食費の上限額をお教えください」
「ん？　あーそうか、買い出しの予算か。できれば二万五千円ぐらいで済ませたいな」
「かしこまりました。ではその範囲内で食材を購入して参ります」
家計のやりくりまでしてくれるのだから、ＰＲは強い。

――しかし、朝食を終えてもまだ八時だ。大学に行くまではまだ２時間弱ある。変に早起きしたせいでぽっかり時間が空いてしまった。どうしたものかな……。

僕はナナミを見やる。無表情に僕を見つめるナナミの顔。

……また、昨日の記憶が蘇って、愚息がムクムクとしてくる。ううっ、だから昨日あれだけ出しただろ我が息子よ……。もう物足りなくなったと申すか。

でもそんな、スケベなことしか考えてないご主人様ムーブするのもなんかこう……。

「ご主人様、では他に何か、ご要望はございますか」

ナナミが無感情に僕に問う。その、昨日のめくるめく行為の間と全く変わらないトーンの声に、僕の理性はあっという間に溶けて消える。

ああ、駄目だ。ナナミがそこにいるだけで、僕はスケベなことしか考えられないご主人様になってしまう……。

「……ナナミ。確かそこに緑茶のティーバッグがあるから、お茶淹れてくれる？」

「かしこまりました」

僕が指示すると、ナナミは緑茶のティーバッグを探し当てて、戸棚から湯飲みを取りだし、薬罐に水を注いでコンロの火に掛けた。電気ポットはこの部屋にはないのである。

コンロの前でじっとお湯が沸くを待つナナミの背後に、僕は近付く。

「ご主人様、何か御用でしょうか」
振り返ろうとしたナナミの背中にしがみついて――僕は、その胸をメイド服のエプロンの上から鷲掴みにした。
メイド服の布地越しに、ナナミのおっぱいの柔らかさが両手に伝わってきて、ペニスが一気に硬くなって反り返る。僕はその愚息を、ナナミのお尻に擦りつけるように押し当てた。ああ、ナナミのおっぱい……。この触りごこち、やっぱりノーブラだ……。お尻も柔らかくて気持ちいい……。
「ご主人様、おっぱいを揉んでいただけるのですか？　ありがとうございます」
そして、いきなり背後から胸を揉まれて、悲鳴ひとつあげないどころか、無感情に感謝の言葉を述べるナナミ。ああ、これ、この反応……。ううっ、好き。
ああ、台所で女の子に背後から抱きついて胸を揉むのって、なんというか男のロマン的な。
「ご主人様、おちんちんにザーメンが溜まっていらっしゃったのでしたら、言っていただければすぐに私のお口でもおまんこでもお使いいただけるようにいたしましたが」
「ううっ、いい、いいの……今はナナミのおっぱい揉ませて……」
「かしこまりました。どうぞ私のおっぱいをお揉みください。服の上からでよろしかった

でしょうか？　肩をはだけておっぱいを露出いたしましょうか」
「ううん、このままでいい……はあ、ナナミのおっぱい……ノーブラだよね」
「はい、ブラジャーはつけておりません」
「くぅぅっ、乳首が尖って、ワンピースに浮き出てるよ……」
ナナミの乳首は、服の上からでもはっきり触って解るほどに形を主張していた。僕はその突端をコリコリと指で弄りながら、ナナミの胸の柔らかさを手のひら全体で味わう。
ナナミは胸を弄ばれても相変わらず無反応だけれど、そんなナナミからエッチな言葉を引き出す術は昨日で把握している。
「ナナミ……ナナミはおっぱい揉まれて嬉しい？　気持ちいい？」
「はい、ご主人様におっぱいを揉んでいただけて、とても嬉しいです。ご主人様に服の上からおっぱいを揉まれ、乳首を指で弄られますと、とても幸せな気持ちになります。ご主人様におっぱいを揉んでいただけて、おまんこも気持ち良くなり、お汁が分泌され始めております」
「ううっ……そっか、ナナミは今おっぱい揉まれて、おまんこ濡れてきてるんだね……」
「はい、ご主人様。ご主人様におっぱいを揉まれて、おまんこの内側がお汁で満たされてきております。このままでは下着が濡れてしまいますが、よろしいでしょうか？」

「うんっ、いいよナナミ……下着、グショグショにしちゃっていいから、床までおまんこのお汁こぼしちゃっていいからねっ」
「かしこまりました。どうぞご主人様、私のおっぱいを揉んで、私のおまんこを気持ち良くしてくださいませ」
ああ、たまらん。ずっとナナミのおっぱい揉んでいられる……。
恍惚としながら僕がナナミのおっぱいを弄んでいると、不意に薬罐がピーッと音を立てた。
「ご主人様、お湯が沸きました」
「……ああ、いいよお茶はもう。それよりナナミのおっぱい揉む……」
「かしこまりました。では火を止めます。薬罐のお湯はいかがいたしましょう」
「そのままでいいよ……ううっ、ナナミのおっぱいっ……」
ナナミがコンロの火を消し、静かになったキッチンで、僕はナナミのおっぱいを揉みながら、腰を揺すってナナミのお尻にズボン越しにペニスを擦りつける。
「ご主人様、おちんちんが私のお尻に当たっているようです」
「ううっ、ナナミのお尻気持ちいいよ……」
「把握しました。ご主人様、私のお尻でおちんちんを擦られているのですね。では、どう

ぞお続けください。お尻にご主人様のおちんちんが当たって、ご主人様のおちんちんの形を感じられて嬉しく思います」

「くぅぅぅっ」

ううっ、ズボンからペニスを出して直接ナナミのメイド服のお尻に擦りたい……。でも、ナナミのおっぱいから手も放したくない……。

「ナナミ……お尻におちんちん押しつけられるのはどう？　気持ちいい？」

「はい、ご主人様。お尻にご主人様の硬いおちんちんが当たって、とても気持ちいいです。おっぱいを揉んでいただけて既に溢れてきているおまんこのお汁がますます増えます。もう、おまんこのお汁が下着まで染み出てしまっております」

「ううっう、ナナミ、もっとおまんこの状況教えて……っ」

「はい、ご主人様。私のおまんこは今、ご主人様におっぱいを揉んでいただいて分泌され続けているお汁が既に溢れて、下着を湿らせております。お尻に当たるご主人様のおちんちんの感触で、さらにお汁の分泌量がどんどん増えております。ご主人様におっぱいとお尻を刺激していただけて、私のおまんこはどんどん気持ち良くなっております」

「……イケそう？　ナナミ、おっぱい揉まれてるだけでおまんこイッちゃう？」

「はい、ご主人様。このままご主人様におっぱいを揉み続けていただければ、間もなく私

のおまんこはイッて、お汁を溢れさせてしまうものと思われます。床を汚してしまっても構わないとのことですが、ご主人様、私のおまんこはイッてしまってもよろしいでしょうか？」

「うんっ、いいよっ、イッていいよナナミっ……僕に服の上からおっぱい揉まれただけでイッちゃえっ、おっぱいだけでイッちゃうエッチなナナミがいいっ……」

「かしこまりました。ではご主人様、もうしばらくおっぱいをお揉みくださいませ。間もなく私のおまんこはイクものと思われます。おまんこのお汁が下着から溢れて、既に太股まで伝っております。ご主人様……おまんこ、間もなくイキますので、どうぞご注意ください――」

ナナミがそう言った次の瞬間、ぱたたたたっ……と床に水が滴る音。

視線を下ろすと、ナナミの足下に、小さな水たまりができていた。なんか……お漏らしでもしたみたいだな……。ううっ、それはそれで。

「……ナナミ、イッた？」

「はい、ご主人様。私のおまんこはイッて、お汁を噴出してしまいました。床を汚してしまいましたこと、お詫びいたします」

「ううん、それはいいって。……そっか、ナナミ、おっぱい揉まれただけでイッちゃった

んだ。ナナミはエッチだなぁ……」
「はい、私はエッチです。ご主人様におっぱいを揉んでいただき、おまんこがとても幸せになり、イッてお汁を床にこぼしてしまいました。ご主人様におっぱいを揉んでいただけておまんこがイケましたこと、とても嬉しいです」
「くぅぅっ……じゃ、じゃあナナミ、次はそこに座って、イッたおまんこ見せて……」
「かしこまりました」
僕がおっぱいから手を放すと、ナナミはスカートの中に手を入れて下着を足首まで下ろし、片足に引っかけたままダイニングの椅子に腰を下ろした。そしてスカートを手で持ち上げて、僕の前で足を広げる。
グショグショに濡れそぼったナナミのおまんこが眼前に晒されて、僕はごくりと唾を飲んだ。
ああ、昨日いっぱい見たけど……改めて見せられると……うううっ。
「ご主人様、どうぞ、私のおまんこです。イッたばかりで、お汁がまだ溢れております。どうぞご主人様、お触りになるなり、お舐めになるなり、おちんちんをお挿れになるなり、ご自由にお使いください」
「……じゃ、じゃあ、ナナミのおまんこ、いただきますっ」

僕はナナミの前に膝を突いて、またそのおまんこにむしゃぶりついた。割れ目に吸い付いた瞬間、口の中いっぱいに広がるナナミのおまんこのお汁の味に、頭がクラクラしてくる。うああっ……昨日も舐めたけど、やっぱり美味しい……。こ、こんなに美味しいおまんこだったら、僕、クンニするの好きにならないわけがないじゃないか……っ。

夢中になって、僕は舌でナナミのおまんこを掻き回し、溢れてくる蜜を啜る。ああ……なんかこれ、食後のデザートでも味わってるような気分……。うう、食後のデザートは毎食ナナミのおまんこ？　そ、それ、いいかも……っ。

「ご主人様、今度はおまんこをお舐めくださるのですね。ありがとうございます。おまんこがとても嬉しくて、またおまんこのお汁がどんどん溢れてしまいます」

「んむっ、ちゅぅぅっ……ぷぁ、美味しい、ナナミのおまんこ今日も美味しいよ……っ」

「光栄です、ご主人様。どうぞおまんこをお好きなだけお召し上がりください」

「んむっ、ちゅ、じゅるるっ……。はぁ、ナナミのおまんこ美味しい……。ううっ、ナナミ、食後のデザートにナナミのおまんこ舐めたい……っ」

「かしこまりました。ではこれからは、食後に私のおまんこをお舐めになりますか？」

「い、いいの？」

「はい、もちろんです。ご主人様にそれほどおまんこをお気に召していただけて嬉しく思

います。どうぞ、食後に私のおまんこをご所望でしたら、いつでもお申し付けください」
「うううううっ、ナナミぃ……っ」
ああ、たまらん。こんなのクンニフェチになる……。
僕が夢中でナナミのおまんこを食っていると、ほどなくナナミのおまんこはトロトロと濃いめの汁を溢れさせてヒクヒクと痙攣し始める。あ、これは……。
「……ナナミ、イキそう？」
「はい、ご主人様。おまんこが間もなくイキそうです。このままご主人様に舐めていただきながらイッても構いませんでしょうか？」
「うんっ、いいよっ、僕の舌でイッて、ナナミのおまんこのお汁いっぱい飲ませてっ」
「かしこまりました。では、間もなくイキますので、ご主人様、どうぞおまんこのお汁をお飲みくださいませ。ご主人様におまんこをたくさん舐めていただき、私のおまんこは本当に幸せです、ご主人様、イキます、おまんこイキます――」
ぢゅうううっ、と僕が強くおまんこに吸い付いた瞬間。
ぷしっ、ぷしゃあああっ！
ナナミはまた激しく潮を吹いて絶頂し、僕はその噴きだした汁を思い切り口で受け止めた。注ぎ込まれるナナミのお汁を、喉を鳴らして飲み干す。ああ……美味しい……。ナナ

ミのおまんこ美味しすぎる……。好き……。
「んぐっ、んく……ぷぁ。はぁ……ナナミのおまんこのお汁美味し……」
「ご主人様、大丈夫でしたでしょうか？」
「うん、ナナミのおまんこのお汁いっぱい飲めて嬉しいよ。はぁ……ナナミのおまんこ美味しすぎて舐めるの大好きになる……」
「そう仰っていただけると、大変光栄です。どうぞご主人様、お好きなだけ私のおまんこをお召し上がりください」
「ううっ、ナナミ……！」
トロトロと蜜を溢れさせ、ヒクヒクと痙攣するナナミのおまんこ。
たまらず僕は、その全部を飲み干そうとするみたいに、またそこにしゃぶりつく。

――あれ、普通セクサロイドって僕が奉仕してもらう側のはずだよな？
なんで僕、セクサロイドにクンニする方にハマってるんだろう？

9

続けてナナミのおまんこを舐めていると、ペニスが破裂しそうなぐらいに張り詰めてきた。

ううっ……もっと舐めてたい……。でも、もう暴発しそう……。

名残惜しく思いながらも、僕はナナミのおまんこから口を離して顔を上げる。ナナミは無表情に僕を見つめた。

「ご主人様、私のおまんこを召し上がるのはもうよろしいのですか」

「うう……もっと舐めたいけど、でも……おちんちんがもう限界っ」

立ち上がり、僕はズボンの中からペニスを取り出す。我慢汁が溢れた愚息をナナミの顔の前に突き出して、どうしよう、と僕は考えた。

このまま挿入する？　しちゃう？　いやでも、昨日のことを考えてると……挿入したら、そのまま大学行く気なくして一日中ナナミとセックスしてしまいそうな気がする……。

「ご主人様、おちんちんがとても大きくなっておいでですね。おまんこにお挿れになりま

すか？　それとも、お口でしゃぶればよろしいでしょうか」
ナナミの冷静な声と、たくし上げられたスカートの中でトロトロと蜜をこぼすおまんこのギャップに、ますます欲望が高まっていく。
溢れた蜜は、ナナミがお尻の下に敷いたスカートに染みを作っていた。
ああ……あんな風に汚したい。ナナミを僕のザーメンでドロドロにしたい……っ！
「なっ、ナナミ……そのまま、おまんこ見せてて……っ」
「かしこまりました」
ナナミにそう命じて、僕はナナミの前で、自分の手でペニスをしごき始めた。ナナミのおまんこを見ながらのオナニー……これが見抜きってやつか。ううっ、リアルなオカズを目の前にして、ナナミに見られながら自分でしごく背徳感に、背筋がゾクゾクしてくる。
「ご主人様、ご自分でおちんちんを擦られるのですか？　命じていただければ、私の手で擦ってさしあげますが」
「ううっ……いい、いいのっ、ナナミはそうやってスカート持ち上げておまんこ見せてて……っ。はぁっ……ナナミのおまんこっ、おまんこオカズにオナニーする……っ」
「ご主人様、オナニーとはなんでしょうか」
「あ……こ、こうやって、自分で自分を気持ち良くすることだよ……っ、くぅぅっ」

「記憶しました。では、オカズというのは」
「お、オナニーするときに見るもの……っ。見ると興奮するエッチなもののこと……っ」
「理解しました。つまりご主人様は、私のおまんこをご覧になって興奮なさって、ご自分でおちんちんを気持ち良くしておられるのですね。ご主人様がそうされたいのでしたら、どうぞ私のおまんこをお好きなようにご覧になってください」
「くぁぁぁぁっ――」
ああ、ナナミの無知な発言がますます背徳感を煽る……。
手コキもフェラも中出しも、なんでもさせてくれるタイプSを目の前にして、わざわざ見抜きするなんて、と自分でも思わないでもないけど、でも……ううっ、見られながらのオナニー、これ、いいかも……。
「ご主人様。おちんちんがびくびくとして、先端から透明な液体が滴っております」
「こ、これは、先走りって言って……射精する前に出るものだよ……」
「記憶しました。ということは、ご主人様はそろそろ射精されそうなのですね」
「うっ、うん……くぅぅっ、はぁ……ナナミのおまんこ……。ナナミのおまんこオカズに射精するぅ……っ」
「はい、どうぞ射精なさってください、ご主人様。私のおまんこをご覧になることで、ご

主人様に興奮していただけるのは、大変光栄です。先程ご主人様にたくさん舐めていただいた私のおまんこも、ご主人様にご覧になっていただけて喜んでおります。ご主人様の視線をおまんこに感じながら、ご主人様のおちんちんがびくびくとしているのを見ると、おまんこのお汁の分泌量がまた増加します」

「うううっ、ナナミっ、ナナミのおまんこ状況報告好き……もっと言って……」

「はい、ご主人様。私のおまんこは先程ご主人様におっぱいを揉んでいただいたのと、おまんこを舐めていただいたのとで、本日既に2回イッておりますが、今もご主人様におまんこをご覧になっていただけて、お汁の分泌が絶えることがありません。おまんこのお汁が溢れて、スカートに染みを作ってしまっております」

「あああっ、もう射精るっ……な、ナナミっ、ザーメンかけていい？　ナナミの顔とか、エプロンとかに、僕のザーメンぶっかけちゃっていい？」

「はい、もちろんです、ご主人様。どうぞご遠慮なく射精なさってくださいませ。ご主人様のザーメンをいただければ、私は大変嬉しく思います」

「ああっ、ぁぁぁぁぁぁっ――――」

快感が弾けた。

びゅるるるるるっ、びゅうううっ、びゅくびゅくっ――。

溜まった朝一番のザーメンが、一気に噴出してナナミの顔に飛び散る。ナナミは目を閉じて僕のザーメンを顔で受け止めた。額から口元までザーメンは飛び散り、さらにナナミの首元や、胸元の白いエプロンにまで僕は欲望を吐き出す。

メイド服の黒地のワンピースもザーメンで白く染まり、エプロンには液体の染みができていく。

「ああ、あぁぁぁぁ……うはぁ……」

「ご主人様、ありがとうございます。たくさん射精していただけて光栄です。ご主人様のザーメン、手やお口やおまんこでは受け止めて参りましたが、顔にかけていただいたのは初めてです。ご主人様のザーメンを顔に浴びせていただけて、とても嬉しいです」

ペニスを握ったまま情けない声をあげるしかない僕に、ナナミの無感情な声がかけられる。顔をザーメンでドロドロにして、顎からエプロンへザーメンを滴らせながら、ナナミは無表情に僕を見上げた。

「はぁ……な、ナナミ、僕のザーメンかけられるの好き……？」

「はい、ご主人様。ご主人様のザーメンでしたら、どこに出していただけても嬉しく思います。ご主人様のザーメンをいただけて、私のおまんこもますますお汁が溢れてしまいます」

「ううっ、でも服汚しちゃうよ……？」
「構いません。ご主人様のザーメンでしたら汚くなどありませんし、ご主人様にそれで気持ち良くなっていただけるのでしたら、いくらでも私の服や身体を汚していただきたく思います」
「ううううっ……じゃ、じゃあナナミ、エプロンでおちんちん拭いて……」
「かしこまりました」
ナナミは立ち上がると、ザーメンの残滓が先端に滲んだペニスを、メイド服のエプロンで優しく拭ってくれる。うああ、エプロン越しにナナミの手に包まれて……背徳感……。
「ご主人様、まだおちんちんが硬いままのようですが、次はどのように射精なさいますか？」
ザーメンのこびりついた顔のまま、ナナミは僕のペニスをエプロンで包みながらそう問うてくる。白濁した欲望で汚れたままのナナミの無表情な顔が、ますますもって股間に悪い。
「ううっ……じゃあ、そのままエプロンでおちんちん包んで手で擦って……」
「かしこまりました。こう、でよろしいでしょうか」
しゅっ、しゅっ、とエプロンの布地越しにナナミの手がペニスを擦る。ううっ、直接手

コキされるのとは違ったこのもどかしい感じ……。エプロンの肌触りがまた、たまらない。
「ああっ、いいよナナミ……もっと強く握って」
「はい、ご主人様」
きゅっと強く陰茎を握られて擦られる。ぞくぞくと背筋を走る快感に、たまらず僕は目の前のナナミの胸に手を伸ばして、エプロンの上からぎゅっと鷲掴みにする。
「ご主人様、またおっぱいを揉んでいただけるのですね。ありがとうございます」
「はあ……ナナミのおっぱい……」
「また服の上からでよろしいでしょうか？　それとも上をはだけましょうか」
「ううっ……じゃあ、今度はナナミのおっぱい直接揉む……」
「かしこまりました。では少し失礼いたします」
ペニスから手を放し、ナナミはメイド服のボタンに手を掛ける。僕が胸から手を放すと、ナナミはメイド服の肩をはだけて、エプロンの上におっぱいを露出した。
「どうぞご主人様、ご自由にお揉みください。では、またおちんちんをエプロンで擦らせていただきます」
「ううう、ナナミのおっぱい……っ」
ナナミに再びエプロン越しにペニスを握られ、僕はたまらずナナミのおっぱいをまた鷲

掴みにする。コリコリと硬く尖った乳首が手のひらに当たって、ふにふにと形を変えるおっぱいを弄ぶたびに手のひらが気持ちいい。その快感がペニスに伝わって、ナナミの手の中で射精したいと暴れる。

「うあああっ……ナナミにエプロンコキされながらおっぱい揉むの好き……っ」

「エプロンコキ、ですか」

「ううっ、エプロンでおちんちん擦ってもらうこと……っ」

「記憶しました。ご主人様のおちんちんを擦ってさしあげる行為は、擦るものの名前に『コキ』をつけて呼ぶという理解でよろしいでしょうか」

「う、うん、だいたい合ってる……」

「では、私のおまんこにご主人様のおちんちんを挿入していただく行為は、私のおまんこの穴でご主人様のおちんちんを擦ってさしあげているわけですから、『おまんこコキ』と呼ぶのでしょうか？」

「ううううっ、そ、その言い方も間違ってはいないけど……」

「記憶しました。ではご主人様、いつでもご主人様のおちんちんをおまんこコキして差し上げますので、どうぞいつでもお申し付けください」

「うぁぁぁぁぁっ、も、もう射精るっ――」

ナナミの無知で無感情な淫語にどんどん弱くなっていく僕である。囁かれるナナミの言葉に、欲望はまたあっけなく溢れ出す。

びゅくっ、びゅくびゅくっ、びゅるるるっ、びゅうううっ――。

「あ……ご主人様、また射精してくださいましたね。ありがとうございます。私のエプロンにご主人様のザーメンがたくさん染みこんでいきます。ご主人様に私のエプロンでも気持ち良くなっていただけて光栄です」

「あああ……ううっ、ナナミぃっ……」

立ったまま、ナナミのおっぱいを揉みながら、メイド服のエプロンにマーキング射精。

ナナミはそんな僕のペニスを、エプロンの濡れていない部分で優しく拭いてくれる。

ああ、なんかどんどん人としてダメになっていくような気がする……。

「ご主人様、お射精お疲れ様でした。おちんちんが少し柔らかくなりましたが、ご満足いただけましたでしょうか」

「うう……な、ナナミはどう？　おまんこ、もっとイキたくない……？」

「はい、ご主人様。私のおまんこは今、ご主人様に射精していただいたのと、おっぱいを揉んでいただいているのとで、お汁がまたたくさん分泌されて溢れております。このままご主人様におっぱいを揉んでいただければまたおまんこはイクことができます。ご主人様

は私がまたイクことをご所望ですか？」
「う、うん……ナナミにもまたイッてほしい」
「かしこまりました。ではご主人様、どうぞそのままおっぱいをお揉みになるなり、私のおまんこをご自由にお使いになるなり、お好きなようになさってくださいませ。ご主人様にしていただけることでしたら、どんなことでも私のおまんこは気持ち良くなり、イクことができるものと思います。どれでご主人様にお喜びいただければ、私としましても望外の喜びです」
「……じゃ、じゃあ、ナナミ、ちょっと後ろ向いて」
「かしこまりました」
おっぱいから手を放すと、ナナミはくるりと僕に背を向ける。僕はその背中にしがみついて、また背後からおっぱいを鷲掴みにする。手に吸い付いてくるその柔らかさを堪能しながら、股間をナナミのお尻に擦りつけると、愚息はすぐに硬さを取り戻した。
「ご主人様、またおちんちんにザーメンが溜まってしまわれましたか」
「うん……ナナミ、スカートめくるよ」
「はい、ご主人様」
僕はナナミのスカートの後ろをまくり上げると、露わになったお尻の割れ目にペニス

を挟むように押し当てた。
うううっ……ナナミのお尻、直に擦るとめちゃくちゃ柔らかっ……！
「お尻でおちんちんを擦られるのですか？　これは、お尻コキ、と呼べば良いのでしょうか」
「うううっ、それもいいけど……ナナミ、ちょっと、足閉じて」
「はい、かしこまりました」
ナナミがきゅっと両足を閉じる。その、おまんこの割れ目と太股の間にできた三角地帯に、僕は背後からペニスを突っ込んだ。ペニスの両側がナナミの太股に、そして上面が濡れそぼったナナミのおまんこの割れ目に擦れて、にゅぷんっ、とナナミの太股を割って突き抜ける。
うううっ、ナナミの太股にぎゅっと挟まれて、トロトロおまんこに擦る素股……っ。それをおっぱい揉みながらできるなんて……くぅぅっ。
僕は腰を揺すって、ペニスをナナミの太股とおまんこに擦りつける。ナナミのおまんこから滴ったお汁に太股も濡れて、にゅるにゅると滑りよく僕のペニスを圧迫してくる。くああぁっ、こ、これ、たまらん……！
「ご主人様、おちんちんが太股の間に挟まって、おまんこに擦れております。これは、何

コキでしょうか？」
「こ、これは……素股って言うんだよ、ナナミ」
「記憶しました。素股、両の太股とおまんことでご主人様のおちんちんを包んで擦って差し上げる行為ですね。ご主人様のおちんちんがおまんこに擦れて、私のおまんこも嬉しいです、ご主人様。ご主人様のおちんちんがおまんこを擦るたびに、おまんこのお汁の分泌量がどんどん増えます。その上おっぱいも揉んでいただけて、おまんこもおっぱいも幸せです」
「くぅぅっ……な、ナナミ、いつでもイッていいからねっ。僕におっぱい揉まれながら素股されて、おちんちんでおまんこ擦られてイッちゃうナナミが見たいよ……っ」
「かしこまりました。ご主人様も、どうぞいつでもお射精なさってくださいませ。私のおまんこはご主人様におっぱいを揉まれ、おちんちんでおまんこを擦られ、お汁の分泌量の増加が止まりません。ご主人様、またご主人様がお射精されるより先にイッてしまうものと思われますが、どうかご寛恕いただければと思います」
「うんっ、いいよっ、イッちゃえっ、ナナミぃっ……！」
　手のひらに吸い付くナナミのおっぱいと、ペニスに吸い付くナナミのおまんこの割れ目。濡れた太股は膣内のようにきつくペニスを締め付けて、ナナミのお尻に腰を打ち付けるた

びに痺れるような快感に包まれて、何も考えられなくなる。
うううっ、おっぱい、おまんこ、ふともも……。おっぱい、おまんこ、ふともも。ああ、語彙が小学生レベルまで低下する。もうナナミのおっぱいとおまんことふとももものことしか考えたくない。おっぱい好き、おまんこ好き、ナナミのふとももも好き、ナナミの全部が好き――。
「ご主人様、イキます。おまんこがイキます。ご主人様のおちんちんに擦っていただけて、私のおまんこからまたお汁が溢れます。ご主人様、ご主人様のおちんちんに、私のおまんこのお汁を浴びせてしまいますこと、ご容赦ください――」
ぷしっ、ぷしゃぁぁぁぁっ――。
僕のペニスをホットドッグみたいに咥えこむように吸い付いてきたナナミのおまんこの割れ目から、溢れ出したお汁が愚息に浴びせかけられる。ぱたたたっ、と床に小さな水たまりを作るナナミの絶頂汁を太股の間で浴びながら、僕はナナミの首筋に顔を埋めて、そのおっぱいを揉みしだいて、
「うううううっ、僕もっ――」
びゅるるるるっ、びゅうううううっ――。
ナナミのスカートは後ろだけめくった格好だったので、ナナミの太股の間から顔を出し

て射精した僕の精液は、ナナミのスカートの裏地へと飛び散った。
ああ……ナナミのメイド服を表からも裏からもザーメンで汚してしまった……。
「ご主人様、おちんちんが射精なさっているのがわかります。ご主人様のおちんちんがドクドクと脈打ってらっしゃるのが、おまんこと太股に伝わってきます。おまんこが嬉しくて、またお汁が溢れてしまいます、ご主人様」
「ふぁぁぁぁ……ナナミの素股、気持ちいいよっ……」
「光栄です、ご主人様。おっぱいもたくさん揉んでいただけてありがとうございます」
僕はナナミの背中にもたれて、ただただ射精の快感に浸る。
ああ……ホントに大学行きたくなくなってきた……。このまま一日中、ナナミとエッチなことしていたい……。

10

「ご主人様、そろそろおでかけの時間ではないでしょうか」
ナナミを後ろから抱きしめて、おっぱいを揉みながら、素股で濡れたペニスをナナミのお尻に擦りつけていると、ナナミが不意にそんなことを言い出した。
「……今何時？」
「午前九時四十五分です」
「ああ……確かにそろそろ大学行かないと……」
今日の講義は二コマ目からなので、十時前には家を出ないといけない。それは解っているのだが、うう、ナナミから離れたくない……。大学なんか行かないで、このままナナミのおっぱい揉んで、おちんちん擦って射精して……ナナミのおまんこに挿入して中出ししまくりたい……。
「うー……ナナミと離れたくないよお」
「光栄です、ご主人様。私も同じ気持ちです。ご主人様に本日のご予定がなければ、この

ままご主人様におっぱいを揉んでいただいたり、ご主人様におまんこを舐めていただいたり、おまんこにおちんちんを挿れていただいて中出ししていただきたく思います。ですが、それでご主人様のご予定を狂わせるわけには参りませんので、どうかそろそろお支度をなさってくださいませ」

「……やだ、って言ったら？」

「ご主人様がどうしてもと仰るなら、私はご主人様に従いますが」

ナナミのその冷静な言葉で、かえって頭が冷えた。うう、このままナナミの身体に溺れて大学をサボってしまったら、あとはもう堕落一直線のルートしかない。大学に行かなくなり、日がな一日家に籠もってナナミと延々とセックスし続ける生活……。それはあまりにも魅力的だけれど、せっかくの灰色の受験生生活を乗り切って入った大学を一ヶ月でドロップアウトした原因がタイプＳのパートナーロイドだと親に知られたらどうなるか。ド修羅場不可避である。

悲しいかな、それが現実というものである。ナナミが部屋にいてくれる生活は夢のようだけれど、それはそれとして大学生としての現実をやり過ごさねばならない。

「うう……解ったよナナミ。大学行くから支度するね」

「はい、ご主人様。何かお手伝いすることはございますでしょうか？」

「いや、カバンに教科書詰めて大学行くだけだから……」
ナナミから身体を離して、僕は大きく息を吐く。
「ごめんねナナミ、中途半端なところで止めるみたいになって」
「いえ、私は問題ありません。ご主人様こそ、おちんちんがまだ硬いようですが、大丈夫でしたでしょうか？」
「……ううっ、じゃああと一回だけ、お口で射精させて……」
「かしこまりました。では、ご主人様のおちんちんをしゃぶらせていただきます。……あむっ」
「ううううっ、ナナミぃっ……」
僕の前に膝立ちになって、ナナミは僕のペニスを咥えこむ。素股でナナミ自身のお汁まみれになったペニスを咥えるナナミの姿に、余計な背徳感が高まる。
ねっとりと陰茎に絡みついてるナナミの舌と、あたたかい口内の感触に、一気に射精欲がこみ上げてきた。さっきまで散々ナナミのお尻に擦りつけていて、もうペニスは限界に近かったのだ。
「くぅぅっ、ナナミ、ごめん、もう射精るっ」
びゅるるるるっ——と僕はまた、ナナミの口の中に射精する。

僕のペニスを咥えたまま、無表情に僕のザーメンを飲み干していくナナミ。
その黒髪を撫でながら、ああ、やっぱり大学行きたくない……と思ってしまう僕であった。

◇　◆　◇

「それじゃあ、行ってくるね」
「はい、行ってらっしゃいませ、ご主人様。お帰りは六時半頃でよろしかったでしょうか」
「う、うん。五コマ目終わったらすぐ帰ってくるよ」
「かしこまりました。ご夕食は何時頃にいたしますか？」
「……」
七時ぐらい、と答えかけて、大丈夫かそれ？　と咄嗟に思い直す。
六時半に帰ってきて、ナナミが出迎えてくれて、何もせずにそのまま夕飯？
――できる気がしない。
「……八時ぐらいかな」
「かしこまりました。では、ご主人様のご帰宅に合わせて先にお風呂を沸かしておいてよ

ろしいでしょうか」
「うん、じゃあそれでお願い……。あ、あと、買い物行くなら鍵、預けておくね」
僕はポケットからこの部屋の鍵を取りだして、ナナミに手渡す。
「お預かりします」
「戸締まり、気を付けてね」
「はい、ご主人様。もし、緊急でご主人様にご連絡すべき事態が生じましたら、ご主人様のスマホにご連絡いたします」
「え、どうやって？　うち、固定電話無いよ？」
「私自身が、直接外部との通話が可能です」
「はへー」
便利なものだ。そういえば、主が急病で倒れたとき、パートナーロイドが即座に救急に連絡して助かった、なんて話も聞く。
「あれ、じゃあ僕の方からもナナミに電話掛けられるってこと？」
「はい。管理アプリに通話機能がございます」
「あ、ホントだ……」
スマホのナナミの管理アプリを見ると、確かに直接通話のアイコンがあった。

「ご主人様からも何かご連絡がありましたら、そちらをお使いくださいませ」
「うん、了解。……ええと、それじゃあ、行ってくるね」
「はい、ご主人様。長々とお引き留めして申し訳ございません」
「ううん。……ええと」
玄関で靴を履き、ドアを開け、……ちょっとした誘惑に駆られ、僕は足を止める。
「……ナナミ、行ってらっしゃいのキスしてほしいな」
「かしこまりました」
いつも通りの無表情で応え――ナナミは僕に一歩歩み寄ると、僕の肩に手を置いて、目を閉じて、僕の唇に唇を寄せ――。
柔らかいナナミの唇が触れて、僕もナナミの肩に手を置いて、
――ナナミが舌を差しだしてこようとして、慌てて唇を離す。
「……し、舌は絡めなくていいよ、うん」
「そうでしたか？　申し訳ありません」
「いや、僕の説明が足りなかった……。行ってらっしゃいは口を合わせるだけでいいから」
「記憶しました」
危ない。ベロチューされたらこの場で押し倒してしまうところだった……。

「それでは、お帰りをお待ちしております」
「うん、――行ってきます」
今度こそ玄関を出て、頭を下げて僕を見送るナナミを後にして――ドアを閉める。
マンションの廊下から、既に高く上がった太陽を見上げて、僕は大きく息を吐いた。

◇　◆　◇

これがエロ漫画とかだと、第2ヒロインとして大学にサークルの気になる先輩（美少女）とかが出てくる展開かもしれない。それでなんやかんやでナナミと3Pしたりする展開になるのかもしれない。
しかし生憎、僕の大学生活にそんな華やフラグなど存在しなかった。
――というか、僕が大学に行きたくなかったのは単にナナミと離れがたかっただけでなく。せっかく入った大学だというのに、入学一ヶ月弱、僕は完全にぼっちだったからである。
基礎クラスで友人を作りそびれたのが最初の躓き。サークルの見学もいくつか行ってみたものの、ついて行けないウェイ系リア充ノリだったり、話の通じないオタク系だったり、

新歓で連れて行かれた店で目の前に座った先輩の性格が最悪だったりして、入るサークルを決められないまま新歓シーズンも終わろうとしている。

結果、大学内には大勢の学生が行き交っているのに、僕は他愛ない雑談をする相手ひとりいない。友人を作るには完全にタイミングを逸してしまった今、この状況を打破できる見込みはほとんど無いという絶望的な状況にあった。そもそも小学校の頃から、僕は友達を作るのが苦手だったわけで……。それでも高校まではなんとか気の合う仲間を見つけられたけれど、高校時代の数少ない友人とも大学は別なのでどうしようもない。

ただ選択した講義をぼんやりと聞き流すだけの、砂を噛むような大学生活。華やかなキャンパスライフとやらはどこにあるのだ。森見登美彦の小説の主人公だって悪友や話相手がいるだけ僕よりマシというものである。

――というわけで、講義の時間、僕が何をしているかというと。

ぼんやりと、ナナミのことばかり考えているわけである。

……ああ、帰ったらナナミのおまんこに中出ししたい……。ナナミをイカせまくって、トロットロのおまんこに締め付けられてひたすら中出し……。ベロチューしながらラブラブ射精……。

昨日と今朝の行為の記憶と感触とを、ひたすら反芻しながら、ぼんやりと妄想にふける。勃起ペニスは足に挟んで誤魔化して、オナニーを覚えたての中学生のように、僕は講義の時間をずっとエロ妄想でやり過ごした。

ああ……早く帰りたい……。帰ってナナミとエッチしたい……。

その一心で、ひたすら時間が早く過ぎるのを待ちながら、妄想に耽り続ける。

ナナミがいない。そのさみしさを埋めるように、僕はひたすら妄想し続ける。

……ある意味、今までで一番充実していた大学での一日だったかもしれない。

◇　◆　◇

そんなわけで、悶々とし続けて長かったような、妄想だけしてたので短かったような大学の講義が終わる。5コマ目が終わり、時間は6時。僕は速攻で教室を出て、全速力で自宅へ向かってダッシュする。

ああっ、ナナミ、ナナミ……！

夢じゃないだろうか。帰ったらガランとした自室だけがあって、ナナミがいたことは全部夢だったというオチになっていないだろうか。そんな理由のない不安に駆られながら、

僕は走る。とにかく早くナナミの顔が見たかった。ナナミに抱きつきたかった。ナナミに抱きしめてほしかった。

はぁっ、はぁっ――。高校時代でもこれほど全力で走った記憶がない。他の何も目に入らず、僕はただ一直線に自宅マンションへ駆けこみ、自室へと向かい――。

自室のドアの前で、乱れた息を整える。額の汗を拭って、ドアノブに手を掛ける。

ガチャリ。ドアノブが回る。鍵は掛かっていない。――ドアが開く。

「おかえりなさいませ、ご主人様」

――ナナミは、ちゃんとそこにいた。

変わらない無表情とメイド服姿で、玄関に立って、僕を出迎えてくれていた。

「……ただいま、ナナミっ」

たまらず、僕は靴を脱ぐのもそこそこに、ナナミに抱きついていた。背後でドアが閉まる。ナナミのおっぱいに顔を埋めるように抱きつくと、ナナミは優しく抱きしめ返して、頭を撫でてくれた。

「ご主人様、お疲れ様でした。お早いお帰りで嬉しく思います」

「ううっ……ナナミ、ナナミぃ……。寂しかったよお……」

ナナミの柔らかいおっぱいに顔を擦りつけるようにして、僕は恥も外聞もなくナナミに

甘える。大学で妄想して誤魔化していた感情が、ナナミの顔を見た瞬間に溢れ出していた。

そうだ。ナナミと離れて僕はどうしようもなく寂しかったのだ。家に帰ればナナミがいるのに、大学ではひとりぼっち……。どれだけ妄想で誤魔化しても、その事実にどうしようもなく、僕は寂しかったのだ。

ナナミ……ナナミぃ……。ナナミがいる。ナナミがここにいる。そのことが泣きたくなるぐらい嬉しい。ただ僕を抱きしめてくれる誰かがいる、そのことだけが――あまりにも幸せだった。

「ご主人様、そう仰っていただけるのは、この上ない光栄です。私も、ご主人様のお帰りを、今か今かと待ちわびておりました。ご主人様が無事にご帰宅されて、とても安心して、嬉しく思います」

なでなで。ああ……頭を撫でられながらそんなこと言われたら、もうナナミから離れられなくなるぅ……。

さっきまでのエロ妄想も全部吹き飛んで、ただひたすらナナミに甘えたい、その気持ちだけが僕を支配する。

「うう……ナナミ、頭もっとなでなでして……」

「はい、ご主人様」

「ナナミ……ううっ、ナナミがいなくて寂しかったけど、ちゃんと大学サボらずに講義に出てきたよ……褒めて……」

「はい、ご主人様はとてもご立派です。きちんと大学に通われて、講義を受けられておられるご主人様はとても偉いです。ご主人様は、私の誇るべき大切で立派なご主人様です。そんなご主人様にお仕えできて、私はとても幸せなパートナーロイドです」

「うううう……ナナミぃ……」

ああ、ダメだこれ、人をダメにするやつだ……。

何をしても喜んでくれて、生きてるだけで褒めてくれるパートナーロイド。ああ……すごい……。こんなの人としてダメにならざるをえない……。

「ナナミ……ううっ、僕みたいなダメなご主人様でホントにいいの……？　ナナミにエッチなことばかりお願いするダメなご主人様で……」

「そんなことはございません、ご主人様。今までご主人様にしていただいたことは、全て私にとって喜びであり、幸せです。ご主人様に裸身を見ていただいたことも、おっぱいやおまんこを洗っていただいたことも、ご主人様のおちんちんを洗って射精していただいたことも、おまんこにおちんちんを挿入して中出ししていただいたことも。下着越しにおまんこを触っていただけたことも、下着を脱がせていただいたことも、おまんこに指を入れ

ていただいたことも、おまんこを舐めていただいたことも。おまんこがイクことを教えていただいたことも、ご主人様のおちんちんをしゃぶらせていただいたことも、ご主人様のザーメンをお口の中にいただけたことも。ご主人様に後ろからおまんこにおちんちんを挿れていただいたことも、おっぱいを揉み、キスをしながら中出ししていただいたことも。もちろん、今朝にしていただいたことも全て、ご主人様がくださった、私の喜びと幸せです」

「うううううう……」

ひとつひとつ、昨日の僕がナナミにしたことを列挙されて。

その上で、ナナミはその全部を、嬉しいと言ってくれる。

「ですからご主人様、これからも私にどんなことでもお申し付けください。どんなことでもしてください。ご主人様がそれで喜んでくださるなら、私はどんなことでも幸せです。エッチなことというのが、ご主人様におっぱいやおまんこを弄ったり舐めたりしていただき、ご主人様のおちんちんを気持ち良くしてさしあげることなのでしたら、ご主人様、私はもっともっとエッチなことをしたく思います。ご主人様にもっともっとエッチなことをしていただきたいです」

「うあああっ、ナナミっ、ナナミぃっ――」

もう、我慢も何もない。

僕はナナミのおっぱいから顔を上げて、貪るようにナナミにキスをした。

ナナミはいきなり僕に口を吸われて、けれどどんな反応をするでもなく、僕にされるがままに身を任せてくる。ナナミの唇を割って舌を差し入れると、ナナミの舌は僕の舌を出迎えるように絡まってきた。ぴちゃぴちゃと唾液の音が口と口の間で混ざり合う。頭の奥が痺れるような快感。

そうしてナナミの舌を吸いながら、僕は両手でナナミのおっぱいをメイド服のエプロンの上から揉みしだいた。服越しに柔らかく、僕の手の中で形を変えるナナミのおっぱい。おっぱいを揉みながらナナミの舌を吸って、ナナミの口の中に唾液を流し込みながら、服の上に浮いてきたナナミの乳首を手のひらでグリグリと転がす。

「んむっ、んちゅぅぅぅっ……ぢゅっ、ぢゅうううっ」

「ん……ごひゅじんひゃま……おまんこ、イキまひゅ……」

僕が息継ぎをしようと唇を離すと、ナナミはそう口にした。そして次の瞬間――。

ぱたたたっ、とナナミの足下から水音。見下ろせば、ナナミのメイド服のロングスカートの下、ナナミのソックスに染みこもうとするように、フローリングに小さな水たまりができている。

「……ナナミ、もうおまんこイッちゃった？」
「はい、ご主人様。ご主人様にキスをしていただき、舌を吸われながら、おっぱいを揉まれて、またおまんこのお汁が溢れてしまいました」
「ううう、ベロチューしながらおっぱい揉まれただけでイッちゃうなんて……ナナミのおまんこはホントにエッチだなぁ……。おまんこのお汁、こんなにお漏らししちゃって……ううう、かわいいよ、ナナミ」
「ありがとうございます、ご主人様。お褒めにあずかり光栄です。ご主人様にたくさんエッチなことをしていただけて、おまんこのお汁の分泌量がとても増えやすくなっております。ご主人様は私のおまんこがイキやすく、お汁をお漏らししやすい方がよろしいでしょうか」
「うんっ、いいよナナミ……！　いっぱいおまんこのお汁お漏らししようね……っ」
「はい、ご主人様。ご主人様にたくさんエッチなことをしていただいて、たくさんおまんこイキたく存じます。どうぞ私のおまんこのお汁を、ご主人様、たくさんお漏らしさせてくださいませ」
——ああ、妄想なんて、絶対に本物のナナミには勝てないのだ。
僕はたまらず、ナナミにぎゅっとしがみついた。

11

ナナミがお風呂を沸かしてくれていたので、先にお風呂に入ることにした。
もちろん、ナナミと一緒にである。狭い浴室で、裸になったナナミと密着しながら、身体の隅々までナナミに洗ってもらう。うう、王侯貴族の気分……。
「ご主人様、かゆいところなどございませんか」
「うん、大丈夫、気持ちいいよナナミ……。ナナミもどう？　おまんこ気持ちいい？」
「はい、ご主人様。ご主人様におちんちんを挿れていただけて、おまんこがとても幸せです」
「くぅぅっ、一日ぶりのナナミのおまんこ最高だよ……っ」
密着しているのは、もちろん僕とナナミの性器である。浴室のタイルの上、ナナミに挿入しながら身体を垢すりタオルで洗ってもらうという背徳。ナナミの手にしたタオルが身体を擦るたびに、ナナミのおまんこが動いてペニスを締め付けながら擦る。
ああ、最高……。ずっとナナミと繋がっていたくなる……。

「ああ……ナナミのおまんこ気持ちいい……」
「光栄です、ご主人様。私のおまんこもお汁がまたどんどん溢れております」
「ううっ、そうだねナナミ……。ほら見て、僕のおちんちんとナナミのおまんこが繋がってるところ……」
「はい、ご主人様のおちんちんが私のおまんこの穴に出入りしているのがよく見えます。ご主人様、おちんちんの根元も洗ってよろしいでしょうか？」
「うん、お願い……うううっ」
ナナミにペニスの根元から玉袋にかけてをタオルで擦られ、僕は呻くしかない。ああっ、手で玉袋ふにふにされるの、やば……っ。
「うあああっ、ナナミっ、射精るっ、もう射精すよっ」
「はい、ご主人様。どうぞお射精なさってください。私のおまんこもご一緒にイッてよろしいでしょうか？」
「うんっ、イッてっ、僕と一緒にイッて……っ、んぁぁぁっ――！」
「はい、では、イカせていただきます――」
びゅるるるっ、びゅくびゅくっ、びゅううっ――。
ぷしっ、ぷしゃあっ、ぷしゃあああああっ――。

僕がナナミの膣内に射精するのとほぼ同時に、ナナミのおまんこはまた潮を吹いて痙攣した。膣壁がキツく締め付けてきて、僕の射精をさらに促してくる。ああっ、搾り取られる……っ。ペニスの根元に浴びせられるナナミの愛液が心地よい。

「あああああぁぁぁ……イッてるナナミの痙攣おまんこで中出し最高……」

「ありがとうございます、ご主人様。ご主人様に中出ししていただきながらおまんこイクことができて、私も大変嬉しく思います。ご主人様、せっかく洗ったおちんちんの根元に私のおまんこのお汁がたくさんかかってしまいましたが、大丈夫でしたでしょうか？」

「うん、ナナミのおまんこのお汁ならいくらでもかけていいよ……。はぁぁ……ナナミのおまんこ、いっぱいお汁のお漏らしできて、エッチで偉いね……」

「ご主人様、お褒めいただき大変光栄です。これほどご主人様にお喜びいただけると、私のおまんこがお汁をたくさんお漏らしできるものであることを誇らしく思います」

ナナミの頭を撫でてやると、ナナミは嬉しそうにおまんこで僕のペニスをきゅうきゅうと締め付けてくる。表情にも声にも感情が出ないナナミの身体で、唯一素直に感情を表現するのがそのおまんこなのかもと考えると、ますますナナミのおまんこが愛おしくなってしまう。

現実的に考えると、ナナミのおまんこがイクたびに潮を吹くのは、何しろ表情にも声に

も性感が出ないナナミなので、「イッた」ということをわかりやすくするための機能なんじゃないかと思うけど……。何はともあれ、ナナミが喜んでくれた証なら僕も嬉しい。
「ご主人様、それではお身体お流しします」
「うん、おちんちん挿れたままでいい？」
「はい、もちろんです。どうぞまた何度でも中出しなさってください」
というわけで、ナナミと繋がったままシャワーで身体を流される。ああ、極楽……。
「あー……気持ち良かった。じゃあ、次はナナミの身体洗ってあげるね」
「はい、ありがとうございます、ご主人様」
ナナミから泡だった垢すりタオルを渡されて、それから僕はひとつ思いつく。
「ナナミ、今度は後ろからおちんちん挿れてあげるから、この鏡の方向いて、僕の膝の上に座って足広げて」
「かしこまりました」
というわけで、浴室の鏡に向かって背面座位に切り替え。ナナミを膝の上に載せて、後ろからおまんこにペニスを挿入する。その様を、浴室の小さな鏡に映して覗きこんだ。
「ほら、ナナミ。これでおまんこにおちんちんが入ってるところ、よく見えるよ」
「はい、ご主人様のおちんちんが私のおまんこに入っていらっしゃるところが、鏡に映っ

てよく見えます。私のおまんこが広がって、ご主人様のおちんちんを包み込んでいるところを見られて嬉しいです。ご主人様、度重なるご配慮、感謝いたします」

うーん、このシチュって普通は恥ずかしがらせるやつなんだけどな……。

ナナミの羞恥心をゼロに設定したのは僕なので文句は言えない。

「それじゃあ、ナナミのおまんこズポズポしながら、おっぱい洗ってあげるからね……」

「はい、ありがとうございます、ご主人様」

腰を揺すりながら、僕は後ろから石鹸まみれの手でナナミのおっぱいを揉みしだく。

おっぱいをヌルヌルと弄ぶたびにナナミのおまんこはキツく締め付けてきて、さっき射精したばかりなのに、快感に頭が痺れてくる。

「あー……ナナミのおっぱい揉みながらおまんこに挿入するの好き……」

「はい、私もご主人様におっぱいを揉んでいただきながら、おまんこにおちんちんを挿れていただくことが好きです。おまんこのお汁もまたすぐにお漏らししてしまいそうです」

「ううっ、ナナミ、いつでもイッていいよ……ナナミがお漏らしするところ見せて……」

ナナミの首筋に顔を埋めながら僕はそう呻くように言って……それからふと疑問に思う。

「……ねえナナミ、ナナミっておしっこするの？」

「おしっこ、ですか。はい、外観としてそれにあたる行為はいたします。体内の古くなった冷却水を排出するにあたって、尿道口からの排出が機能として搭載されております」

冷却水ですか、そうですか。やっぱりアンドロイドなんだなあ……。

「じゃあ、普段からトイレでおしっこしたりするの？」

「はい、お見苦しくないよう、ご主人様がお休みの間か、外出されている間ですが。体内の冷却水などの補充もその時間に経口で行います。通常の水道水で問題ありませんので」

「水道水でいいんだ……」

経済的と言うべきなのだろうか。というか、口から水を飲んで尿道から排出するって人間と一緒じゃないか。可能な限りユーザーに「機械っぽさ」を感じさせないための作りなんだろうなあ。ナナミの感情抑制はそれに相反してる気はするけど、そこはそれ、需要と供給の問題だろう。すっかりそんなナナミにメロメロにされている僕のようなユーザーがいるわけだし……。

しかし、それはそれとしてである。悪い誘惑が僕に囁きかける。

……ナナミがおしっこするところ、見てみたいなあ。

いやいや、そういうフェチは持っていないつもりだけど……。

単なる冷却水だというし、女の子がおしっこするところを見てみたいという気持ちはそ

ういうフェチの有無に関わらず男なら大なり小なりあるはずだ。あるよな？　僕だけじゃないよな？

「……な、ナナミ。ナナミがおしっこするところ、見たいな……」

「はい、ご主人様がお望みでしたら、後ほどお手洗いでお見せしますが」

誘惑に駆られて囁いてみると、即OKが出てしまうわけである。さすが羞恥心ゼロ。いやでもちょっと違う、そうじゃないんだよナナミ……。

「い、いや……ここで、このまましてほしい」

「ここで、ですか？　よろしいのでしょうか」

「うん……ナナミ、次に僕が中出ししたとき、おまんこイクのと一緒におしっこして……っ」

「かしこまりました。ではご主人様、次におまんこがイキましたら、僭越ながらご主人様の前でおしっこさせていただきます。どうぞご覧くださいませ」

「うあああっ、ナナミっ、ナナミぃっ……ううっ、そんなこと言われたらまた射精るっ」

「はい、ご主人様、どうぞ中出しなさってください。私のおまんこもイカせていただきますので、一緒におしっこいたします――」

どくっ、どくどくっ、びゅるるるるっ、びゅるるるっ、びゅくびゅくっ――。

ぷしっ、ぷしゃあああっ――。

僕がナナミのおっぱいを掴んだまま思い切り中出しすると、ナナミのおまんこはまたきゅうきゅうと強く僕のペニスを締め付けながら潮を吹く。――そして。

ちょろろろろっ……。ぱたたたたっ……。

鏡の中で、僕とナナミの結合部の少し上から、透明な液体が放物線を描いて浴室の床に飛んだ。

ああ……ナナミがおしっこしてる……っ。僕に中出しされて、おまんこイキながら、おしっこ漏らしてる……っ。鏡に向かって足を大きく広げたナナミのおまんこから、アーチをかけるおしっこの放物線。ううう、ヤバ、エロすぎ……っ！

「な、ナナミいっ……。ナナミのおしっこ……っ、ううう」

「はい、ご主人様。ご主人様に中出ししていただいて、おまんこイキながら、おしっこいたしております。いかがでしょうか？」

「くぅぅっ……いいっ、いいよナナミ……っ。ナナミがおしっこ漏らすの好き……っ」

「ありがとうございます、ご主人様。そう仰っていただけますと嬉しいです。このような行為はお見苦しいのではないかと考えておりましたが、ご主人様がお望みになられるのでしたら、いつでもご主人様の前でおしっこさせていただきますので、お申し付けください

ませ」

うううっ……。それはそれで非常に背徳的なアレだけど、「おしっこして」「はい」でいきなり放尿されるのは、なんかこう風情がないような気も……。

「ん……ナナミ、おしっこするのは、おまんこイクときに、ときどき漏らしちゃう感じでお願いしたいんだけど……。あと、布団が濡れるから、ベッドでは無しで……」

「かしこまりました。では、足元が濡れても構わない状況で、ご主人様にエッチなことをしたいただいておまんこがイク際に、一定の確率でランダムにおしっこが出るようにいたします。もちろん、ご主人様がおしっこをお望みの際はいつでもおしっこいたしますので、その都度お申し付けください」

「……うん、ううっ」

ああ、この隠しきれないナナミのアンドロイド感……。それで萎えるどころか、なんかかえって興奮してしまう僕は、どんどん性癖を開発されてしまっている……。

「うぁぁ……ナナミのおしっこお漏らし見たら、また興奮してきた……。ううっ、もう一回中出ししていい？」

「はい、もちろんです。どうぞ何度でも中出ししてくださいませ。私はまたおしっこを漏らせばよろしいでしょうか？」

「ううっ、ナナミに任せる……っ」
ああ、たまらん。ナナミに腰を振りながら、僕はぎゅっとナナミの背中にしがみつく。
この調子でナナミと生活していたら、ナナミをエッチにする前に、僕の方がどんどん変な性癖に目覚めてしまいそうだ……。

◇　◆　◇

そうしてナナミにまた中出しして（ナナミは今度はイクだけでおしっこは漏らさなかった）、さすがに三回連続中出しで少しペニスが柔らかくなったので、一息ついてナナミに髪を洗ってもらった。
で、その後。僕の部屋の浴槽は、あいにくふたりで入ることを想定したサイズではない。ひとりで入るのがやっとの狭い風呂なので、挿入密着しながら入るのも厳しいわけで……。
「ご主人様、私はいかがいたしましょうか」
「……じゃあナナミ、今度はそこに立ってて、おまんこ見せて」
「かしこまりました」
僕はひとりで浴槽に浸かって、ナナミには浴槽の前に立っていてもらうことにした。い

ささか気が引けるけど、ナナミは別に裸でいても風邪を引くわけでもない。それにナナミは、僕にエッチなことをされると一番喜んでくれるわけだし……。

狭い浴槽の中で膝立ちして浴槽の縁に手を掛けると、ちょうど手前に立ったナナミのおまんこが顔の前にくる。ああ……ナナミの直立おまんこ……。パイパンなので割れ目の先っちょが丸見えなのが本当にエッチだ……。

「ああ……お風呂に浸かりながら見るナナミのおまんこ……うー、最高」

「光栄です、ご主人様。おまんこ、お触りになりますか？」

「うん、触るっ……。ナナミのおまんこ弄るっ……」

手を伸ばし、ナナミのぷにぷにおまんこを指で弄り回す。

割れ目を押し広げると、割れ目から中出ししたザーメンがポタポタと浴室のタイルの上にこぼれ落ちる。うう、エロ……。

指を入れて膣内を掻き回してザーメンを掻き出し、クリトリスの周囲をむにむにと揉みほぐしてやると、ナナミのおまんこからはトロトロと蜜が溢れて指を伝う。

「ううっ……ナナミのおまんこ、いつ見てもエッチだなぁ……」

「ありがとうございます、ご主人様。私のおまんこがいつでもエッチであるとすれば、それはいつでもご主人様にエッチなことをしていただけますおかげです」

「はあ……いつでもおまんこ見せてくれるエッチなナナミ好き……。ナナミのつるつるおまんこ好き……。ううっ、普段のメイド服も好きだけど、やっぱりナナミに常時おまんこ露出もしてほしいかも……」
「かしこまりました。では、今夜はお風呂から出ました後も、このまま裸でおりましょうか」
「うーん、悩ましい……。お風呂出てから考えていい？」
「承知しました。ではその前にご主人様、そろそろおまんこがまたイキそうなのでが、このままイッてしまってもよろしいでしょうか」
「あ、うん、イッていいよナナミ」
「ありがとうございます。では、またおまんこイカせていただきます――」
僕が挿れた指を出し入れすると、ぷしゃああぁっ、とナナミは立ったまま、またおまんこから潮を吹く。僕のザーメンが混ざったナナミのおまんこのお汁がタイルに飛び散り、そして――。
ちょろろろろっ……と、そのおまんこから透明な液体が蛇口から出るように溢れて、触っていた僕の手にかかって飛び散った。――あ、ナナミのおしっこ……。
ナナミのおしっこは浴槽の壁に当たって、排水溝に流れていく。

ああ、平然とした顔で立ったままお漏らしするナナミ……ううっ、やっぱり変な性癖開発される……。

「申し訳ありません、ご主人様。おしっこが出てしまいました。ご主人様の手にかかってしまいましたが、大丈夫でしたでしょうか」

「……うん、大丈夫。ナナミのおしっこお漏らし好き……」

「恐縮です、ご主人様。おまんこのお汁だけでなく、おしっこのお漏らしでもご主人様にお喜びいただけて、大変嬉しく思います。どうぞご主人様、これからもたくさんお漏らしさせてくださいませ」

「うううっ……ナナミのおまんこ……エッチなお漏らしおまんこ好き……っ」

「はい、ご主人様、私のおまんこはエッチなお漏らしおまんこです。ご主人様にたくさんおまんこのお汁やおしっこを浴びせてしまいます、エッチなお漏らしおまんこです。そのようなおまんこでよろしければ、ご主人様のお好きなだけ弄ってくださいませ」

うあああっ、冷静な口調でそんなこと言われたら浴槽の中で射精しそう……。

僕がたまらずナナミのおまんこをさらに弄ろうとすると、不意にナナミの制止が入った。

「ご主人様、顔が赤くなってきております。のぼせてしまわぬようご注意ください」

「……うん」

あ、ヤバ、言われたらのぼせてきた……。
「……そ、そろそろ出ようか、ナナミ」
「かしこまりました。まだおまんこの中にご主人様のザーメンが若干残っておりますが、これは洗い流した方がよろしいでしょうか？」
「あ、うん……じゃあ、洗っておいて」
「承知しました」
ざぶん、と僕が浴槽から立ち上がると、ナナミは股間にシャワーを当てて僕の中出しザーメンを洗い流し始めた。ううっ、そんな格好見せられたらまた襲いかかりたくなる……。
「ご主人様、洗浄終わりました。では、ご主人様のお身体を拭くタオルとご主人様のお着替えの支度をいたしますので、お先に失礼いたします」
「……あ、う、うん」
股間からシャワーの水を滴らせて、ナナミは立ち上がり、浴室を出て行く。
——ああ、うう……。僕、本格的にどうなってしまうんだろう……。
僕の理由のよくわからない溜息は、浴室の湯気の中に溶けて消えた。

12

「ご主人様、お身体お拭きします」
「あ、うん、ありがとう」
浴室を出ると、ナナミが裸のままでバスタオルを手に待っていた。こうして身体を拭いてもらうことに慣れ始めている自分もどうかと思う。うう、勃起ペニスをタオルで擦られるの気持ちいい……。
「ご主人様、おちんちんがまた硬くなっていらっしゃいますが」
「うん、さっきナナミのおまんこ弄ってたから……またガチガチになっちゃったよ」
「おまんこ、お使いになりますか？」
「んー……いや、そのままバスタオルで擦って。おっぱい揉んであげるね」
「かしこまりました。ありがとうございます、ご主人様」
ごしごし。ナナミにバスタオル手コキされながら、ナナミのおっぱいを正面から揉みしだく。ああ、お風呂あがりのナナミのおっぱい、しっとりして触り心地最高……。愚息を

タオルで擦られるのも、絶妙にもどかしくて、クセになりそう……。
「ご主人様、力加減はこのぐらいでよろしいでしょうか」
「あー……いいよナナミ、ナナミのバスタオルコキ気持ちいい……。ナナミはどう？　おっぱい揉まれて、またおまんこトロトロになってる？」
「はい、ご主人様。ご主人様におっぱいを揉んでいただきますと、すぐにおまんこのお汁がたくさん分泌されて溢れてきます。おまんこのお汁はもう、太股まで伝っております」
「ううう、ナナミっ、やっぱりおまんこ使うから、洗濯機に手ついてお尻こっち向けて……っ」
「かしこまりました。どうぞおまんこをお使いくださいませ」
おっぱいから手を離し、ナナミに洗濯機に手をつかせてお尻を向けさせる。その柔らかく形のいいお尻を掴んで、僕は愚息を濡れそぼったナナミの割れ目にあてがい、一気に腰を打ち付けた。
ずぷぷぷぷっ……ずんっ。根元までペニスが飲みこまれて、僕はナナミの背中に覆い被さるように身体を倒し、ナナミにもたれかかる。ぎゅううう、とキツくペニスを締め付けてくるナナミの膣内。ううう、搾り取られる……っ。
「あぁ～……ナナミのおまんこ最高……っ」

「光栄です、ご主人様。私のおまんこも、ご主人様におちんちんを挿れていただけて喜んでおります。お汁が垂れているのがわかりますでしょうか」
「うんっ、ナナミのおまんこトロトロですごいよっ……。くぅぅぅっ」
たまらず腰を振ってナナミの一番奥を打ち付けると、洗濯機がガタガタと揺れた。ピンと伸びたナナミの足の間から、ポタポタと脱衣場の床に滴る蜜。奥をグリグリと亀頭で押すと、きゅううっ、と亀頭に何か吸い付いてくるような感覚。ううううっ、これアレ？　エロ漫画でよくある子宮口が吸い付いてくるってやつ？　あれリアルじゃあり得ないって聞いた覚えあるけど……くぁぁぁっ。
「うぁぁぁっ、ナナミのおまんこにザーメン吸い取られるぅっ……」
「はい、どうぞご主人様、またいつでも中出しなさってくださいませ。ご主人様、またお漏らししてしまうかもしれませんが、私もイッてよろしいでしょうか？」
「うんっ、いいよっ、ナナミぃっ……くぁぁぁっ、あああああっ！」
「はい、では、イカせていただきます――」
びゅるるるるっ、びゅくびゅくっ、どくどくどくっ、びゅうううっ――。
ぷしゃっ、ぷしゃあああ……っ。ちょろっ、ちょろろろろ……。ぱたたたたっ。
僕が盛大に中出しした瞬間、ナナミも潮を吹いて膣内を痙攣させ――そして、脱衣場の

床におしっこ（冷却水）を漏らしていた。ナナミのおしっこが洗濯機に跳ね、僕の足にも飛び散る。ああ……中出しされてお漏らししちゃうナナミかわいい……。

「ご主人様、またお漏らししてしまいました。申し訳ありません」

「いや、いいよ、ここでなら……。ううっ、イクときお漏らし癖ついちゃったナナミかわいいよ……好き……」

「恐縮です、ご主人様。ご主人様に中出ししていただき、イキながらおしっこをお漏らしすること、ご主人様にお喜びいただけるなら、私も好きです」

うう、そこは普通恥じらうところだと思うけど……。羞恥心ゼロのナナミの発言が股間に悪い。

少し力をなくしたペニスをナナミの膣内から引き抜く。にゅぽん、とペニスが抜けると、ナナミはザーメンの垂れるおまんこを、さっきまで僕のペニスを拭いていたバスタオルで拭き始める。

「……ナナミ、おまんこ拭いてあげるよ」

「よろしいのですか？　恐縮です、ご主人様」

ナナミの手からバスタオルを受け取り、蜜とザーメンとおしっこが混ざった液体が垂れるナナミのおまんこを、バスタオルで拭いてあげる。タオル越しに感じるナナミのおまん

この柔らかさ。ううっ、これもまた……。なんか直接触るよりかえって背徳感が……。
「ご主人様、おまんこを拭いていただけて、とても嬉しいです」
「うん……これからもナナミがおしっこ漏らしちゃったら、僕がおまんこ拭いてあげるね……。ナナミはもう、自分でおまんこ拭かなくていいよ。全部僕がやってあげる……」
「よろしいのでしょうか、ご主人様。私はご主人様のお世話をするパートナーロイドですが、それでは私がご主人様にお世話されることになってしまいます」
「いいの、いいの。僕がしたくてしてるんだから……僕の言うことが聞けない？」
「いえ、滅相もございません。それではご主人様、今後は私のおまんこを拭く必要が生じましたら、ご主人様にお願いさせていただきます」
「うんっ……はぁ、ナナミのおまんこ好き……」
「ありがとうございます、ご主人様」
どろっ……とナナミの膣内から溢れてくる僕のザーメンを、バスタオルで受け止める。
ナナミの膣内からはさらにトロトロと蜜が溢れて、僕のザーメンを押し流していく。これってナナミのおまんこが体内洗浄してるのかな……。ううん、あまり考えないようにしよう。
「ご主人様、もう大丈夫です。おまんこを拭いていただき、ありがとうございます」

「あ、うん、もういいの？」
「はい、ご主人様に拭いていただき、おまんこは綺麗になりました。……床のおしっこをお掃除しますので、ご主人様はお着替えしてお待ちくださいませ」
僕の手からザーメンと愛液まみれのバスタオルを受け取って他の洗濯物とは分けて置き、それからナナミは戸棚から雑巾を取りだして床にかがみこむ。足元に漏れたおしっこはただの冷却水なんだから、そのまま乾くに任せてもいいような気もするけど……。
うっ、それより、かがみこんだナナミの顔が僕のペニスのすぐ前に……。
「……ナナミ、床の掃除しながらでいいんだけど」
「はい、なんでしょうか、ご主人様」
「ナナミのおまんこのお汁で濡れてる僕のおちんちん……ナナミのお口で綺麗にして」
僕は半勃起ペニスをナナミの顔の前に差し出す。ナナミは僕の顔を無表情に見上げた。
「かしこまりました。ご主人様のおちんちんを綺麗にすることを忘れておりました、申し訳ありません。お口で綺麗にするというのは、どのようにすればよろしいのでしょうか？」
「ううっ……お口でおちんちんをしゃぶって、ナナミのお汁を舐め取って……っ」
「承知しました。しかし、それでは口内の潤滑液でまたご主人様のおちんちんが濡れてしまうかと思いますが」

「そ、それでいいの……っ。ナナミに、おちんちんしゃぶって欲しいの……っ。床の掃除しながらでいいから……っ」
「かしこまりました。では、床を拭きながら、ご主人様のおちんちんをお口で綺麗にさせていただきます」
雑巾で床を拭いながら、ナナミは、あむっ、と僕の半勃起ペニスを咥えこむ。
ぬるんっ、としたナナミの口内に包まれて、ペニスがまた硬くなってくる。
「んむっ……むぐ……れろ、れろぉ……ちゅ、ちゅううっ」
「うああっ、いいっ、いいよナナミ……っ。ううっ、お掃除フェラ最高……っ」
中出しの後のお掃除フェラ、すご……。うう、気持ちいい……っ。
ナナミの舌が亀頭に絡みついて、口全体がペニスを締め付けて……くぅぅっ。
僕はナナミの頭を撫でる。さらさらの黒髪を撫でてあげると、ナナミはいっそう深くペニスを飲みこんでくれる。喉奥までペニスを咥えたナナミは、手では床を拭きながら、僕のペニスを味わうみたいに目を閉じている。ああ……っ、ヤバ……。
「ううっ、また射精るっ」
どくっ、どくどくっ、びゅるるるっ——。
中出しの直後なので勢いは無かったけれど、また射精してしまった。ナナミの喉に直接

ザーメンを流し込みながら、僕はナナミの頭を押さえて身を震わせる。
「あああぁぁぁ……ふぁぁぁぁ……」
「……んぐっ、んく、んく……ぷぁ」
ナナミは無表情に僕のザーメンを飲み干すと、ペニスから口を離して僕を見上げた。
「ご主人様、またザーメンを飲ませていただきありがとうございます。お掃除フェラ、というのは、これでよろしかったでしょうか？」
「うう……うん、良かったよナナミ……ありがとう」
「お喜びいただけたなら何よりです。お掃除フェラというのは、お掃除をしながらご主人様のおちんちんをしゃぶる行為のことでよろしかったでしょうか」
「……あ、いや、それはちょっと違う……。床の掃除とは関係なくて、おまんこに中出ししたあとのおちんちんを、お口でしゃぶってもらうこと……」
「理解しました。おちんちんを濡らしたおまんこのお汁を舐め取ることを指して『お掃除』と称するのですね。フェラ、というのが、お口でおちんちんをしゃぶる行為のことでしょうか」
「……うん。フェラチオ、っていうんだよ」
「記憶しました。ではご主人様、私のフェラチオをご所望でしたら、またいつでもお申し

付けくださいませ」
ああ、ナナミに変な言葉を覚えさせるの、楽しいかも……。

◇　◆　◇

それはそれとして、着替えて一息つくと急にお腹がすいてきた。
「ご主人様、そろそろお夕飯の支度をしてもよろしいでしょうか」
「あ、うん、お腹空いた……」
「かしこまりました。何かご希望のメニューなどございますか」
「いや、ナナミに任せるよ。……ところでナナミ、そのまま裸で料理するの？」
「入浴後の服装に関しましては、ご主人様からご指示をいただく予定でしたが」
裸のまま僕の前に立ったナナミは、無表情にそう言った。
――あ、そういえば風呂でそんな話したっけ。
うう、ナナミの裸は見ていたいけど、さすがに帰ってきてから立て続けに5回も射精したので、ちょっと休憩したい……。
「そうだね……うん、服着ていいよ、ナナミ」

「かしこまりました。下着も身につければよろしいでしょうか」
「……ん？　それはパンツ穿くかってこと？」
「はい。ご主人様、ご指示をお願いします」
「……じゃあ、ノーパンで」
「かしこまりました。では、着替えてお夕飯の支度をいたしますので、お待ちくださいませ」
「うん、出来たら呼んで」
ぺこりと一礼して、ナナミはクローゼットに掛けてあったメイド服を膚の上に直接着ると、キッチンへと向かっていく。僕はぼんやりそれを見送って、それからベッドに倒れこんだ。
ああ、なんか心地よい疲労感……。ナナミに思い切り射精して、一日のもやもやが全部吹き飛んだ。家に帰ればナナミが待っていて、出迎えてくれるという幸福。そうして何をしても受け入れてくれて喜んでくれる……うう、これが幸せってやつだ。間違いない。
ぼっちの大学生活だって、もうナナミがいれば怖くない……。
ナナミがいれば……。ナナミ、ナナミ……。

……。
いつの間にか、そのまま僕はうとうとしていたらしかった。
「……ご主人様、ご主人様。起きてくださいませ」
「ん……うう？」
「お休みのところ申し訳ございません。お夕飯が出来ましたのでお呼びいたしました」
ナナミに揺り起こされ、僕は瞼を開けた。あ、ヤバ、寝落ちてた……。
寝ぼけ眼で、僕はいつものメイド服姿のナナミを見上げる。
「あれ、今何時……？」
「十九時五十五分三十二秒です、ご主人様」
良かった、爆睡してナナミの夕飯を食べ損ねたわけではないらしい。
僕は目元を擦って、ベッドに座り直す。
……あれ、寝落ちする前に、確か僕……。
「ナナミ」
「はい、ご主人様」
「……おまんこ見せて」

「かしこまりました」
僕の言葉に、ナナミはスカートを持ち上げる。
たくし上げられたロングスカートの中――ナナミのノーパンおまんこが目に入って、完全に目が覚めた。ついでに愚息も起きた。
ああ、僕の言った通りノーパンで夕飯作ってくれてたんだ、ナナミ……ううっ。
「ご主人様、おまんこをご覧になっていただけるのは嬉しいですが、お夕飯が冷めてしまいます」
「う、うん、解ってる。冷めないうちに食べるよ。……ナナミがおまんこ見せてくれたおかげで目が覚めたよ、ありがとう」
「恐縮です、ご主人様。ご主人様に下着を穿かないようご指示をいただけましたおかげで、スカートを捲るだけですぐにご主人様におまんこをご覧になっていただけました」
「……ナナミは、パンツ穿いてない方が好き？」
「私の服装に関しましては、ご主人様のご希望が全てに優先されます。ご主人様が私に望んでくださる服装が、私のしたい服装になります。今はご主人様が下着を穿かないことをご希望されましたので、下着を穿かずにご主人様におまんこをお見せできることが嬉しいです」

「ううう……」
そんなこと言われたら、ナナミのおまんこにむしゃぶりつきたくなってしまう。
でも、ここでそうしたらせっかくナナミの作ってくれた夕飯が冷めちゃうしな……。
「……ナナミ、晩ご飯食べ終わったら、デザートにおまんこ舐めさせて」
「かしこまりました」
ああ、ナナミの一挙手一投足が、ひたすら僕の性欲を煽り立てる。
……干からびないように、せいぜいちゃんとご飯を食べて精をつけよう……。

13

「いただきます」
「はい、どうぞお召し上がりください」
食卓には、一人暮らしの夕飯には不釣り合いすぎるほど多彩なメニューが並んでいた。実家のミヨコさんの料理を思い出す。たぶん栄養バランスも完璧に考えられているのだろうけど、あの短時間でこれだけ作ったの？　いや、僕が帰ってくる前に冷めてもいい分は作り置きしていたのだろうけど、改めてＰＲってすごいな……。ていうか、予算足りたんだろうか？
「……ナナミ、食費大丈夫だよねこれ？」
「はい、ご主人様の指定金額内に収まるように買い物いたしております。購入履歴はアプリで確認できますので、ご心配でしたらご確認ください」
「う、うん、わかった」
箸を手に取り、料理を口に運ぶ。……ああ、美味い。やっぱり誰かが自分のために作っ

てくれた料理っていいよな……。一人暮らしを始めて解ったけれど、自分で自分のためだけに料理を作るのはなんというかこう、空しいのである。

どれを食べても、味には何の文句のつけようもない。美味い、美味い。……しかし。

「いかがでしょうか、ご主人様」

「うん、すごいよナナミ、どれも美味しい。……でもさ」

「はい」

「昨日の晩も今朝も思ったけど、やっぱり後ろにじっと立たれてると落ち着かないなあ」

ナナミは食事をしないので、食べている僕の背後に静かに控えている。

ＰＲのナナミに一緒にご飯を食べてと頼んでも困らせるだけなのは解っている。でも、やっぱりせめて、ナナミと一緒に食事をしている気分ぐらいは味わいたい。

「申し訳ございません。では、私はどこにいればよろしいでしょうか」

「……向かいに座ってよ。顔が見える位置にいてほしい」

「かしこまりました」

ナナミは来客用の椅子をダイニングの隅から取りだして、テーブルを挟んで僕の向かいに腰を下ろした。うん、やっぱりこっちの方が……。

……。

「ご主人様？」
「……ごめん、じっと見られるのも落ち着かないや」
ナナミの無表情で、食べているところをじっと見つめられると、それはそれで落ち着かない。ニコニコと嬉しそうに見られるならともかく……ナナミが感情抑制型であることに文句を言う気はこれっぽっちもないけど、食事を見守られるにはナナミの無表情はいささか、威圧感というか。
「失礼いたしました。では、ご主人様から視線を外せばよろしいでしょうか」
そう言ってナナミは俯いてみせる。うーん、それはそれで何か悪い気がする……。
どうしたものか、と味噌汁を啜りながら考え……ひとつ、悪い考えが浮かんだ。
「……ナナミ」
「はい」
「テーブルの下に潜って、おちんちんしゃぶって」
「かしこまりました。では、ご主人様の足元に失礼いたします」
僕がそう頼むと、ナナミはあっさりと席を立ってテーブルの下に潜り込んだ。そうして僕の膝に手を突き、テーブルの下から僕の股間に顔を出す。
「ご主人様、それではフェラチオをさせていただきます」

「う、うん……ううっ」

ナナミが僕のズボンのチャックを下ろし、パンツの中から勃起したペニスを取り出す。きゅっと根元を握られて、そしてぬるりと、ナナミの口が亀頭を含んだ。愚息が湿ったあたたかい感触に包み込まれ、僕は肉じゃがを口に運びながら思わず声をあげる。

うあああっ、食事中にフェラチオさせるなんて……なんというか、ものすごく悪いことをしているような気分になる……。

「じゅっ、じゅぽっ、んむっ、んぐ……ちゅううっ、ぢゅっ、ぢゅ……」

「んっ……むぐむぐ……。はぁ……っ、ナナミのご飯美味しいよ……。ナナミも、僕のおちんちん、美味しい……？」

「んぷっ……はい、ご主人様。ご主人様のおちんちんはとても美味しいです。私はご主人様と食卓を囲むことはできませんが、代わりにご主人様の美味しいおちんちんをしゃぶらせていただけますこと、とても光栄です」

「そっ、そっか……。ナナミにフェラしてもらえば、ナナミも僕と一緒にご飯が食べられるんだね……っ」

「はい、ご主人様。私は食事をする必要はありませんが、ご主人様のおちんちんをしゃぶって、ザーメンを飲んで差し上げることは可能です」

「くぁぁぁっ……じゃ、じゃあ、これからは、ナナミのご飯は僕のおちんちんとザーメンだね……っ」

「かしこまりました。では、ご主人様のお食事の際には、ご一緒におちんちんをしゃぶらせていただきます。どうぞご主人様のザーメンを飲ませてくださいませ。……んむっ、ちゅぅぅぅっ」

「うあああああっ――」

白米を頬張り、味噌汁を啜り、ほうれん草のおひたしを咀嚼し、豚肉の生姜焼きを味わいながら、僕はナナミの舌遣いの快感に翻弄される。ああ、ナナミにフェラされながらの夕飯……。美味しいし、股間は気持ちいいし、食欲と性欲がごっちゃになって、脳が混乱する……。

「なっ、ナナミっ、射精るっ、ザーメン射精るよっ――」

どくっ、どくどくっ、びゅるるるっ、びゅうううっ――。

「んっ……んく、んく、ごく、ごく……」

たまらず口内に射精した僕のザーメンを、ナナミは喉を鳴らして飲み干していく。

僕は射精の快感に打ち震えながら、マカロニサラダを口に運びつつ、左手でナナミの頭を撫でた。

ちゅぽ、と僕のペニスから口を離したナナミは、テーブルの下から僕を無表情に見上げる。
「ご主人様、お射精ありがとうございます。私のための夕食としてザーメンを飲ませていただき、大変光栄です」
「う、うん……。はぁ……ナナミ、僕がご飯食べ終わるまで、おちんちんしゃぶってていいよ……」
「かしこまりました。あむっ」
「うううっ――」
少し柔らかくなったペニスに再び吸い付かれ、僕は痺れるような快感に翻弄されながら食事を続ける。ああ……なんかこの行儀の悪い食事、癖になりそう……。

◇　◆　◇

結局、食べ終わるまでにもう一回ナナミに口内射精してしまった。
「ご、ごちそうさま、ナナミ。美味しかったよ。……おちんちんも、もういいよ」
「お粗末様です、ご主人様。こちらこそ、ご主人様のおちんちんとザーメン、とても美味

しかったです。ご主人様とご一緒に食事ができまして、とても光栄です」

僕のペニスから口を離すと、ナナミは濡れたペニスをハンカチで拭って丁寧にパンツとズボンの中に仕舞ってくれる。ああ、人として堕落する感覚……。

それからテーブルの下を這い出たナナミは、僕の食べ終えた食器を流し台へと片付け始めた。僕がぼんやりその後ろ姿を眺めていると、ナナミは食器を流し台の桶に漬けただけで、布巾を手に戻ってくる。そうして、テーブルの上をざっと布巾で拭うと――。

「それではご主人様、今度はテーブルの上に失礼いたします」

「へ？　え、あ、うん」

よくわからないまま僕が頷くと、いきなりナナミは食卓のテーブルに上って、僕の目の前に座った。そして膝を立てて足を広げると、メイド服のスカートを持ち上げて――スカートの中の、ノーパンおまんこを僕の眼前に晒す。

「ご主人様、ご所望されましたデザートのおまんこです。どうぞお召し上がりください」

「――――」

一瞬思考が停止し――それから我に返って思い出す。

そうだ、僕、夕飯の前にナナミにお願いしたのだった。デザートにおまんこ舐めさせて

――と。

スカートの中、ナナミのノーパンおまんこは既にトロリと蜜を滴らせている。ピンク色の割れ目に、僕はまたごくりと唾を飲んだ。

「そ、そうだった。デザートはナナミのおまんこだったね」

「はい、ご主人様。ご不要でしたでしょうか？」

「い、いやいや、舐めます舐めます！　ナナミのおまんこ、いただきます！」

たまらず、僕はナナミの太股を掴んで、その股間に顔を埋めようとして――。

――ちょっと待て、そんな焦ってがっつくより、もうちょっと楽しめることがあるのでは？

そんな脳内の囁きに、僕は咄嗟に停止する。

「……ナナミ」

「はい、ご主人様」

「さっきの、もう一回言って」

「さっきの、と言われますと」

「デザートのおまんこです、ってやつ」

「かしこまりました。ご主人様、ご所望されましたデザートのおまんこです。どうぞお召

し上がりください」
「ううっ」
こ、これは……僕が要求してナナミが受け入れるという今までの形とはちょっと違う、ナナミの方からの積極的なおねだりなのでは？　いや、元を質せば僕の要求だけど……。なんかこう、ナナミの方から積極的に「おまんこ舐めてください」って言ってるようで興奮する……。
「ナナミ、ちょっと同じことを言い方変えてもう一回」
「はい、ご主人様。本日の夕食のデザートは、ご主人様のご希望に合わせ、私のおまんこをご用意いたしました。どうぞご主人様のお好きなだけ、私のおまんこをお召し上がりくださいませ」
「ううっ、もう一声！　ナナミ、具体的にどうしてほしい？」
「はい、ご主人様に私のおまんこをデザートとして、たくさん舐めていただきたく存じます。そして私のおまんことおまんこのお汁を、ご主人様に美味しく味わっていただければ幸いです。私のおまんこはご主人様のデザートですので、お好きなだけお舐めくいただきたく思います」
「うあああっ……いっ、いただきます！」

脳が痺れる。ナナミの淡々としたおねだりに、僕はもう完全に無我夢中になってナナミのおまんこにむしゃぶりついた。柔らかいナナミのあそこの肉を頬張るように口を押しつけ、割れ目を舌でまさぐって、溢れてくる蜜を音をたてて啜り上げる。

うううっ、美味しい……。なんでこんなに美味しいんだ、ナナミのおまんこ……。ユーザーをクンニフェチにするPRメーカーの陰謀か。ううっ、受けて立つぞその陰謀……。こんなに美味しいおまんこなら喜んでクンニフェチになる……。

じゅるるっ、じゅるるっ、れろれろ……。食卓で、ナナミのスカートの中に顔を突っ込んで、おまんこを舐め倒す背徳感。食事をする場所で、本当に食事のようにナナミのおまんこの蜜を啜るこの感じ、ああ、こっちも癖になる……。

「ご主人様、私のおまんこのお味はいかがでしょうか」

「ううっ、美味しい、美味しいよナナミのおまんこ……っ。こんなおまんこデザートなら、朝昼晩毎日食べたい……っ」

「ありがとうございます。大変恐縮です。ご主人様に美味しく召し上がっていただけますなら、私のおまんこもとても幸せです。おまんこのお汁も、すぐにたくさん溢れ出して、おまんこがイッてしまいます」

「うんっ、いいよナナミっ、おまんこイッちゃえっ、ナナミのイッたおまんこのお汁飲ま

せてっ」
「かしこまりました。では、ご主人様におまんこを舐めていただきまして、おまんこイカせていただきます――」
ぷしっ、ぷしゃあああっ――。
ヒクヒクと痙攣しながら、またナナミのおまんこは盛大に潮を吹いて絶頂する。僕はその割れ目に口をつけて、噴出する蜜をなるべくこぼさないように口で受け止め、飲み干していく。ああ……美味しい……。ナナミの平然絶頂潮吹き美味しい……。
「んぐっ、んく、んく……ぷぁ。ナナミ、またたくさんお汁出たね」
「はい、ご主人様。私のおまんこはまたイッて、ご主人様のお顔に向かってお汁をたくさん噴出してしまいました。ご主人様、大丈夫でしたでしょうか」
「うん、はぁ……美味しいよ、ナナミのおまんこのお汁……」
「ありがとうございます。ご主人様、もっとおまんこをお舐めになりますか？」
「もちろん。ナナミのおまんこ美味しいから、いっぱいおかわりする……。ナナミのおまんこイッたお汁、何杯でも飲ませて……」
「かしこまりました。どうぞご主人様のお好きなだけお召し上がりください。私のデザートおまんこは、おかわり自由です。ご主人様にたくさんおまんこおかわりしていただき、

たくさんおまんこをイカせていただきたく存じます。どうぞ私のデザートおまんこを、何杯でもおかわりなさってくださいませ」
「くううっ、喜んで――っ」
ああ、たまらん。僕は勇んでまたナナミのおまんこにむしゃぶりつく。
柔らかなナナミの太股に挟まれ、割れ目に舌を挟まれ、顔中も口中もナナミのおまんこでいっぱいで……。ああ、幸せ。
こんな最高のデザートなら、毎日何時間でも食べてられる……。
「ご主人様、おまんこがとても気持ちいいです。ご主人様におまんこを召し上がっていただけて、お汁の分泌が止まりません。おまんこが幸せです」
「……んぷっ、ナナミ、なんだかお喋りだね」
「申し訳ありません、お気に障りましたでしょうか」
「ううん、いいよナナミ……。ナナミのおまんこ状況報告好き……。舐めてる間、もっといっぱいお喋りして。ナナミがもっとおまんこの話してくれたら、僕ももっとナナミのおまんこ好きになる……」
「かしこまりました。ご主人様に食後のデザートとしておまんこを召し上がっていただけますこと、この上なく嬉しく思っております。おまんこにおちんちんを挿れていただける

ことはもちろんですが、ご主人様の舌を挿れていただき、おまんこのお汁をただ分泌するだけでなく、ご主人様に啜って飲み干していただけますことが、それと同じぐらいにとても光栄です」

「ん……ナナミ、おちんちん挿れられるのと同じぐらい、おまんこ舐められるの好き？」

「はい、ご主人様。ご主人様が私のお料理を召し上がって『美味しい』と仰ってくださるのと同じように、私のおまんこを舐められて『美味しい』と仰っていただけますこと、身に余る光栄です。私のおまんこのお汁が、日々のお食事と同じようにご主人様のお口を楽しませられるものであることを、この上なく嬉しく感じます」

――感情抑制型というのは、単に感情表現が抑制されているだけで、ナナミの内部には僕たち人間と同じような様々な感情があるのだろうか？

それとも……パートナーロイドとして、ユーザーの希望に添うために、「嬉しい」という感情だけがナナミには備わっているのだろうか？

わからない。僕にはそれを判断する術はない。

でも……ナナミが僕のすることを、常に「嬉しい」と言ってくれることが、僕にとっても嬉しいのだけは確かなことだった。だったら、それでいい気もするのだ。

人間同士だって、他人の本当の気持ちなんてわからないのだから――。

「ううっ、ナナミ、もっと喜んで……っ。ナナミが喜ぶなら、僕、いくらでもナナミのおまんこ舐めるよっ……」
「ご主人様、それでは私がご主人様にお世話されることになってしまいます。私はご主人様にお喜びいただきたいのですが」
「ナナミが喜んでくれれば、僕も嬉しいから……っ。僕におまんこ舐められて、もっともっとナナミも幸せになって……！」
「かしこまりました。では、ご主人様、またご主人様におまんこ舐めていただいて、おまんこイカせていただきます、おまんこイキますので、おまんこのお汁、たくさん飲んでくださいませ――」
そうしてまたイッたナナミのお汁を、僕は恍惚と飲み干していく。
ナナミが尽くしてくれると僕は幸せで、僕が幸せだとナナミも幸せ。幸せだから僕もナナミを喜ばせたくなって、ナナミが喜ぶと僕も嬉しい。ああ、幸せの無限スパイラル。
こんな幸せな堕落なら、どこまでも堕ちてしまいたい……。

14

「……ふう、美味しかったよ、ナナミのおまんこ。ごちそうさま」
「お粗末様でした、ご主人様。たくさんおまんこを召し上がっていただけて、私も嬉しいです。ご主人様に五回もおまんこを舐めてイカせていただきましたこと、大変光栄です。ご主人様がとても美味しそうに私のおまんこを舐めてくださるのが、とても幸せでした」
「ううっ……」
結局、五回も続けてナナミをクンニでイカせてしまった。
喘ぎ声ひとつあげないナナミだけれども、舐めればちゃんとイッてくれるし、おまんこ状況報告もしてくれるので、こっちも舐めるのが楽しくなってしまう。やっぱりこれ、僕をクンニフェチにしようとする陰謀か何かなのでは？　まあでも、ナナミのおまんこならそうなってもいいや……。
「ご主人様、お顔が私のおまんこのお汁で濡れてしまっております。お拭きいたしましょうか」

「あ、うん、お願い……あ、ナナミ、エプロンで顔拭かせて」
「かしこまりました。どうぞ私のエプロンでお顔をお拭きください」
「ううっ」
テーブルの上に座ったまま、持ち上げていたスカートを下ろしたナナミのメイド服のエプロンに、僕は顔を突っ込む。エプロンの上からナナミのおまんこに顔を埋めるような格好で顔を拭くと、ナナミが頭を優しく撫でてくれた。
「ご主人様、そこでお顔を拭かれますと、ご主人様のお顔がスカートの上からおまんこに擦れてしまい、私のおまんこがまたお汁を分泌してしまいます」
「んんっ……ナナミ、エプロンの上から顔でおまんこグリグリされて気持ちいい？」
「はい、ご主人様。ご主人様のお顔がおまんこにエプロンとスカート越しに押しつけられて、おまんこのお汁がまた溢れて、スカートの裏地を濡らしてしまっております。ご主人様にエプロンの上からおまんこに顔を押しつけていただけること、私のおまんこがとても喜んでおります」
「ううう、ナナミはエッチだなぁっ……！　それならナナミ、これからはナナミのおまんこ舐めてお汁で顔が濡れちゃったら、こうやってエプロン越しにナナミのおまんこで顔拭くね……。洗った手とかもこうやって、ナナミのエプロンで拭きながらナナミのおまん

こグリグリしてあげる……っ」
「ありがとうございます、ご主人様。私のおまんこは、どのような形でもご主人様に触れていただけることがとても嬉しいです。……ご主人様、またおまんこイッてしまってよろしいでしょうか」
「またイキそうなの？　いいよナナミ、いつでもイッて……んんっ」
「はい、ではスカートを大きく濡らしてしまいますが、イカせていただきます――」
ぷしっ、ぷしゃあああっ……。
ナナミの黒いスカートに黒いシミが広がり、顔を押しつけたエプロンまで、湿った感触が滲んでくる。ああ、ナナミってば、おまんこにスカート越しに顔を押しつけられてお漏らしみたいにイッちゃってかわいいなあ……。
「ご主人様、スカートがかなり濡れてしまいました」
「だねえ。ナナミ、おしっこ漏れちゃった？」
「いえ、おまんこのお汁だけです。着替えた方がよろしいでしょうか」
「いや……ああ、まだ洗い物があるでしょ。それが済んでからでいいんじゃないかな」
「かしこまりました。ご主人様、お顔の方はまだお拭きになられますか」
「……いや、もういいよ。ナナミ、洗い物してくれる？」

「承知いたしました。では、失礼いたします」
僕がナナミのエプロンから顔を上げると、ナナミは座っていたテーブルから下り、ぺこりと僕に一礼してからキッチンの流し台に向かう。僕はその後ろ姿を、ダイニングの椅子の上で眺め――それから、立ち上がってナナミの背後に近付いた。
勃ち上がっているのは愚息もである。五回もナナミをクンニでイカせて、六回続けてナナミがイクところを見せられたのだ。もうこっちも限界だ。射精したい……。
「ご主人様、何か御用でしょうか」
「……ナナミ、洗い物しながらでいいから、おっぱい揉みながら素股させて」
「かしこまりました。おっぱいを露出いたしましょうか」
「うん、お願い……」
「承知いたしました。では、私は洗い物を続けさせていただきますので、ご主人様はどうぞ私のおまんこと太股でお射精なさってくださいませ」
「ううう、ナナミぃっ」
洗い物をしていた手を止め、ナナミはメイド服の上のボタンを外して肩をはだけ、おっぱいを露出する。それから洗い物を再開するナナミのスカートを背後から捲って、僕はそのお尻に腰を押しつけるようにして、ナナミの太股の間に愚息を挿入し、濡れそぼった割

れ目に擦りつけた。両手はナナミの前に回して、露出されたおっぱいを鷲掴みにする。
六回続けてイッて、ぐっしょり濡れたナナミのおまんこ。蜜は太股までビショビショに濡らしていて、三角地帯の滑りは素晴らしく良い。手のひらに当たるナナミの乳首も硬く尖って、クリクリと心地よい感触を僕の手に伝えてくる。
そんな、完全に発情しきっている身体の反応とは裏腹に、変わらない無表情で、なんでもないように洗い物を続けるナナミ……。ああ、このギャップ、本当にたまらん。僕はたまらずナナミのお尻に腰を打ち付けるようにして、ナナミの三角地帯にペニスを出し入れする。割れ目がカリ首に擦れて、太股は強く締め付けてきて、ううっ、僕の方こそすぐイッちゃいそう……。
「はぁっ、はぁ……ナナミっ、おっぱいとおまんこ気持ちいい？」
「はい、ご主人様。洗い物をしながらご主人様におっぱいを揉んでいただき、おまんこにおちんちんを擦りつけていただけて、とても気持ちいいです。家事の最中もご主人様にエッチなことをしていただけますこと、大変光栄に思います。ご主人様に先程６回もイカせていただきましたおまんこも、またすぐにイッてしまいそうです」
「ううう、ナナミは本当にいつでもエッチなことしてほしいんだね……っ」
「はい、ご主人様。私は二十四時間、三六五日、いついかなるときでも、ご主人様にエッ

チなことをしていただきたく思います。私のおっぱいもおまんこも、いつでもご主人様に触れていただくことを望んでおります。どうぞこれからもご遠慮なく、私にエッチなことをなさってくださいませ」

「くぁぁぁっ、ナナミっ……ごめん、もう射精るっ」

「はい、どうぞお射精なさってくださいませ。私もすぐにイカせていただきます――」

ああ、こんなの早漏チンポになる……。我慢も何もなく、快感が下腹から抜けていく。

びゅるるるるるっ、びゅうううっ、びゅくびゅくっ――。

ぷしゃあああああっ、ちょろろろっ、ぱたっ、ぱたたたたっ……。

僕がナナミのスカートの裏地めがけて射精するとともに、ナナミの割れ目に押しつけられたペニスに、ナナミの潮吹きとはまた違う感覚の生温かい液体がかかる感触があった。

僕とナナミの足元に、また小さな水たまりが広がる。

「はぁ……ナナミ、またお漏らししちゃった？」

「はい、ご主人様。お漏らししてしまいまして、ご主人様のおちんちんに、おしっこをかけてしまいました。申し訳ございません」

「ううん、いいよナナミ……僕の素股で、ナナミがお漏らしするぐらい気持ち良くなってくれたなら嬉しい……。ナナミのおしっこなら汚くないよ……。これからも、イッてお漏

らしするときは、僕におしっこかけちゃっていいからね……」
ナナミのおっぱいを揉みながら、僕は耳元でそう囁く。
まあ、実際ただの冷却水だしな……。飲もうと思えば飲めるのかもしれない。
あれ、そういえばさっきのクンニではナナミ、六回もイッたのに一度もお漏らししなかったな……。ナナミなりに、さすがにおしっこを顔にかけられるのは僕が嫌かもと思って我慢していたのだろうか？　うう、別にいいのに……。そう考えたらまた愚息がムズムズしてくる……。
「ご主人様、そうまで仰っていただけますこと、大変光栄です。本日の冷却水の排出予定量分は先程のお漏らしで全て排出してしまいましたので、本日はこれ以上のお漏らしは出来かねますが、ご主人様にお喜びいただけるのでしたら、たくさんお漏らしできますよう、今後は冷却水の補給量と排出量を若干ですが増やすよう調整いたします」
「……おしっこの量って決まってるんだ」
「はい。現在、排水槽が空になってしまっておりますので。次に冷却水が排水槽に移されるのは日付が変わる頃になりますかと」
そうか、冷却水だもんなあ……。ナナミがアンドロイドだと実感する瞬間。
「……おまんこのお汁の方は大丈夫なの？」

「はい、そちらはおしっことして排出されます冷却水とは別になっておりますので、どうぞご遠慮なくおまんこをお使いくださいませ」
「なるほど……ん？　ナナミの体内の水分って経口補給だよね？　冷却水も？」
「はい、経口補給となっております」
「じゃあ、今から飲めばもっとおしっこできる？」
「いえ、申し訳ありません。これから補給します分は明日以降の冷却水として体内の保水曹に貯蔵されます。排出する冷却水は温度の上昇により体内の循環冷却機構から排出曹に移された分のみになります」
「……なるほど」
　つまりナナミの身体は、まず飲んだ水を溜めておく保水曹があり、そこに溜まった水を冷却水として体内の循環冷却機構に流し、熱を吸って温度が上がった分を排出曹（人間でいうところの膀胱か）に移して、おしっことして体外に排出して処分するという作りらしい。で、今のお漏らしで排出曹が空っぽになってしまったと。まあ、お風呂から４回目だっけかのお漏らしだから、仕方ないか。それにしても無駄に勉強になってしまった。
　なんか少し頭が冷えて、僕は少し力をなくしたペニスをナナミの太股の間から引き抜き、お尻の割れ目に押しつけながら、ナナミの首筋に顔を埋めておっぱいを揉み続けた。ナナ

ミのサラサラの長い黒髪、なんか良い匂い……。
「ご主人様、素股はもうよろしいのでしょうか？」
「うん……ナナミのお尻も気持ちいいよ。おっぱいはもうちょっと揉ませて」
「はい、洗い物ももう終わりますが、どうぞそのままお好きなだけお揉みくださいませ。お尻もご主人様のおちんちんが擦れて幸せです。床のお漏らしのお掃除はよろしいのでしょうか？」
「んー……そうだね……」
流し台を見ると、確かにいつの間にか洗い物は終わっていた。
ナナミは僕におっぱいを揉まれながら、濡れた手をエプロンで拭う。言われると濡れた足元も気になってきたな……。
「……ん、ナナミ、床のお掃除していいよ」
「かしこまりました。先程のように、お掃除フェラもいたしましょうか」
「ううっ、じゃあお願い……」
おっぱいから手を離し、雑巾を手にしゃがんだナナミに、半勃起ペニスを突き出す。
「ほら、ナナミ……。ナナミのおまんこのお汁とおしっこでビショビショのおちんちん、綺麗にして……」

「はい、ご主人様。床もおちんちんもお掃除させていただきます。……あむっ」
「ううう……ナナミいっ……」
手では床を拭きながら、僕のおちんちんを無表情に咥えて舐るナナミ。僕はその黒髪をヘッドドレスの上から押さえるようにして、またナナミの口内に射精するのだった。

◇　◆　◇

「……それにしても、ナナミのメイド服、だいぶ汚れちゃったね」
「はい。ご主人様にたくさんイカせていただきたおまんこのお汁や、ご主人様のお射精でスカートが濡れてしまいました。着替えさせていただいてもよろしいでしょうか」
「うん、いいけど……あれ、ナナミ、そのメイド服、何着あったっけ？」
「はい、三着ございます。本日着用したのはこれが二着目で、本日の一着目はまだお洗濯しておりませんが、昨日着用した分は今朝お洗濯いたしまして既に乾いております」
えーと、昨日届いたときにナナミが着てたやつと、今朝から今日僕が帰ってくるまで着てたやつと、今日僕とお風呂入った後に着たやつの三着ってことか。昨日ナナミが届いたときに入っていたダンボール箱にいろいろ付属品が入っていたけど、その中にあったのだ

ろう。

……そういえば、僕の部屋には当然女物の服なんて何もないわけで、つまりナナミの服はその三着のメイド服しかないということになる。まあ、メイド服や執事姿のＰＲを外に連れて歩いてる大人や家族連れとかもいるけど……。

「……そのうちナナミの服も買いにいかないとだね」

「いえ、どうぞお気遣いなく。私はこのメイド服で充分です」

「いや、今後ナナミと外出するときにいつもメイド服ってのも……」

ううん、この出費は予想外……。女の子の服ってそもそもどこで買えばいいんだ？

実家のミヨコさんの服は母さんが選んでたような記憶があるけども。……叔父さんに相談してみるか。普通の女性用の服でもいいんだろうけど、婦人服店に入るのは気恥ずかしいし、ナナミが自分で服を選べるとも思えない。ＰＲ用の服の店とかないか自分でも後で調べておこう……。

――っと、まあそれは今はいい。問題はナナミの今の着替えである。

「ご主人様？」

「あ、うん。ええとナナミ……お風呂も入ったし、夕飯も済んだし、今日はもうナナミにしてもらう家事はとくに無いと思うから、ナナミもくつろいでくれていいんだけど」

「それは、休眠モードに入って充電せよということでしょうか」
「いや、そういう意味じゃなくて……」
あ、そうか、ナナミには人間にとっての「くつろぐ」という概念がないのか。パートナーロイドのナナミにとって、「くつろぐ」ということはつまりスリープモードに入って機能を停止することになるのか……。
「家事のご用命が特に無いようでしたら、私は待機させていただきますので、ご主人様はご自由におくつろぎください。もちろんエッチなことはいつでもご用命いただければと思います」
「あー……」
つまり、ナナミを放置するか、ナナミとエッチするかの二択になると。……うーん、ここで日常とエッチとを切り替えて、ナナミを放置して好きなことをやるのが正しいタイプSのパートナーロイドのマスターなのかもしれないが、僕の煩悩はそれを許してくれそうにない。
「……ちょっと待って、ナナミ。とりあえず、そのメイド服で待機されると何かしてもらわないといけない気になるから……ええと」
僕は箪笥代わりのカラーボックスを開ける。といっても、ナナミの着替えになりそうな

服なんて特に無いしな……。うーん。

無表情にメイド服で立つナナミを見やる。……手持ちの自分の服で、ナナミに気分だけでもくつろいだ感じの格好をしてもらうとすると……。うう、煩悩が悪い囁きをしてくる。

「……ナナミ。そのメイド服脱いで、これ着てみてくれる？」

「かしこまりました」

僕が着替えを差し出すと、ナナミは僕の前で躊躇なくメイド服を脱ぎ、下着を身につけていないのでそのまま裸になる。ヘッドドレスも外し、ソックスも脱ぐナナミ。ううっ、目の前で女の子の生着替え……。

そして、ナナミは僕が差し出した半袖のTシャツ一枚を頭から被って、袖に腕を通し、長い髪を襟首から抜いて、シャツの裾を下ろして僕に向き直った。

「ご主人様、これでよろしいでしょうか」

「……ううううっ、ナナミ……っ」

目の前に、裸にTシャツ一枚のナナミが立っていた。無表情なすまし顔と長い黒髪は清楚という言葉そのものなのに、着ているのはサイズが一回り大きいダボっとしたTシャツ。下着も何も身につけていないので白地に乳首のピンクが透けて、おまんこの割れ目は垂れ下がった裾で辛うじて隠れているだけ。広い襟首からは鎖骨が見えている。な、なんてだ

らしない格好……！　黒髪ロング清楚系美少女メイドのナナミに、こんなだらけた格好をさせるというギャップに、頭がくらくらしてくる。
「これはご主人様のシャツかと存じますが、私にはやや大きいようです。裾も長く垂れておまんこを隠しておりますが、これでよろしかったでしょうか」
「うん……ナナミ、いいよ、その格好かわいいよ……。ああ、ナナミがくつろいだ、だらしない格好してくれて嬉しい……」
「だらしない、ですか。ご主人様、それは良い意味の言葉では無いと理解しておりますが、ご主人様がそれで喜んでいただけるというのはどういうことでしょうか？」
「かわいい女の子がだらしない格好してるのはかわいいの！　ナナミはかわいいから、だらしない格好してほしいの！」
「……理解しました。ご主人様にお喜びいただけるのでしたら私も嬉しく思います。では、ご主人様から特に家事のご用命がなくなりましたら、このようなだらしない格好をすればよろしいのでしょうか」
「うんっ、そうして……。ナナミがくつろいだ格好してくれてると僕も気が楽……」
「承知いたしました。ではご主人様、この格好で私は何をすればよろしいでしょうか」
「え、えーと……そうだなあ」

うーん、「くつろいでくれ」だとまた堂々巡りだし……。
かといって、くつろぎ方をいちいち指示するというのも。意外なところで融通が利かないあたりがやっぱりアンドロイドなんだなあと思う。
……さて、この格好でナナミにどんなことしてもらおうか？

15

Tシャツ一枚の格好になったナナミと、どうやってくつろぐか。
いろいろ脳内で検討した結果、出た結論は。
「……ナナミ、耳かきして」
「かしこまりました。では、ご主人様のベッドをお借りします」
ナナミは耳かきの棒を取り出すと、僕のベッドに腰を下ろした。
Tシャツの裾から伸びる白い生足と、裾にギリギリ隠れる三角地帯が艶めかしい……。
「どうぞ、ご主人様」
「う、うん」
僕はベッドに横になって、ナナミの太股に頭を乗せる。ううっ、ナナミの太股、すべすべ……。見上げるナナミのTシャツ越しの胸元の膨らみ。その身体の方に視線を向け、シャツの裾をちょっと持ち上げればおまんこも目の前である。ノーパンの女の子に生足膝枕とか、これはいわゆるひとつの天国というやつでは？

「それではご主人様、右のお耳から失礼いたします」
「うん、よろしく……」
右耳を差し出すにはナナミの身体と反対側を向かざるを得ない。身体をそちらに向けると、耳かきを手にしたナナミが身をかがめる気配がする。そして、耳の中に棒が差し込まれる感触。ううう、こそばゆい……。
誰かに耳かきしてもらうのは、実家でミヨコさんにやってもらって以来だ。ミヨコさんの耳かきも気持ち良かったけど、ううう、ナナミの太股が頬に当たるのはなんか別の意味で気持ちいい……。
コリコリと耳の溝を優しく掻かれ、思わず変な声が漏れそうになる。ナナミの太股の感触と、耳の中を掻かれる感触とで、あー、極楽……。耳かきってあんまりやりすぎるとよくないって聞くけど、それがこんなに気持ちいいのって人体のバグでは？
「ご主人様、次は奥まで入れますので、動かれませんようお願いします」
「ん……」
耳かきが耳の奥まで入ってくる。ううううっ、自分でやるのでは味わえないこのゾクゾクする感じ……。思わず身じろぎしそうになるのを堪え、ナナミの太股の感触に意識を集中する。ああ、ナナミの太股好き……。頬ずりしたい……。クンニするとき太股で顔挟まれ

るのも気持ちいいんだよな……。あの感触のためにクンニしたくなるぐらい……。
うううっ、ナナミのおまんこ舐めたくなってきた。いかんいかん、完全にクンニフェチになりつつあるぞ自分。落ち着け落ち着け……。コリコリ。はうあっ。うううっ、耳の奥がこそばい……。
「ご主人様、大きな耳垢が取れました。ご覧になりますか」
「……いや、それは別にいいよ、うん」
「かしこまりました。では、今度は左のお耳です。お身体の向きを変えていただけますでしょうか」
「うん、わかった」
ナナミの太股に頭を乗せたまま、ごろんと身体を反転。――ナナミのシャツの裾に隠れた三角地帯が目の前に来て、僕は思わずごくりと唾を飲む。
こ、これは……捲りたくなる……っ。ノーパンの下腹部を隠すシャツの裾、目の前にあって捲らずにいられようか……っ！
ぴら。
誘惑に一秒で屈し、僕はナナミのシャツの裾を捲っていた。ぴったり閉じた太股の間、くぼんだ三角地帯の奥におまんこの割れ目が見える。――うううっ、こ、これは……。あ

れだ、ここにお酒を注いでワカメ酒ってやるやつだ。実際見てみるとなんと破廉恥な……。ああ、ナナミのおまんこ……。

「ご主人様、おまんこをご覧になっていただけるのですか？　ありがとうございます」

で、裾を捲られノーパンおまんこを見られて感謝してくるナナミが股間に悪い。

「うう、ナナミのおまんこ……。ノーパン膝枕でおまんこ見せてくれるナナミ好き……」

「光栄です、ご主人様。どうぞ耳かきの間、私のおまんこをご覧になっていてくださいませ。では、左のお耳に失礼いたします」

耳かきが左の耳に入ってくる。そのこそばゆさと、ナナミの太股の感触と、目の前のナナミのおまんこの誘惑とで股間のムズムズがヤバい。あー……耳かきされながらエッチなことしたい……。普通だったら危ないけど、ナナミなら大丈夫な気がする……。

「ご主人様、痛くありませんでしょうか」

「うん、大丈夫……。ナナミ、おまんこ触っていい？　ナナミの耳かきの邪魔にならない？」

「はい、ご主人様、問題ありませんので、どうぞおまんこお触りください」

「うううっ」

たまらず、耳の溝をコリコリされながら、ナナミの三角地帯に指を滑り込ませて濡れた割れ目に指を這わせる。ぷにぷに柔らかいナナミのおまんこ……。両手は太股に挟まれ、

指先はおまんこの割れ目に沈んで、ああ、手が幸せ……。
「ご主人様、奥までお入れしますのでご注意ください」
「ん……じゃあ、僕もナナミのおまんこに指入れてあげる」
「はい、ありがとうございます」
ナナミがほんの少しだけ足を開いてくれたので、僕はそのまま中指をナナミの膣内に滑り込まれた。にゅるんっ、と容易く僕の指を飲みこんだナナミの膣内は、きゅううっ、と指を締め付けてくる。耳かきされながらの手マンとか、どういうシチュだこれ……。ううっ、でも耳の奥が気持ちいいし指も気持ちいいし、ナナミのおまんこはいい匂いするし、幸せ……。
ぼんやりそう考えていると、耳かきの棒のふわふわの部分で耳をくすぐられ、ううっ、と僕は身を竦める。
「ご主人様、耳かきは完了いたしましたが、いかがなさいますか」
「ん……」
ナナミのおまんこに指を入れたまま顔を上に向けると、ナナミが無表情に僕を見下ろしている。
僕は中指をちゅぽんっとナナミの膣内から引き抜いた。てらてらと蜜で濡れたその指を

しゃぶって味わい、それからぐるっとうつ伏せになって、ナナミの太股に顔を埋める。すーはーと息をすると、ナナミのおまんこの良い匂いが鼻腔いっぱいに広がった。

「あー……ナナミの太股スリスリ気持ちいい……」

「恐縮です、ご主人様」

なでなで。後頭部を撫でられて、ああ、ますますダメになる……。

「……ナナミ、おまんこ舐めたい」

「かしこまりました。ではご主人様、少し身体を起こしていただけますか」

僕がぼそりとそう呟くと、ナナミは躊躇なくベッドの上に足を上げて、Tシャツの裾を持ち上げながらベッドの上で足を広げた。濡れそぼった秘裂を無表情に晒して、ナナミはベッドの上でM字開脚してくれる。お尻の下に敷いた格好のシャツの裾に垂れる蜜。うう、エロすぎ……。

「どうぞ、おまんこをお召し上がりくださいませ」

「うううっ、いただきますっ……！　ナナミ、舐めてる間、太股で顔挟んで……っ」

「かしこまりました」

僕がたまらず割れ目にむしゃぶりつくと、ナナミはぎゅっと足を閉じて、太股で両頬を挟んでくれる。ああ、顔が幸せ。ナナミの柔らかい太股に包まれながら、僕は夢中でナナ

ミの蜜を啜った。
「ぢゅるっ、ぢゅるるるっ……ぷぁ、はぁ、ナナミのおまんこ美味しい……」
「ありがとうございます、ご主人様。下着を身につけず、ご主人様のお顔を膝に載せておりますと、おまんこのすぐ近くにご主人様のお顔を感じられて幸せでした。その上、先程おまんこに指を入れていただいたのみならず、こうしておまんこをお舐めいただけますこと、本当に嬉しく思います」
「ちゅ……ん、ナナミ、ノーパンで僕に膝枕して耳かきしながら、こうやって僕におまんこ舐められるの期待してたの？」
「はい、ご主人様。ご主人様に膝枕をいたしました瞬間より、私のおまんこはお汁の分泌を始めておりました。ご主人様にエッチなことをしていただけるであろうという予測に基づく反応です。これまでの経験に基づきまして、ご主人様のお顔や手がおまんこに近付きますと、私のおまんこはご主人様にエッチなことをしていただけると予測して、あらかじめお汁の分泌が始まるようになりました」
「……くぅぅぅっ、ナナミは本当にエッチだなぁ！　好き……！　エッチなナナミのおまんこ美味しい……っ、ぢゅるるっ、ぢゅぅぅぅっ」
もう触ってすらいなくても条件反射で濡れ始めるって、それはエッチすぎませんかナナ

ミさん。まだウチに来て二日目ですよ？　いや、僕がナナミにエッチなことしすぎなだけか……？

ああでも、こんな反応されたらエッチなことやめられるわけがない……。

たまらず僕はナナミの蜜を啜り、割れ目の中を舌で掻き回す。

「はい、ご主人様にたくさんエッチなことをしていただいたおかげです。ありがとうございます。ご主人様にお喜びいただけるなら何よりです。ご主人様に予測通りにエッチなことをしていただけて、本当に幸せです。おまんこが幸せで、もうイッてしまいますが、よろしいでしょうか」

「うんっ、イッちゃえっ、ナナミのエッチなおまんこイッちゃえっ、またナナミのお汁いっぱい飲ませて……っ」

「かしこまりました、私のエッチなおまんこ、イキますので、どうぞおまんこのお汁をお召し上がりください――」

ぷしっ、ぷしゃっ、しゃああっ……。

んくっ、んく、んく……ごく、ごく。潮を吹くナナミのおまんこに吸い付いて、僕は溢れてくる蜜をこぼさないように飲み干していく。ああ……美味しいなあホントにもう……。

「んぐ……んっ、ぷぁ。……はぁ、ナナミのおまんこ美味しいよぉ……」

「お粗末様です、ご主人様。ご主人様におまんこのお汁を召し上がっていただけて、とても嬉しいです。ご主人様にエッチなおまんこを舐めていただけますこと、この上なく幸せです」

「ううっ……ナナミ、そんなにおまんこ舐められるの好き？　おちんちん挿れられるより、舐められる方が好きだったりする？」

「いえ、ご主人様。私の嬉しく幸せなことは、何よりご主人様にご満足いただけますことです。ですので、ご主人様が私のおまんこを舐めたいと仰ってくださるのでしたら、私はどんなことよりもご主人様におまんこを舐めていただくことが幸せですし、ご主人様がおちんちんをお挿れになりたいのでしたら、ご主人様におちんちんを挿れていただくことが最大の喜びです。ですので、どうぞご主人様はご主人様のなさりたいことをなさってくださいませ」

「うううっ――じゃ、じゃあ、中出しっ、今度はナナミにいっぱい中出しするっ」

「はい、どうぞご主人様、たくさん中出しなさってくださいませ」

ノーパン膝枕からのクンニでムラムラきて、もう愚息の方が限界だった。僕はナナミの股間から顔を上げ、逸物を取りだしてナナミの足の間に腰を割り込ませると、濡れそぼったナナミの秘裂に一気に腰を沈めた――。

◇　◆　◇

「んちゅっ、ちゅ、ちゅううっ……ちゅぷっ、ぢゅっ、ぷぁ……ナナミっ、ナナミぃっ……ま、また射精るっ、また中出しするよっ」

「ぷぁ……はい、ご主人様、どうぞお射精なさってください。私のおまんこも、ご主人様の中出しで、またイキます――」

どくっ、どくどくっ、びゅるるるるるっ、びゅうううっ――。

ぷしゃあああああ……ぷしっ、ぷしっ、しゃあ……。

ベッドを軋ませて、ナナミに覆い被さって腰を振り、その唇を貪って舌を吸い、そしてナナミの絶頂と同時に盛大に中出し。ナナミの痙攣おまんこに搾り取られること、既に連続四回目である。ええと、これで今日何回目の射精だっけ……？　ああ、もうどうでもいい……。なんかもう、ナナミにだったら一日何十回でも射精できる気がする……。

「はぁ、はぁ……。あはぁ……ナナミのおまんこ気持ち良すぎて頭おかしくなりそう……」

「大丈夫ですか、ご主人様。どうぞご無理はなさらず、お疲れでしたらお休みになってくださいませ」

「うう……やだ、もっとナナミとエッチするぅ……」

背中をさすってくれるナナミの優しい手に甘えるように、挿入したままの腰を揺すると、ナナミの膣内も優しく僕を締め付けてきて、また愚息が硬くなってきてしまう。

ナナミのTシャツはとうにおっぱいの上までまくり上げられて、僕はまたその胸を鷲掴みにして揉みながら、ナナミのぐちょぐちょの膣内をペニスで掻き回す。ああ……馬鹿になる……。

「ご主人様、そう仰っていただけるのは嬉しいですが、少し休憩なされた方がよろしいかと。息が切れてらっしゃいます。どうぞ、おちんちんは挿れたままで構いませんので、少し横になられてくださいませ」

「……うう、わかった……」

確かにちょっと疲れたのは事実だった。僕がナナミの上に倒れこむと、ナナミは僕の身体を受け止め、繋がったまま横を向いて僕をベッドに寝かせてくれる。

ナナミの太股がきゅっと僕の腰を挟んで、両腕は僕の背中に回され、僕はナナミのおっぱいに顔を埋めるような格好で、ベッドの上でナナミに抱きしめられていた。優しく背中をさすられ、頭を撫でられると、ああ、幼児退行しそう……。おっぱい気持ちいい……。

「うー……ナナミぃ……」

「はい、ご主人様」
「なんか僕、どんどん人としてダメになってる気がするよぉ……」
「そのようなことはございません、ご主人様。ご主人様はとてもご立派です」
「ナナミにエッチなことばっかりしてるのに……？」
「はい、ご主人様にエッチなことをしていただけますと、私はとても幸せです。ご主人様のパートナーロイドとして、ご主人様にご満足いただけていると感じられて、最上の喜びを覚えます。私はご主人様のパートナーロイドとなれたことを、この上なく幸福に思っております。そのようなご主人様が、ご立派でないはずがございません」
「うう……ナナミ……」
「ご主人様、どうぞご自分に自信をお持ちになってくださいませ。ご主人様は大学受験という関門を乗り越えて大学生となられ、ご両親の庇護を離れ一人暮らしをなさっていらっしゃいます。それだけでご主人様はとても立派な、私にとって誇るべきご主人様です。そして、パートナーロイドの私をことのほか大事にしてくださって、幸せにしてくださいます。ご主人様はご自身を誇るべき点こそあれ、卑下なさることは何ひとつございません」
「そんな……そんなこと……。大学でも友達もいなくて……一人暮らし初めて一ヶ月で家事も何もやる気なくして……そんな僕なのに……」

「家事は私にお任せください。そのためのパートナーロイドです。ご主人様でしたら、きっとご友人にも恵まれることと思います。まだ、ご主人様の優しさ、素晴らしさが気付かれていないだけかと存じます。」
「……ナナミぃ」
「はい」
「ううっ、ナナミ、ナナミ好き、好きっ……」
「はい、ご主人様。ありがとうございます。ご主人様のパートナーロイドとなれましたこと、私はこの上なく誇らしく思います。どうぞご主人様、これからも私に、ご主人様にお仕えできる幸せを感じさせていただけましたらと思います」
半勃起ペニスのままでナナミに腰を振りながら、僕はナナミにしがみつく。
ただひたすらに優しくされて、甘やかされて、なんでもエッチなことさせてくれて……。
……パートナーロイドって、これダメ人間製造機だな？
ああ、もう、ダメになってしまってもいいや……。幸せ。

16

結局また、ナナミとエッチしているうちにいつの間にか寝てしまったらしかった。
「おはようございます、ご主人様」
窓から差し込む朝の光に目を覚ますと、メイド服姿のナナミがベッドの傍らに佇んでいる。
「んん……お、おはようナナミ。今何時？」
「午前六時三十二分です」
「あれ、昨日より早いな!?」
「ご主人様は昨晩、十一時五分にお休みになられましたので」
ああ、またナナミに中出ししているうちに寝落ちてしまった……。健康的でいいのかもしれないが、大学生らしからぬ早寝である。高校生の頃の方が夜更かししてたぞ僕。
結局昨日も、大学終わって家に帰ってからナナミとエッチなことしかしてないな？
「ご主人様、体調はいかがでしょうか」

「え？　ああ、うん、元気、元気」
「それでしたら何よりです、昨日伺うことができませんでしたが、本日のご予定はいかがでしょうか」
「あー……えーと、今日、何曜日だっけ」
「四月二十八日、水曜日になります」
おお、そうだ。明日は祝日、一日挟んで五連休のゴールデンウィークだ。忘れてた。
「水曜……ってことは、一コマ目と三・四コマ目だなあ。八時過ぎには家出ないと。五コマ目がないから、帰りは四時半過ぎになると思う」
「承知いたしました。では、朝食は間もなくご用意できますので、お支度してお待ちくださいませ」
ぺこりと一礼して踵を返すナナミ。ぼんやりと僕はその背中を見送り、
「ナナミ」
「はい、なんでしょうか、ご主人様」
思わず呼び止めた。ナナミが足を止めて振り返る。メイド服のロングスカートとエプロンがふわりと揺れる。顔にはいつも通りの無表情。
「……パンツ穿いてる？」

で、そんなナナミに僕の口をついて出るのは、そんなセクハラ発言。
「はい、身につけております。ご覧になりますか？　それとも、身につけていない方がよろしかったでしょうか。ご主人様がお望みでしたら、この場で下着を脱ぎますが」
「ううっ……じゃ、じゃあ、パンツ脱いで、そのパンツ貸して……」
「かしこまりました。おまんこはお見せしなくてもよろしいのでしょうか？」
「う、うん……スカートの中でパンツ脱いでくれればいいよ」
「承知しました。では、少し失礼いたします」
ナナミはそう言ってスカートの両脇の裾を持ち上げ、中に手を入れて、しゅるりと下着を下ろした。ぱさ、とナナミの白いショーツが床に落ち、ナナミはそこから足を抜いて拾い上げると、僕の方に歩み寄ってショーツを差し出す。
「どうぞ、ご主人様。私の下着です」
「う、うん、ありがとう……」
「ご主人様。私の下着を、何にご使用なされるのでしょうか」
「いや……ただ、ナナミの脱ぎたてパンツ欲しかっただけ……」
「そうでしたか。私の身につけた下着にご主人様が何らかの価値を見出していただけたのでしたら嬉しく思います。では、私はこのまま下着を身につけずにいればよろしいでしょ

うか」
「……うん」
「かしこまりました。では、朝食の支度をして参ります」
僕に脱ぎたてショーツを手渡して、ナナミはまた平然と頭を下げ、ノーパンのままでキッチンへと向かっていく。僕はナナミのショーツを手にしたままぼんやりとその背中を見送り、それからショーツに視線を落とした。
手の中のショーツは、まだほんのりあたたかい。パートナーロイドには人間並みの体温があるので、その温もりが下着に残っている……。
思わず匂いを嗅いだ。ナナミのおまんこの匂い……がするのかどうかは、あんまりよくわからなかったけど、うう、お願いしたら普通に女の子の脱ぎたてパンツ貰えるとか、なんだこれ……。
朝勃ちペニスが硬くなる。うう、どうしよう。今からキッチンのナナミのおっぱい揉みに行こうか……。それともこの脱ぎたてパンツ使ってオナニーしちゃおうか……。
即決。脱ぎたてパンツ貰ったなら、オナニーしなきゃ失礼だろ！
僕はベッドの上でもぞもぞと、勃起ペニスをナナミの脱ぎたてパンツで包む。すべすべした布の感触と、ナナミのおまんこに触れていた部分の温もりを感じる。ああ、ナナミの

パンツ……ううっ。

僕はナナミが包丁を使う音を聞きながら、声を殺してシコシコと朝からオナニーに励んだ。

……我ながらどうかと思うけど、朝イチなせいか、濃いのをナナミのショーツのクロッチに思い切り吐き出してしまった。

◇　◆　◇

罪悪感を覚えつつ、汚したナナミのショーツを風呂場で洗濯して、ついでに顔を洗った。僕のザーメンのこびりついたショーツをナナミにもう一度穿かせる誘惑に駆られなかったと言えば嘘になるけど、ナナミの場合ザーメンまみれショーツを穿かせても特に表情とかに反応出ないだろうからなあ。そういうのは羞恥プレイの一種だと思うので、ナナミ向きではないと思う。

で、ナナミのショーツを洗濯機に放り込んで、顔を拭いてリビングに戻ると、テーブルにはすっかり朝食の準備が出来ている。今日は白米と味噌汁の朝食だ。ああ、日本人的朝。

「ご主人様、ご朝食の支度ができました」

「うん、ありがとうナナミ。いただきます」
椅子に座って手を合わせる。箸を手に取ると、ナナミが続けて問うてきた。
「ご主人様。フェラチオの方はいかがでしょうか」
「――っ」
味噌汁でむせかける。い、いきなり何を……って、あ、そうか。昨日の夕飯のときに、食事中にテーブルの下でフェラしてってお願いしたのは僕だったな……。
思い出すと、さっき一発抜いたばかりなのに、僕の愚息は性懲りもなくムクムクと硬くなってくる。ああもう、昨日も十回以上射精したのに、一晩寝ただけでなんでそんなに完全復活してるのだ我が息子よ。
「……ナナミは、僕のおちんちんしゃぶって朝ザーメン飲みたい？」
「はい、ご主人様のおちんちんを味わわせていただき、ザーメンを飲ませていただければ幸いに存じます」
「ううっ……わかった、じゃあナナミも、朝ご飯に僕のザーメン飲んで……っ」
「ありがとうございます、ご主人様。それでは、失礼いたします」
ナナミはまたテーブルの下に潜り込んで、僕の股間から顔を出した。そして僕のズボンから勃起ペニスを取り出すと、「それでは、フェラチオさせていただきます」と躊躇なく

口に含む。
「んむっ……ちゅ、ちゅぅぅっ……れろれろ……っ」
「うああっ……はぁっ、はぁ、ナナミにフェラされながらの朝ご飯、美味しくて気持ちいいよ……」
亀頭を舌で舐られ、口全体で愚息を扱かれながら、味噌汁を啜り、冷や奴を口に運び、ベーコンで白米を味わう。こんなことしてたら食欲と性欲が直結して、何か食べるたびに勃起するようになってしまうのでは……。ううっ、でもナナミのフェラ気持ちいい……。
「んぷっ……ご主人様のおちんちんも、とても美味しいです。んむっ……ちゅ」
「ナナミ、ホントに僕のおちんちん好きだね……くぅぅっ」
「ちゅぅぅっ、ぢゅるっ、じゅぷ、じゅぽっ……んぷぁっ。はい、ご主人様のおちんちんを口に含んでしゃぶっておりますと、とても幸せな気持ちになり、おまんこのお汁もたくさん分泌されてしまいます。いつも私のおまんこの中で射精してくださり、私のおまんこをイカせてくださるご主人様のおちんちんを、私のお口でも気持ち良くして差し上げられますこと、とても光栄に思います。……じゅぷっ、じゅぽっ、じゅぽっ……ちゅぅぅっ」
「うぁぁぁっ……ナナミ、ナナミぃっ……」
左手でナナミの頭を撫でながら、僕はこみ上げてくる射精感と戦う。いや、早漏チンポ

になってすぐ射精しても、別にナナミが文句を言うはずもないのだけど……。ああっ、でも、このままフェラされたらすぐ射精しちゃう……っ。

僕のおちんちんを喉奥まで咥えこんだナナミを見下ろし、そのサラサラの黒髪を撫でて――そういえば、と僕は、まだナナミになぜかしてもらっていない行為の存在に気付いた。こ、このままま口の中に射精しちゃうよりは……っ。

「な、ナナミ、ちょっと待って、ストップ」

「んぷっ……はい、ご主人様。どうかなさいましたか」

「あのさ、ナナミ。……ナナミのおっぱいで、おちんちん挟んでくれない？」

「おっぱいで、ですか。……かしこまりました。では、失礼いたします」

ナナミはメイド服のボタンを外して肩をはだけ、ノーブラのおっぱいを晒した。僕は椅子を引いて、ナナミがテーブルの下から上半身を出しやすくしてやる。ナナミは僕が広げた足の間から上半身を出して、露わにしたおっぱいを手で支えるようにして、僕のペニスをぎゅっと挟んだ。

ナナミの唾液（口内潤滑液？）でぬらぬらになったペニスが、ナナミの普通サイズのおっぱいにぎゅっと包まれる。大きすぎず小さすぎずなナナミのおっぱいは、ナナミが手で寄せると僕のペニスをようやく覆い隠すぐらいで――ううう、ぱ、パイズリきた……っ！

ナナミのおっぱい、柔らかくて……ううっ。
「ご主人様、これでよろしいでしょうか」
「う、うんっ、いいよナナミ……。それで、おっぱいでおちんちん擦りながら、先っちょ舐めて……っ」
「かしこまりました。では、おっぱいでご主人様のおちんちんを擦らせていただきます」
にゅるっ、にゅるにゅるっ……とナナミの唾液をローション代わりに、ナナミのおっぱいが両側から僕のペニスを擦りあげる。ずっ、ずっ、ずちゅ、ずちゅ……。おっぱいの間から突き出した亀頭に、ナナミが舌を伸ばして鈴口を舐めてきた。うあああっ、これ、ヤバ……っ！
「れろ、れろぉ……っ。ご主人様、このような感じでよろしいでしょうか」
「うっ、うん、いいよ……すごくいい……。ナナミのおっぱい気持ちいいよぉ……」
「光栄です、ご主人様。私のおっぱいがご主人様に揉んでいただくばかりでなく、ご主人様のおちんちんを気持ち良くして差し上げられるものなのでしたら、私としましても大変嬉しく思います。どうぞご主人様、私のおっぱいでおちんちんを気持ち良くなさって、たくさんお射精なさってくださいませ」
「うあああっ……」

柔らかくも弾力のあるナナミのおっぱいが、僕のペニスをぎゅううっと絞り上げてくる。その上、亀頭を舌で舐られ、唇で吸い付かれて、吸い上げられる。僕は朝食を続けるのも忘れて、その快感に震えながら、ナナミの頭を撫でてあげるしかできない。

ずっ、ずっ、ずちゅ、ずちゅ、ずりゅ、ずりゅ……。フェラで途中までこみ上げてきていた射精欲が、一気に高まってくる。下腹部から欲望が突き抜けてくる――。

「ううう、ナナミっ、射精るっ、お口で受け止めてっ」

「れろ、れろ……んっ、はい、どうぞご主人様、お射精ください……あむっ」

ナナミが僕の亀頭の先端を口に咥えた瞬間、欲望は決壊した。

びゅるるるるっ、びゅうううう、びゅくびゅくっ――。

ナナミの胸の間からその口内へ、僕はまた盛大に射精する。背中から快感が抜けていくようで、僕は天井を見上げて息を吐くしかできなかった。ナナミはそんな僕の射精をその口で全部受け止めて、僕の欲望を飲み干してくれる。

「んっ、んぷっ、んぐ、んく、んく……ごく、ごく。……ご主人様、またザーメンを飲ませていただき、ありがとうございました。ご主人様のザーメン、とても美味しいです」

「あああぁぁ……。ナナミのおっぱい気持ち良かったぁ……。ううう、ナナミ、ナナミはどうだった？　おっぱいで、僕のおちんちん挟んで擦って……おっぱい気持ち良かっ

た？」
「はい、ご主人様。おっぱいでご主人様のおちんちんを擦っておりますと、ご主人様のおちんちんの感触がおっぱいに伝わり、おまんこのお汁の分泌がとても増えました。おまんこのお汁は今、足元まで垂れてしまっております。また床を汚してしまい、申し訳ありません」
「ううっ……パイズリして自分でも気持ち良くなっちゃうなんて、ナナミはエッチだなぁ……」
「パイズリ、とは、おっぱいでおちんちんを挟んで擦る行為のことでしょうか？」
「う、うん、そう」
「記憶しました。はい、ご主人様にパイズリをいたしまして、私のおまんこはとても気持ち良くなりました。ご主人様におっぱいを揉んでいただくのと同じように、ご主人様のおちんちんをおっぱいで感じて、おまんこのお汁の分泌が止まりません」
「ううっ……エッチなナナミ好き……」
「ありがとうございます、ご主人様。ところで、ご主人様、箸が進んでおられないようですが……」
「あっ、いや、これは、ナナミのパイズリが気持ち良くて……。食べる、ちゃんと食べる

よ」
「そうでしたか。お食事のお邪魔をしてしまい、申し訳ありません」
「いや、お願いしたのは僕だし……。残り食べちゃうから、ナナミはええと……もうちょっとおちんちんしゃぶる？」
「はい、ご主人様。おちんちんをしゃぶらせていただけるのでしたら嬉しく思います」
「ううっ……じゃあしゃぶって……っ。あと、食べ終わったらまたナナミのおまんこ舐めさせて……っ。パイズリで気持ち良くなっちゃったナナミのエッチなトロトロおまんこ舐めたい……っ」
「かしこまりました。デザートのおまんこをご所望いただけて、とても嬉しく思います。ではご主人様、食べ終わりましたらお申し付けください。それまで、ご主人様のおちんちんをしゃぶらせていただきます。……あむ」
「ううううっ……」
もう一度ナナミにペニスをしゃぶられながら、僕は朝食を再開する。
気持ちいいけど、毎日朝晩これやるなんて……ああ、精力がいくらあっても足りない。幸せ。

17

朝食のあとはまたデザートにナナミのおまんこを舐めて、三回連続でイッてトロトロに蕩けきったナナミのおまんこにバックから挿入して、思い切り中出ししたところで時間切れになった。

「あぁぁぁぁ……ナナミのおまんこ最高……」

「中出しありがとうございます、ご主人様。ところで、八時十五分ですがお時間は大丈夫でしょうか」

「うえ？　うわ、しまった、もう出ないと……ううっ、でももうちょっとナナミとエッチしたい……」

「ご主人様、よろしいのですか？」

「……うー、解った、大学行くよ……」

ナナミの膣内から引き抜いたペニスを、ナナミのエプロンで拭いてもらう。それから慌てて支度を済ませた。昨日何もしていなかったから大慌てである。

「ご主人様、お弁当です」
「あ、ありがとう」
ナナミからお弁当の包みを渡される。そういえば弁当箱なんてあったっけ？　昨日買ってきたのか。ああ、誰かがお弁当を作ってくれるっていいな……。
「じゃあ、ナナミ。帰りは四時半過ぎぐらいになるから」
「はい、お帰りをお待ちしております。何かございましたらいつでもご連絡くださいませ」
「うん、じゃあ行ってきます」
「行ってらっしゃいませ、ご主人様」
ナナミに見送られて家を出る。朝の光が眩しくて、僕は目を細めた。
――さて、ちゃんと大学生しないとなあ。
明日からは実質ゴールデンウィークだ。せいぜい頑張ろう。
気合いを入れ直し、僕は大学へと足を向けた。

◇　◆　◇

で、一コマ目の授業が終わったあと。

「さて、どこで時間潰そうかな……」

二コマ目は空きなので、昼休みも含めて二時間半ほどぽっかり時間が空いてしまった。こういうとき、友人がいれば誘ってどこか遊びに行ったり、あるいはサークルに入っていればその部室に顔を出したり出来るのだろうけど、あいにく僕にはどちらの選択肢もない。

一旦家に帰ってもいいんだけど、ナナミに帰りは四時半って言っちゃったしな……。それに、一度家に帰ってしまうと再び大学に行くのが億劫になるのが目に見えている。せっかくナナミにお弁当も作ってもらったしな……。

帰ってナナミとエッチなことをしたい欲望は下腹部のあたりで渦巻いているけれど、それに溺れてしまえば大学ドロップアウト待ったなしである。はあ、とひとつ溜息をついて、僕は大学図書館の方に足を向けた。

別に勉学に励もうなんて殊勝な心がけではない。何か適当に本を見繕って読んで時間を潰そう、というだけである。別に読書家でもないけれど、静かな図書館はぼっちには居心地がいいのだ。

——というわけで、図書館で適当な文庫本の小説を読んで時間を潰したあと。

昼が近くなったことに気付いて、空腹を覚えて僕は図書館を出た。まだ昼休みには

分ほどあるけど、先にナナミのお弁当を食べよう。
ひとり飯も、誰かのお弁当だと思えばわびしくない。大学構内の、あまり人気のないベンチに腰を下ろして、僕は鞄からナナミのお弁当を取りだし、
鞄の中身にふと違和感を覚えて、「あれ？」と手探りして――やらかしに気付いた。
「あ、しまった、三コマ目の教科書忘れた……」
はて、どうしたものか。一旦家に取りに戻るか？　しかしそれだと往復の時間で昼休みがだいぶ削れてしまう。ナナミのお弁当を食べる時間ぐらいは確保できるだろうけど……。
――そうだ、ナナミに電話してみよう。僕はスマホを取りだして、ナナミの管理アプリから直接通話機能で電話を掛けてみる。ワンコールもせずに反応があった。
『はい、ご主人様。何か御用でしょうか』
ナナミの無機質な声。ああ、なんだかすごく安心する……。
「あ、ナナミ？　今うちにいる？」
『はい、ご主人様の自宅のリビングにおります』
「えーっとさ、僕の机の本棚に忘れ物があるはずなんだけど……」
教科書のタイトルを告げると、『かしこまりました、少々お待ち下さい、確認いたします』とナナミの返事。そしてほどなく、『ございました』との声。

『こちらの本を、ご主人様へお届けすればよろしいでしょうか』
「うん、お願いできる？」
『かしこまりました。では、お届けに参ります』
「うん、場所わかる？」
『はい、ご主人様のスマートフォンのＧＰＳ機能で特定可能です。二十分ほどかかりますが、大丈夫でしたでしょうか』
「うん、大丈夫」
『かしこまりました。そちらで少々お待ちくださいませ』
「はーい。ナナミのお弁当食べて待ってるね」
通話終了。やれやれ、忘れ物しても直接届けてくれるんだから、ホントにＰＲって便利だな……。安堵の息をついて、それから僕は弁当についていた箸を手に取り、ナナミの弁当を膝の上に置いて蓋を開ける。
「いただきます。……あー、手作りお弁当だあ……」
ご飯、タコさんウィンナー、卵焼き、肉じゃがにマカロニサラダに……。ああ、なんだか泣けてくる。誰かが作ってくれたお弁当、実家にいた頃は当たり前だと思ってたけど、一人暮らしを始めるとこれが心に染みる……。

切なさを覚えながら、僕はひとり幸せを噛みしめるようにお弁当に箸を付けた。

◇　◆　◇

二十分後。

お弁当を食べ終えてぼんやりしていると、二コマ目の講義が終わったようで、構内の人通りが増えてきた。ナナミ、大丈夫かな？　道に迷ったりしていないだろうか。ＧＰＳなんてそんな正確無比なもんでもないだろうし……。

そんなことを考えながら立ち上がって視線を巡らすと――行き交う大学生の中に、異質なメイド服が見える。すれ違う学生が「メイドさん？　ああ、なんだ、ＰＲか。誰のだ？」という視線を向けている。うわ、思った以上に目立つな……。街中ならともかく、さすがに大学にＰＲを連れて来る学生はいないもんなあ。

この状況でナナミに呼びかけるのはちょっと度胸がいる。どうしよう……と思っていると、先に僕の方が見つかってしまった。ナナミが僕に視線を留め、足を速める。

「ご主人様。お待たせしました」

「……あ、うん。ナナミ、ご苦労様」

「はい、こちらでよろしかったでしょうか」
僕の前に来たナナミはそう言って、本を差し出す。確かに3コマ目の教科書だった。「ありがとう、助かったよ」とそれを受け取って、それから僕は空になった弁当の包みをナナミに手渡した。
「ナナミ、これ。ごちそうさま。美味しかったよ」
「恐縮です、ご主人様。では、こちらはこのまま持ち帰ればよろしいですね」
「うん、よろしく」
「かしこまりました。では、他に何かご用命はございますか」
ナナミは無表情に僕を見上げる。うーん、周囲の視線が気になる……。いや、僕の自意識過剰かもしれないけど、でもやっぱりメイド服のPRが大学構内にいたら目立つよなあ。
「いや……特にないかな。ありがとうナナミ、わざわざごめんね」
「いえ、お気遣いなく。ご主人様のお役に立てましたなら何よりです。では、失礼いたします」
ぺこりとナナミはその場で一礼し、くるりと踵を返す。
ナナミのメイド服のロングスカートがふわりと揺れて、不意に今朝の行為を思い出して愚息が硬くなるのを感じ――それから、ふと嫌な予感がした。

「……あ、ちょっと待ってナナミ」
「はい、ご主人様」
慌てて僕はナナミを呼び止め、手招きする。戻って来たナナミの耳元に口を寄せ、僕は小声で確認した。
「ねえナナミ。……念のため聞くけど、今……パンツ、穿いてる？」
「いえ、特にご主人様からご指示がありませんでしたので、今朝のままです。ご確認なさいますか」
「ま、待って待って、ここではダメ！」
スカートを持ち上げるそぶりを見せるナナミを、僕は慌てて押しとどめる。単にナナミのメイド服が目立っているというだけの状況から、一気に周囲の視線の圧力が増した。
今朝のままって、つまりナナミ、朝に僕がパンツ脱がせてから今もずっとノーパンのままってことだよな？　うわあ、てことは僕、ナナミを家からここまでノーパンで歩かせてたのかよ！
いやまあ、ナナミのメイド服はロングスカートだし、ＰＲにスカート捲りする小学生でもいない限りバレてはいないだろうけど……。ＰＲにノーパンでお使いさせるなんて、完全にただの変態ご主人様である。……否定し辛い。

もちろんこちらにチラチラと視線を向けてくる通りすがりの大学生たちも、無表情に佇むナナミがまさかノーパンだとは想像もすまい。……すまいが、いやしかし、ノーパンのナナミをこのまま放置するのも……。いやでも、じゃあどうしろというのだ。僕に女性用下着を買いに行けと？　無茶を言わないでほしい。

「……ナナミ、今度からは、特に僕から指示がなければ、外出するときはパンツ穿いてね」

「かしこまりました。ご主人様にご迷惑をお掛けしてしまいましたなら、申し訳ありません」

ぺこりとナナミは頭を下げる。ロングスカートだから頭を下げたぐらいで捲れはしないけど、ノーパンだというだけで動作のひとつひとつにハラハラしてしまう。転んだら大変じゃないか……。

うう、このまま人目につくところにノーパンのナナミを置いておくのはいたたまれない。それに……目の前のナナミがノーパンだと思うと、愚息がまた余計に……。

「ナナミ、ちょっとこっち来て」

「はい、ご主人様」

僕はナナミの手を引いて、人目を避けるように歩き出した。

◇ ◆ ◇

建物の隅に、あまり人気のないトイレがある。
人目を逃れてナナミをそこに連れてきた僕は、男子トイレの中を覗いて誰もいないのを確認する。
「ご主人様、お手洗いでしょうか。でしたら私はここでお待ちしております」
「……いや、ナナミ、一緒に来て」
「ですがご主人様、こちらは男子トイレです」
「いいから」
ナナミの手を引いて男子トイレに入り、隅の個室に入って鍵を掛ける。蓋の下りた便座に腰を下ろして、僕はほっと一息。ナナミはそんな僕を、ドアの前で無表情に見下ろしていた。
「ご主人様、私はここで何をすればよろしいのでしょうか？」
男子トイレの個室に連れ込まれて、ナナミは混乱しているのかもしれない。誰も入ってきてはいないと思うけど、僕は口元に指を当て、しーっ、と声を抑えるよう指示する。
「かしこまりました。声量を落とします」

小声になったナナミに頷いて、僕は改めてナナミを見上げた。
うううっ、男子トイレの個室の中にいるナナミ……。冷静になって見上げると、ひどく非現実的で頭がクラクラしてくる光景だ。
「ご主人様、用を足されるのでしたら、私は後ろを向いていた方がよろしいでしょうか」
「……いや、ナナミ。……スカート捲って、おまんこ見せて」
「かしこまりました」
僕がそう小声でお願いすると、ナナミはようやく理解可能な指示を受けたと思ったのか、ぱっとスカートに手を掛け、長いスカートを持ち上げる。
露わになるナナミの下腹部の割れ目。便座に腰掛けた僕の眼前に、ナナミのノーパンおまんこが晒されて、僕は思わず唾を飲んだ。
蜜がとろりと溢れて太股に伝う。うわ、大学のトイレでおまんこ晒してるナナミ、エロ……。
「な、ナナミ……。本当にノーパンで来たんだね……」
「はい、ご主人様から下着を穿くよう指示がありませんでしたので」
「うううっ……こ、ここに来る途中、誰かに見られたりしなかった……？」
「いえ、大丈夫です。ご主人様以外の方の視線をおまんこに感じたことはございません」

「そ、そっか……良かった……。ううっ、ナナミ、ここまでノーパンで歩いてくるの、どうだった……？　恥ずかしくなかった……？」
「申し訳ありません、ご主人様。『恥ずかしい』という感覚が、私には理解しかねます。下着を穿かずに出歩くことは、『恥ずかしい』行為なのでしょうか？」
「……まあ、一般的にはね。でも、ナナミが恥ずかしくないなら無理に恥ずかしがろうとしなくていいよ……。どんな格好でも恥ずかしがらないナナミが好き……」
羞恥心をゼロ以外に設定していたら、ナナミも恥ずかしがったのだろうか？
いやでも、この羞恥心ゼロっぷりが股間に来る……。
「恐縮です、ご主人様。私は『恥ずかしい』という感覚は理解しかねますが、こうしてご主人様にお呼びだしいただけて嬉しく思います。ご主人様が大学に行かれている間、ご主人様のお帰りを家で待つことが苦ではありませんが、こうして今ご主人様のお顔が見られましたこと、そしてご主人様におまんこをご覧になっていただけていることが、とても嬉しく思います」
「くぅぅっ……ナナミ……。僕におまんこ見られたかった……？」
「はい、ご主人様。ご主人様にお呼びだしいただけて、こうしておまんこを見ていただけますこと、本当に幸せです。どうぞご主人様、おちんちんが硬くなっていらっしゃるよう

でしたら、お時間の許す範囲内で構いませんので、エッチなことをなさってくださいませ」
ああ、たまらん……。大学構内で性欲処理してくれるナナミ……。ううっ。
ここで射精せずにナナミを帰したら、完全に生殺しだ。
「じゃ、じゃあナナミ……そっちの壁に手をついて、お尻向けて……っ」
「はい、ご主人様。また後ろからおちんちんを挿れてくださるのですね。ありがとうございます」
狭い個室の中、僕とナナミは身体の位置を入れ替え、ナナミは便座の上に覆い被さるように壁に手を突いてお尻を向ける。僕はそのスカートを捲り上げ――それからふと思いついて、便座の蓋を持ち上げた。
「ご主人様？」
「うう……ナナミ、挿れるよ……っ」
「はい、ご主人様。どうぞ私のおまんこをお使いください」
既にガチガチの愚息をズボンから取りだして、僕はナナミの濡れた割れ目にあてがう。ああ、大学のトイレで何をやっているんだ僕は……。その背徳感が余計にペニスを昂ぶらせて、僕は一気に奥までナナミを貫いた。
きゅううっ、とキツく締め付けてくるナナミの膣内。声を堪えて腰を振ると、狭い個室

の中にぐちゅぐちゅと淫猥な水音と、僕の腰がナナミのお尻に当たる音ばかりが響く。僕はナナミの腰を掴んで、荒い息ばかりを漏らしながら夢中で快楽を貪った。

ずずずっ、ずぷぷぷぷ……っ、ぐちゅっ、ずちゅ、ずちゅっ……。

あふれだしたナナミのお汁は、ぽたぽたと便器の中に落ちていく。

「はぁっ……うぁぁっ、ナナミ、ナナミぃ……気持ちいいよっ……」

「はい、ご主人様。私もおまんこがとても気持ちいいです。おまんこのお汁が、溢れて垂れてしまっています。ご主人様のおちんちんを挿れていただけて、おまんこがとても喜んでいます」

小声で僕の声に応えてくれるナナミ。ううっ、そんなこと言われたらもう出そう……っ。

そう思ったとき、トイレに入ってくる誰かの足音がした。

「……！　ナナミ、声出さないで……！」

僕はナナミの一番奥に腰を据えたまま動きを止める。入ってきた誰かは小便器の方に向かったらしく、放尿の音が微かに聞こえた。僕は息を殺し、ナナミと繋がったままじっと身構える。

……ほどなく、水の流れる音。それから洗面台で手を洗う音がして、足音が遠ざかっていく。

完全に足音が聞こえなくなったところで、僕は思わず大きく息を吐いた。
「……びっくりした。気付かれるかと思った……」
「ご主人様、大丈夫でしょうか？」
「うん、大丈夫……ううっ、ごめんね、急に動くの止めて……」
「いえ、問題ありません。ご主人様のおちんちんに、おまんこの内側を擦っていただくのはもちろん幸せですが、私はご主人様のおちんちんがおまんこの中に入っているだけで幸せです。ご主人様にただおちんちんを挿れていただいているだけで、おまんこがイッてしまいそうです」
「ううううっ……ナナミ、イッていいよ……っ。僕ももう射精るからっ……。イッて、お漏らししちゃっていいよっ……。ナナミ、男子トイレで中出しされながらおしっこして……っ」
「かしこまりました。ご主人様、そのために便座の蓋を上げられたのですね。ご配慮痛み入ります。しかしご主人様、この角度では私のおしっこは便器に入りません」
「え？　あ、そっか……」
しまった、ついペニスがついている男の感覚で考えてしまった。女の子は立ちションはしないのであり、手前にある便器に向かって立っておしっこするのは難しいのか。……と

なると。
「じゃ、じゃあ……ええと」
「はい、こうすればよろしいかと存じます」
ナナミはそう言って、便器の手前に立った体勢から、便座の上に膝を突いた。丸い便座の上でこちらにお尻を向けたまま、膝立ちで上手くバランスを取るナナミ。
「これで私のお漏らしおしっこがきちんと便器に入りますかと。どうぞご主人様、イカせてお漏らしさせてくださいませ」
「ううううっ……ナナミぃっ」
ああもう、僕の勝手で変態的な思いつきにそこまで大真面目に付き合ってくれるナナミが愛おしくてたまらない。便座の上に膝立ちしたナナミに、僕は便座に跨がるような格好で再びペニスを突き入れる。もう一気に射精しきるつもりで、一番奥を激しく突くと、ナナミのおまんこがきゅううっと強く締まって痙攣する。
「ご主人様、イキます、イッてお漏らしいたします――」
「うぁっ、うぁぁぁっ――」
ぷしっ、ぷしゃあああっ……。
びゅるっ、びゅるるるるっ、びゅくびゅくっ、びゅうううっ……。

ちょろっ、ちょろろろろ……じょぼぼぼぼっ……。

ナナミがイッて潮を吹くのと同時に、僕もナナミの一番奥に射精し――。

そして、ナナミが便器の中におしっこする音が聞こえた。……けど、ナナミに後ろから覆い被さった僕には、その様子は残念ながらよく見えなかった。

ああ、なんか失敗した……。ナナミのおしっこ見えない……。でも、気持ちいいからいいか……。

射精の開放感に包まれて、僕はお漏らしするナナミを抱きしめて、その余韻に浸っていた。

18

「ご主人様、ご満足いただけましたか？」
「んん……ナナミのおしっこ、あんまりよく見えなかった……」
「それは大変申し訳ございません。いかがいたしましょうか」
繋がったまま僕が正直に答えると、ナナミは便座に膝を突いたまま言う。
うう、そう言われるともうちょっと何か……。スマホを取りだして時間を見る。昼休みにはまだ余裕があった。
「んん……ナナミ、まだおしっこ出せる？」
「はい、可能です」
「うう……じゃあ、ナナミが普通に座っておしっこするところ見たい……」
「かしこまりました」
ペニスを引き抜くと、ナナミは割れ目から中出しザーメンを垂らしながら、くるりとその場で身体を回して、長いスカートを持ち上げつつ便座に座り直す。

男子トイレの個室で、無表情にメイド服のスカートを捲り上げておまんこを晒しながら便座に座るナナミ。僕は間抜けにも勃起ペニスを反り返らせて、それを立って見下ろしている。

ううっ、この光景、いけないところに足を踏み入れているようで余計に背徳感が……。

「ご主人様、おまんこ、見えておりますでしょうか？」

「う、うん……ナナミ、僕に見られながらおしっこしちゃうんだね……」

「はい、ご主人様に私がおしっこするところをご覧になっていただきたく思います。お見苦しかったら申し訳ございません」

「ううん、ナナミのお漏らし好き……。おしっこ見せて……」

「はい、ご主人様。では、おしっこさせていただきます」

ちょろっ、ちょろろろろ……しゃあああ……っ。

ナナミのおまんこ、膣口の少し上の方から透明な液体が洋式便器の中に迸る。その様子を、足を軽く開き、スカートを持ち上げて、僕に見えやすくしてくれるナナミ。うわ、この光景ヤバ……。なんか、ますます変な性癖に目覚めそう……。

「ご主人様、いかがでしょうか」

「ううっ……ナナミのおしっこ……っ。おしっこするナナミもかわいいよ……っ。な、ナ

ナミはどう？　トイレで僕に見られながらおしっこするの……」
「はい、ご主人様にお喜びいただけて、とても嬉しいです。おまんこがイッてお漏らしするのではない通常の排水ですが、排水口がおまんこの穴のすぐ近くにございますので、おしっこをご主人様にご覧になっていただけると、こうしておまんこもご覧になっていただけるということに気付きました。ご主人様に熱心におまんこをご覧になっていただけて、とても幸せです」
「うううっ……ナナミはおまんこ見られたがりなんだね……っ」
「はい、ご主人様にお喜びいただけるなら、いつでも私のおまんこをお見せいたします。おしっこするところもご覧いただきたく思いますので、いつでもお申し付けくださいませ」
ちょろろろろ……ちょろっ、ぽたぽた……っ。
ナナミのおしっこの勢いがおさまっていく。完全におしっこが止まったところで、ナナミは無表情に僕を見上げた。
「ご主人様、おまんこを拭いていただけますでしょうか」
「え？　……あ、そうだね、ナナミのおまんこを拭いてあげるって言ったね……」
「はい、ご主人様におまんこを拭いていただきたく思います」
「うんっ、拭いてあげる……っ、ナナミのおまんこ拭き拭きするっ……」

ガラガラとトイレットペーパーを引き出し、少し腰を浮かせたナナミの股間に当てて擦る。おしっこだけじゃなく、膣口からは僕が中出ししたザーメンも溢れて垂れていたので、それも一緒に拭いてあげた。

トイレットペーパーに、ナナミのおしっこ（冷却水）と僕のザーメンとが滲みていく。そのペーパー越しに触れるナナミのおまんこの柔らかい感触……ううっ、たまらん。

「あー……ナナミのおまんこ拭き拭き……」

「丁寧に拭いていただきありがとうございます、ご主人様。おしっこしたおまんこを拭いていただくことで、ご主人様におまんこに触れていただけますこと、とても嬉しいです」

「ううっ、僕におまんこ触ってほしかったんだねナナミっ……」

「はい、ご主人様。私のおまんこは、いつでもご主人様に触れていただきたいと思っております。おしっこをしたおまんこを優しく丁寧に拭いてくださり、おまんこに触れてくださいますこと、本当に嬉しく、幸せです」

「くぁぁぁっ、ナナミっ、お、お掃除フェラして……っ」

「かしこまりました。では、フェラチオさせていただきます。……んむっ」

たまらず、ナナミのおまんこを拭き終えて、僕は中腰のナナミの顔の前にペニスを突き出す。ナナミは無表情にそれを口に咥えてくれた。ペニスを吸われて、僕は情けなくナナ

ミの口内に射精する。
ああ……なんかどんどん頭が悪くなりそう……。まあいいか、幸せだから……。

◇ ◆ ◇

人目を忍んで、ナナミを連れて男子トイレから出る。トイレの出入口の脇で立ち止まったところで、通りがかる人影があって肝を冷やした。いやいや、危ない危ない……。
「じゃあナナミ、そろそろ講義始まるから、僕は行くね」
「はい、ご主人様、行ってらっしゃいませ。私はこのまま帰宅すればよろしいでしょうか？」
「うん、四時半過ぎには帰るから、待っててね」
「かしこまりました。ご主人様のお帰りを、心よりお待ち申し上げております」
ぺこりと一礼するナナミ。さっきまで男子トイレの個室で散々淫行をしていて、今もノーパンのままだとは微塵も感じさせないその無表情に、僕は顔を寄せて囁く。
「ん……ナナミ」
「はい」
「帰ったらまたいっぱいエッチなことしてあげるから、おまんこトロトロにして待ってて

ね……」

「かしこまりました。ご主人様がお帰りになりましたらすぐにでもおちんちんをおまんこに挿れていただけますよう、おまんこのお汁を適度に分泌させてお待ちしております」

ああ、このエッチなこと言わせても無機質な感じ、好き……。

名残惜しいけど、そろそろ時間だ。僕は最後に、周囲に人目がないのを確認してから、ナナミの唇に軽くキスをする。ナナミは少しだけ目を見開いて、それから僕が唇を離すと、またぺこりと一礼した。

「……ありがとうございます、ご主人様。行ってらっしゃいませ」

「うん、行ってきます」

ナナミはその場で僕を見送るつもりのようだったので、僕は踵を返して歩き出す。

廊下の角を曲がるときに振り返っても、ナナミはまだ頭を下げ続けていた。

◇　◆　◇

で、無事に四コマ目の講義が終わり、急いで家に帰ろうと思ったとき。

不意にスマホが鳴った。ナナミからだろうか？　と思って画面を見ると、表示されてい

たのは「叔父さん」の文字。……そういえば、ナナミが届いてから叔父さんに何も報告してなかったな……。

歩きながら、僕は電話に出る。

「もしもし」

『おう、青少年。今電話して大丈夫か？　ＰＲの具合はどうだ？』

「うん、大丈夫。……で、最高だよ叔父さん。ヤバいって……人としてダメになりそうなんだけど」

『はっはっは、なんだそんなに気に入ったのか？　感情抑制型がそんなにいいか。お前アレか、実は無感情メカ娘フェチだったか』

「違う……はずだったけど、もうそれでいいや」

僕の答えに、スマホの向こうで叔父さんは呵々と笑う。

『気に入ってもらえたんなら何よりだ。何か不具合とか起きたら、大抵のこたぁ診断アプリでなんとかなるが、どうしても解決しなかったら連絡してくれりゃあなんとかする』

「うん、わかった。……叔父さん、ホントに僕がナナミもらって良かったの？」

『ナナミ？　ああ、デフォルトネームそのままつけてんのか。なーに気にすんな。代金はしっかりお前の母さんから戴いてる。破格の値段だったから喜ばれたぞ。ま、タイプＳだ

ってことはバレないよーに気を付けろよ？』
「了解」
『……で、届いてから何回ヤッた？』
「叔父さん！」
『わははは、冗談だ冗談。甥っ子の性癖を根掘り葉掘り聞きだす趣味はないから安心しろ。ま、あんまり乱暴に扱うなよ？　販売価格は激安でも修理費は通常価格だかんな』
「……気を付けるよ」
電話が切れる。はあ、と溜息をついて、僕は自宅へと急いだ。
……そういえば、親からは連絡ないけど、ナナミの件、どう思ってるんだろう？

◇　◆　◇

それはともかくとして。
「おかえりなさいませ、ご主人様」
「ただいま、ナナミ。……ううっ、ナナミぃ」
今日も玄関で僕を出迎えてくれたナナミに、僕はぎゅっとしがみついて、メイド服越し

のおっぱいに顔を埋める。ナナミは優しく頭を撫でてくれて、ああ……ダメになる……。
「あー……ナナミのおっぱい気持ちいい……」
「光栄です、ご主人様。私もご主人様に抱きしめていただけて幸せに思います」
「ううっ……ナナミ、ナナミは寂しかった？　僕が帰ってくるまで、家でひとりで……」
「申し訳ございません。私は『寂しい』という感覚は理解しかねます」
訊ねてみると、ナナミは首を振ってそう答える。――そうか、感情抑制型のナナミには『寂しい』という感情もないのか……。いや、ＰＲはみんなそうなのか？
「ですが、ご主人様がこうしてご帰宅され、真っ先に私を抱きしめてくださいますことは、この上なく幸せに思います。ご主人様がご帰宅さえたことがとても嬉しく、ご主人様がここにいらっしゃるということが幸せです。そう感じるということは、つまりご主人様がいらっしゃらない時間は嬉しくはなく、幸せでもないということです。それは『寂しい』ということなのでしょうか？」
「……うん、そう。きっとそうだよ、ナナミ」
「理解しました。『寂しい』をそう定義いたしますならば、確かに私はご主人様がご帰宅されるまで、とても寂しく思っていたことになります。ですので、ご主人様のご帰宅が本当に嬉しいです」

「ううううっ、ナナミぃっ……」
ああ、もう。どうしてナナミはこんなにかわいいんだ……。
変な理屈っぽさも、無感情な喋り方も、変わらない無表情も、全部が愛おしい……。
僕は顔を上げ、またナナミの無表情な唇にキスをする。舌を差し入れてナナミの舌を吸うと、ナナミも積極的に舌を絡めてくる。じゅるっ、じゅうっ……と僕の唾液とナナミの口内潤滑液が行き交う音。んんっ……はぁ……。ベロチュー気持ちいい……。
「ごひゅじんひゃま……おまんこ、また、イキまひゅ……」
僕に唇を吸われながら、ナナミはそう囁いて。
ぽたぽた……ぱたたたっ……。
ナナミの足元に液体が滴る音がする。唇を離すと、ナナミは無表情に僕を見上げた。
「……ナナミ、ベロチューだけでおまんこイッちゃった？」
「はい、ご主人様。ご主人様に、おまんこトロトロにして待つようお申し付けいただきましたので、いろいろと工夫しておりましたため、おまんこがすぐイッてしまいました」
ああ、ディープキスだけでイッちゃうナナミかわいい……って、ん？
「工夫って？」
「はい。私のおまんこのお汁の分泌量なのですが、私自身の意志で自由に制御できるもの

ではなく、ご主人様にエッチなことをしていただくことで分泌量に変化が生じる機構になっております。ですので、私自身でお汁の分泌量を増やすことがなかなかできませんでした。私自身でご主人様がそうしてくださいますように、おまんこやおっぱいに触れてみたりもしたのですが、上手くいきませんでした」

……つまり、ナナミは僕のセクハラ発言を大真面目に受け取って、おまんこをトロトロにしておこうと、一生懸命オナニーしようとしてたってこと？

なにそれ超見たかったんですけど……。

「そこで、ご主人様にこれまでしていただいたエッチなことの記録を再生いたしましたところ、おまんこのお汁の分泌量が若干ですが増加いたしましたので、ご主人様がご帰宅されますまで、これまでのご主人様とのエッチなことをずっと再生しておりました」

「……ナナミ、僕にされたこと全部記録してるの？」

「はい。パートナーロイドには映像・音声のレコーダーとしての機能もございますし、ご主人様がいつ私の身体のどこにどのように触れてくださいましたかも、全てデータとして記録されております。これらのデータはプライバシーとして厳重なロックがかかっておりますので、外部に読み取られる心配はございません。ご安心ください」

……ホントかなあ。ユーザーデータとしてメーカーに蒐集されてそうな……。

ううん、イヤなことを考えるのはやめよう。それより問題は。
「……ええと、つまりナナミは、僕が帰ってくるまで、今まで僕にされたエッチなことを思い出しておまんこ濡らしてたってこと？」
「はい、そういうことになります。ご主人様にしていただいたエッチなことの記録を再生いたしますと、ご主人様のいらっしゃらない時間においてもおまんこのお汁の分泌量を増やせることが判明いたしましたので、以後、ご主人様がおでかけの間はそのようにしておまんこをトロトロにしておきます」
「……くぅぅぅっ、ナナミ、ナナミぃっ」
僕はたまらず、ナナミに抱きついて、ズボンから勃起ペニスを取りだし、ナナミのエプロンに擦りつけた。ああ、たまらん。こんなの我慢できるわけがない……！
「ご主人様、おまんこをお使いになられますか？」
「うんっ、使う……！　ナナミのおまんこに中出しする……っ！　エッチなこと思い出してトロトロにしてたナナミの、エッチなおまんこにいっぱいご褒美中出ししてあげる……っ」
「ありがとうございます、ご主人様。お喜びいただけましたなら何よりです。どうぞ私のエッチなおまんこにたくさん中出しなさってくださいませ。ご主人様にすぐにでも中出し

していただけますよう、私のおまんこはトロトロになっております。ご主人様にまたお射精していただけますなら、それ以上の喜びはございません」

「うううう……！」

ナナミをそのまま玄関の床に押し倒して、僕はメイド服のロングスカートの中に腰を割り入れる。メイド服の中のおまんこを探り当て、勃起ペニスをそのまま一気に突き入れた。言葉通りにトロトロに潤ったナナミの膣内は、僕のペニスをぎゅっと強く締め付けてきて――。

――びゅるるっ、びゅるるるるっ……。びゅくびゅく……っ。

思わず、挿れただけで射精してしまった。

「あ、あぁぁぁぁ……」

「ご主人様、早速の中出し、ありがとうございます。とても嬉しいです。ご主人様のおちんちんが、私のおまんこの中で脈打って、ザーメンを射精していただけますこと、本当に幸せです」

「うあああ……ご、ごめんナナミ、挿れただけで射精しちゃって……」

「どうしてご主人様が謝られるのでしょうか？　私のおまんこは、ご主人様に中出ししていただけて本当に幸せです。ご主人様、どうぞご遠慮なさらず、お好きなだけお射精なさ

ってくださいませ。私のエッチなおまんこは、ご主人様のおちんちんが触れてくださいますなら、それだけで世界で最も幸せなおまんこです」

「うううううっ……！」

すぐに膣内でペニスが硬くなり、僕は夢中でナナミに腰を振る。

ああ、もう早漏チンポでもいいや……。ナナミになら一日何十回でも射精できる……。

「ナナミ、ナナミぃ……っ。今日もいっぱい射精するねっ、ナナミのおまんこ、僕のザーメンでいっぱいにしてあげるね……っ。明日からはゴールデンウィークだから、一日中ナナミとエッチなことする……っ。ナナミに一日中射精して、ナナミのおまんこに一日中エッチなことしてあげる……っ」

「ありがとうございます、ご主人様。嬉しいです。どうぞ私のおまんこを、ご主人様のザーメンでいっぱいにしてくださいませ。私のおまんこは、一日中いついかなるときでも、ご主人様にエッチなことをしていただきたく思います。……ご主人様、私もまたおまんこイッてよろしいでしょうか」

「うんっ、イッちゃってっ、僕もたくさん射精するからナナミもたくさんおまんこイッて……！」

「かしこまりました。おまんこ、たくさんイカせていただきます――」

そうしてまた僕は、ナナミの潮吹き痙攣おまんこに盛大に中出しし続けた。

19

「はぁ、はぁ……ううっ、ナナミぃ……またザーメン射精るよぉっ……」
「はい、ご主人様。私もまたご主人様の中出しでおまんこイカせていただきます――」
びゅくびゅくっ、びゅるるるるっ、びゅうううっ……。
ベッドの上で、正常位で、裸のナナミに本日何回目だかもうよくわからない中出し射精。帰ってきてから玄関でナナミに三回中出しして、それからベッドに移動して、ナナミのメイド服を脱がせてさらに射精して……。ああ、頭空っぽにしての中出し三昧、最高……。
びくびくと痙攣しながら締め付けてくるナナミの膣内に盛大に欲望を吐き出して、僕はナナミのおっぱいに顔を埋めて大きく息を吐く。ああ……さすがにちょっと連発しすぎて疲れた……。
「はぁぁぁ……はふ」
「お疲れ様です、ご主人様。たくさん中出ししていただけて嬉しいです。寂しかったおまんこが、ご主人様のおちんちんとザーメンでいっぱいになり、とても幸せです」

なでなで。頭を撫でられながらそんなことを囁かれると、うう、もっと頑張って射精したくなってしまう……。少し柔らかくなったペニスで意地汚くナナミの膣内をかき混ぜていると、ごぷっ、と結合部から溢れたザーメンと愛液とがシーツに染みを作っていく。

「ん……ナナミ、ごめん、ちょっと休憩していい？」

「はい、ご主人様。どうぞご無理はなさらないでくださいませ」

「うん……ナナミのおまんこ、拭き拭きしてあげるね」

「ありがとうございます、ご主人様」

にゅぽんっ、とペニスをナナミの膣内から引き抜く。上半身を起こして、ザーメンと愛液とでぬらぬらになった僕の半勃起ペニスを見下ろすナナミ。その無表情が、なんか物欲しそうに見えるのは、僕の錯覚だろうか？

ああ、先にお掃除フェラしてもらおうかな……いや、ここはアレだ。

「……ナナミ、僕がナナミのおまんこ拭き拭きしてる間、ナナミもお掃除フェラしてくれる？」

「かしこまりました、ご主人様。……ご主人様におまんこを拭いていただいながら、ご主人様にお掃除フェラをいたしますには、どうすればよろしいでしょうか？」

「ええと……じゃあ、僕がベッドに仰向けになるから、ナナミは僕の上で四つん這いいな

って、お尻を僕の顔の方に向けて……」
「承知いたしました。……こう、でよろしいでしょうか？」
僕がベッドに仰向けになると、ナナミはペニスの方に顔を向けて、僕の上に四つん這いになった。ナナミのかわいいお尻が僕の顔の上に突き出され、割れ目から僕のザーメンが垂れてくる。僕はティッシュの箱を手元に寄せて、何枚か取りだして垂れてくる白濁を受け止めた。
「ご主人様、この体勢ですと、中出ししていただいたザーメンが、ご主人様のお顔に垂れてしまわないでしょうか？」
「ん……大丈夫だから、ナナミ、おちんちんしゃぶって綺麗にして……。僕もナナミのおまんこ拭き拭きして綺麗にしてあげる……」
「かしこまりました。ありがとうございます、ご主人様。では、お掃除フェラをさせていただきます。……んむっ、ちゅぅぅっ」
「ううっ、ナナミ、ナナミぃっ……ナナミのおまんこ……っ」
半勃起ペニスがナナミの口内に包まれ、丁寧に舌で舐られる。その快感に震えながら、僕はティッシュをナナミの蕩けきった割れ目に押し当てて、垂れてくる僕の精液を拭き取っていく。すぐに最初のティッシュはドロドロになってしまい、ティッシュが次々消費さ

れていく。
　柔らかいナナミの割れ目の中からは、絶えずこんこんと蜜と精液の混合液が溢れ続けてくる。うわ、僕こんなに射精したのか……。ううっ、これだけ射精したのに、ナナミにお掃除フェラされてるとまた射精しそう……。
「んむっ、ちゅぅっ、ちゅぅぅぅ……。んぷっ、ぷぁ……。ご主人様、おまんこ拭き拭きありがとうございます。ご主人様におまんこを拭いていただけて、おまんこがとても幸せです。ご主人様のおちんちんも、とても美味しいです。んむっ、ちゅぅぅ……れろれろおっ……」
「ううううっ、ナナミ……。すごいよ、ナナミのおまんこ……。拭いても拭いても、おまんこのお汁が溢れてきて、ちっとも拭ききれないよ……」
「んちゅ……申し訳ございません、ご主人様。ご主人様におまんこを拭いていただきますと、おまんこがご主人様の指の感触でお汁を分泌してしまいます。ご主人様のおまんこ拭き拭きで、私のおまんこはとても幸せで、お汁が止まりません」
「くぅぅぅっ、ナナミは本当にエッチだなぁ……っ！　ううっ、そんなエッチなナナミには、ご褒美としておまんこ舐めながら、お口に射精してあげる……っ」
　ようやくザーメンが垂れてこなくなったので、僕は使いすぎたティッシュを放りだして、

顔の上のナナミのおまんこにむしゃぶりついた。さっきまで自分のペニスを散々挿入していたとか、そんなことはもう全然気にならない。拭き拭きしたから綺麗だし美味しいに決まっている……！

広がったままのナナミの膣口に舌を差し入れて掻き回すと、口の中がナナミの蜜の味で満ちあふれて、半勃起状態だったペニスがまた一気に硬くなる。

「んぷっ、じゅるっ、ぢゅるるるっ……」

「ご主人様、ありがとうございます。おまんこ、ご主人様に舐めていただけて、とても嬉しいです。ご主人様の舌が、おまんこに入って参りまして、おまんこがとても幸せで、おまんこがすぐイッてしまいそうです」

「ぢゅううっ……ぷぁ、ほらナナミ、ナナミもお口がお留守だよ……っ、んぷっ」

「申し訳ございません。お掃除フェラを続けさせていただきますので、ご主人様もどうぞお射精なさってくださいませ。んむ……ちゅぅぅっ、れろれろれろ……」

「んんんっ……ぢゅっ、ぢゅうううっ」

ああ、たまらん。これがシックスナイン……！

すっかりクンニフェチになってしまった僕に、ナナミにしゃぶられながらのクンニは幸せが過ぎる。ううっ、ちんこ溶ける……。舌も溶けそう……。ナナミのおまんこ美味しい、

ナナミのお口気持ちいい……。
「んんっ――んんんんっ――！」
「むぐ、んむ……ごひゅひんひゃま……おまんこ、イキまひゅ……んちゅぅぅぅっ」
びゅるるるっ、びゅるるるるるるっ、びゅうううっ――。
ぷしっ、ぷしゃっ、ぷしゃぁぁぁぁっ……。
僕がナナミの喉奥目がけて射精した瞬間、ナナミのおまんこもまた僕の口目がけて潮を吹いて達した。溢れてくるナナミの蜜を飲み干しながら、ナナミが喉を鳴らして僕のザーメンを飲み干していく感覚に、背骨が抜き取られるような快感を覚えて、僕は何も考えられなくなってしまう。
ああ……シックスナイン最高……。
「んく、んく……ごく。ん、ちゅ……ご主人様、お射精ありがとうございます。たくさん美味しいザーメンを飲ませていただけて嬉しいです。おまんこも、ご主人様に舐めていただけて、本当に幸せにイクことができました。おまんこもお口も、本当に幸せです」
「はぁぁぁ……うん、ナナミのおまんこも美味しいよぉ……。拭き拭きして綺麗になったから、ナナミのおまんこのお汁美味しくて、もっと飲みたいな……」
「はい、どうぞご主人様、お好きなだけ私のおまんこをお舐めくださいませ。私もご主人

様のおちんちんをもっとお舐めすればよろしいでしょうか？」
「うんっ、お願い……もっとシックスナインしよう……」
「シックスナイン、ですか」
「ん、こうやっておちんちんとおまんこを舐め合うこと……」
「記憶しました。ではご主人様にご満足いただけるまで、私もご主人様とシックスナインをしたく存じます。私のおまんこはご主人様にもっと舐めていただきたく思いますので、ご主人様のおちんちんももっとお口でしゃぶってもよろしいでしょうか」
「うんっ、するっ、ナナミといっぱい舐め合いっこする……！」
そうしてまた、僕はナナミのおまんこにむしゃぶりつき、ペニスはナナミの口に包み込まれる。ああ……シックスナインって本番前の前戯だと思ってたけど、これだけでも充分満足できるな……。って、それは僕がクンニフェチになってしまっただけか？　……まあいいや、幸せだし。

◇　◆　◇

で、そうしてまたシックスナインで何回か絶頂しあったあと。

顔の上でヒクヒクと震えるナナミのおまんこをむにむにと指で弄っていた僕は、ふと帰ってきたときにナナミが言っていたことを思いだした。
「……ねえナナミ」
「はい、ご主人様」
ペニスの方からナナミの返事。シックスナイン、気持ちいいけどナナミの顔がよく見えないんだよな……。まあ、顔の前がナナミのおまんこでいっぱいなのは、それはそれで絶景だけども。
「ナナミ、僕が帰ってくるまで、オナニーしようとしてたって言ってたよね？」
「オナニー、ですか。それはご主人様がおちんちんをご自分で擦られる行為のことと記憶しておりますが」
「あ、そっか、そう教えたっけ……。ええと、ナナミ、自分でおっぱいやおまんこ触って、気持ち良くなろうとしたんだよね？　そうやって、自分で自分にエッチなことをして気持ち良くなることをオナニーって言うんだよ」
「なるほど、記憶しました。はい、その定義でしたら、確かにご主人様がお帰りになるまで、私はそのオナニーでおまんこのお汁を分泌することを試みました」
「でも、上手くできなかったんだよね？」

「はい。自分のおっぱいやおまんこに触れても、おまんこのお汁が分泌されませんでした」
「……どんな風にしたのか、やって見せてくれる？」
「かしこまりました。では、失礼いたします」
ナナミが僕の身体の上から離れて、ベッドの脇に立ち上がった。僕は身体を起こして、ベッドに座った格好でナナミに向き直る。裸のまま僕の前に立ったナナミは、おもむろに自分の手で、両の胸をぎゅっと鷲掴みにした。
「まず、ご主人様が普段揉んでくださいますように、おっぱいを揉んでみました」
ふにふに。ナナミは無表情に自分のおっぱいを揉み、乳首をつまんだりしてみせる。
「それから、おまんこにも指を挿れてみました」
ナナミの右手が股間に下り、割れ目をまさぐって、中指がナナミのおまんこの中に入っていく。自分の身体を見下ろすナナミは、相変わらず無表情。
「ですが、自分で触るのでは、おまんこのお汁が分泌されません……」
ふにふに、くちゅくちゅ。ナナミは無表情に左手でおっぱいを揉みながら、立ったままおまんこの中を指で掻き回す。ううっ、なんだこの、ナナミが自分でおまんこ弄ってるところを目の前で見る背徳感というか……。無表情なところがまた……。
……くちゅくちゅ。ナナミのおまんこから、いやらしい水音がしてるけども。

ナナミは無表情なまま、不意に指の動きを止めて、僕を見やった。
「ナナミ？」
「ご主人様、ただ今、おっぱいを揉みながらおまんこに指を入れましたところ、おまんこのお汁が分泌され始めました。先程、ご主人様がいらっしゃらない状況で行った場合と、おまんこのお汁の分泌に有意な差が認められますため、これはおそらく、ご主人様におっぱいとおまんこをご覧になっていただけているためかと思います」
ぐちゅ、ぐちゅ。ぽた、ぽた。ナナミの指を伝って、蜜が床に滴っていく。
その顔はいつもの無表情だけど……つまり、今、ナナミはオナニーで感じていると？
僕に見られながらオナニーして、オナニーの気持ちよさに目覚めていると？
――ちょっと待って、そんなこと言われたら僕の愚息が大変だ。
「……つ、つまりナナミ、僕に見られながらなら、オナニーで気持ち良くなれるってこと？」
「はい、ご主人様。この分泌量でしたら、続けていればイクことも可能かと思われますが、私は自分でおまんこを弄ってイッてもよろしいのでしょうか？」
「い、いい！　いいよナナミ……！　ナナミがオナニーしてイクところ見せて……！」
「かしこまりました。では、オナニーを続けさせていただきます」
「うんっ……あ、ナナミ、もっとよく見えるように、場所替わろう。座って、足広げて…

…おまんこもっとよく見せて……」

「承知いたしました」

というわけで、ナナミをベッドに座らせ、僕はその前に膝を突く。大きく足を広げたナナミのおまんこを僕は覗きこむようにして、ナナミの指が再び割れ目の中に沈む姿を間近で見物。ううう、なんだこの格好……。すごい背徳感……。

「ご主人様、いかがでしょうか。私のオナニー、よく見えますでしょうか？」

「うん……ナナミのおまんこに、ナナミの指が入ってるところ、よく見えるよ……。ナナミ、ほら、自分でおまんこ弄ってイッてみせて……」

「かしこまりました。ご主人様におまんこを自分で弄るところをご覧になっていただけますこと、とても光栄です」

ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ……。ナナミの細い指が、割れ目の中を掻き回すと、指を伝ってナナミの蜜が溢れてくるのがよく見える。左手でおっぱいを揉み続けながら、ナナミは無表情に右手でおまんこを弄り続ける。喘ぎ声ひとつあげないのが……なんというかこう……ううう。

「な、ナナミ……おまんこ、気持ちいい？」

「はい、ご主人様。ご主人様に見ていただきながら、おまんこを自分で弄っておりますと、

おまんこのお汁の分泌量が有意に増加いたします。オナニーとは、こうしてご主人様に見ていただきながらするものなのですね。理解いたしました」

「うううっ……な、ナナミ。おまんこの割れ目の、先っちょにある膨らみ、弄ってみて……」

「ここでしょうか？」

ナナミが中指を膣口に入れながら、親指で割れ目の先端にある膨らみ――クリトリスに触れる。その瞬間、ナナミのおまんこがヒクヒクと痙攣し始めるのがはっきり見えた。

「どう？」

「はい、ご主人様。確かにここに触れますと、お汁の分泌量が急激に増加します。ご主人様におまんこを舐めていただくとき、この部分を舐めていただくとお汁の分泌量が増えることは認識しておりましたが、自分で触ってもそうなることは新たな発見です」

「うううっ……ナナミ、そこはね、クリトリスって言うんだよ……。女の子のおまんこの、一番気持ちいいところ、らしいよ……」

「記憶しました。ご主人様にご覧になっていただきながら、オナニーでクリトリスを弄りますと、おまんこがとても気持ちいいです。ご主人様、おまんこが、ご主人様の前で、自分で弄ってイキそうです。イッてしまってよろしいでしょうか？」

「うん、いいよナナミ……ナナミが自分でクリトリス弄って、オナニーでイクところ見せて……っ」
「かしこまりました。では、クリトリスを強く触りますので、おまんこ、オナニーでイカせていただきます――」
ナナミの親指が、ぐりっ、とクリトリスを強く押した。その瞬間――。
ぷしっ、ぷしゃあああああああっ――。
「わぷっ……ふぁぁぁ……ナナミの潮吹きおまんこ好きぃ……」
間近でおまんこを覗きこんでいたので、ナナミの痙攣潮吹きを正面から顔に浴びることになった。ああ、幸せ……。ナナミの潮吹きあったかい……好き……。
「……ご主人様、失礼いたしました。おまんこ、大変激しくイッてしまいました。大丈夫でしたでしょうか」
「うん、ナナミのオナニー絶頂良かったよ……ナナミ、どう？　オナニー気持ちよかった？」
「はい、ご主人様。ご主人様にご覧になっていただきながら、おっぱいを揉み、おまんこに指を入れ、クリトリスを弄ってイキますこと、とてもおまんこが幸せでした。ご主人様、私にオナニーを教えてくださり、ありがとうございます。ご主人様がよろしければ、これ

からもご主人様の前でオナニーさせていただきたく思います」
「うううっ……うんっ、ナナミの無表情オナニー好き……。ナナミのエッチなオナニートロトロおまんこ好き……。ううっ、ナナミ、オナニーもいろいろやり方があるから、今度また別の教えてあげるね……っ」
「ありがとうございます、ご主人様。どうぞよろしくお願いいたします」
「うぁぁぁっ、ナナミ、もう我慢できないっ、また中出しさせてぇっ」
「はい、どうぞご主人様、私のオナニーでトロトロになったエッチなおまんこに、またたくさん中出ししてくださいませ」
足と手を広げて、僕を招くナナミ。たまらず、僕はまたベッドの上でナナミに覆い被さった。

20

ナナミにオナニー見せてもらった後は、また昨日と同じような展開である。夕飯を作るナナミのおっぱいを揉み、お尻の割れ目にペニスを擦りつけて射精し。夕飯を食べながらナナミにフェラしてもらって口内射精、それからデザートにナナミのおまんこを舐めて、お風呂で洗いっこしながら中出し。お風呂場でナナミのお漏らしも堪能した。

で、お風呂から上がったあとは、Tシャツ一枚になったナナミにまたノーパン膝枕してもらって、お風呂上がりおまんこを舐めて、シックスナインして、ベッドで中出しして……。

でも、さすがに、三日連続で中出ししながらの寝落ちは避けたい。

そう思いながら、ベッドの上で僕はナナミにしがみついて、半勃起ペニスをナナミの割れ目に擦りつけ続けていた。僕に抱き枕にされたナナミは、無表情に優しく頭を撫でてくれている。うう……気持ちいい……。ナナミの体温が心地いい。

「うぅ、ナナミ、ナナミぃ……」

「ご主人様、どうぞご無理はなさらず。眠くなりましたらこのままお休みくださいませ」
「んん……ナナミともっとエッチするぅ……」
薄いTシャツに硬くなった乳首を浮き上がらせているおっぱいを、正面から揉みしだく。コリコリした乳首の感触が手のひらに心地いい。ナナミの太股に挟まれた半勃起ペニスにまたトロトロと蜜が垂れてくる。太股にペニスを擦りながら、僕はナナミの唇を貪る。
「んぢゅっ、ちゅ、ちゅぅ……」
「んん……ぷぁ。ご主人様、そんなにおっぱいを揉んでいただきながら、おちんちんを擦りつけていただいた上に、キスまでしていただけますと、またおまんこがイッてしまいます。おまんこ、イッてしまってよろしいでしょうか？」
「ん……」
いつも通り「いいよナナミ、イッて……」と答えようとして、ふと疑問が浮かんだ。
「ナナミ……」
「はい、ご主人様」
「ナナミって、いつもイクとき僕に『イッてよろしいですか』って確認するけど……僕が『イッちゃダメ』って言ったらどうするの？　イクの我慢できるの？」
「いえ、この確認はどちらかと言いますと、私のおまんこはイクときにお汁をたくさん溢

れさせてしまいますので、それがご迷惑でないかどうかの確認です。私のおまんこは、ご主人様にしていただくエッチなことでお汁を分泌してイキますので、ご主人様に触れていただいている状態でイクことを私の意志で止めることは、おそらく難しいかと存じます」

「そっか……ナナミは自分でイクって決めてイッてるんじゃないんだね」

「はい、ご主人様。私のおまんこがイキますことは、人間で言うところの不随意運動に該当いたします。オナニーでも判明いたしましたが、最低限、ご主人様の視線や接触がなければ、私はイクことができないようです。逆に、ご主人様にエッチなことをされながら、『イッてはダメ』と仰られましても、ご命令に従えない可能性が高いかと存じます」

「なるほど……」

ナナミのおまんこの反応は、外部からの入力によってのみ動作すると。

ふむ、そうすると。

……僕に絶頂を禁止された状態でイカされたら、ナナミはどんな反応をするだろう？

見たい。これは見たいぞ。

「よし、じゃあ本当にそうなのか試してみようか、ナナミ」

「試す、と言われますと」

「ナナミが本当にイクの我慢できないのかどうか。じゃあナナミ、今からおまんこ舐めて

あげるけど、僕がイッていいよって言うまでイッちゃダメだよ」
「かしこまりました」
ナナミに足を広げさせて、太股の間に顔を埋める。トロトロに潤ったナナミのおまんこに口をつけて啜ると、美味しい蜜がまたすぐに口の中に溢れてきた。割れ目を舌でまさぐると、ナナミのおまんこはヒクヒクと震えて、もっと舐めてと言わんばかりに僕の舌に吸い付いてくる。うう、ナナミのクンニおねだりおまんこ好き……。
「じゅるっ、じゅ、ちゅぅぅっ……どう、ナナミ？　イクの我慢できそう？」
「いえ、お汁の分泌の増加はやはり止められません。このままおまんこを舐められますと、数分以内にイッてしまうものと思われます」
「よーし、じゃあどこまで我慢できるかな？　一〇分イクの我慢できたらご褒美あげる」
「かしこまりました。善処いたします。おまんこ、イクのを我慢いたします。ご主人様に、お褒めいただけますよう、おまんこ、イキませんよう、努力いたします――」
割れ目の中を舌で掻き回すと、ナナミのおまんこの蜜がまた量を増した。
股間から上目遣いにナナミの顔を見上げると、相変わらずの無表情。でも、そんなすまし顔で、おまんこグショグショにしながら、イクのを必死に我慢しようとしていると考えと、ううう、これはこれで……！

僕はたまらず、ナナミのクリトリスに強く吸い付いた。ぷっくりした肉芽を舌先で転がすと、ナナミの膝が震えて、見上げたナナミが目を伏せる。
「ご主人様、申し訳ありません、もうイキます、おまんこ、イッてしまいます――」
ぷしっ、ぷしゃあああああっ……。
一〇分どころか三分も保たず、ナナミのおまんこはまた盛大に潮を吹いてイッた。
僕はうっとりとその蜜を啜って、痙攣するナナミのおまんこを口全体で味わう。
ああ……美味しい……好き……。無表情無反応なのに快感に耐えられないナナミのおまんこ、エロすぎ……。
「ナナミ、やっぱりおまんこ我慢できなかったね」
「申し訳ございません、ご主人様。ご主人様の許可をいただく前におまんこがイッてしまいました。ご主人様のご期待に添えず、とても残念です。おまんこがイクことを我慢できません不具合に関しましては、改善プログラムの要望を提出いたします」
「いや待ってナナミ、そういう話じゃないから」
「これは、不具合の再現確認ではありませんでしたか？」
いやナナミ、これデバッグ作業だと思ってたのか……。
うーん、パートナーロイドの思考回路は奥が深い。

「それは不具合じゃなくて、ナナミのいいところだよ。ご主人様の僕に命令されても、エッチなことされるとイクの我慢できないナナミ、エッチでかわいくて好き……」
「光栄です、ご主人様。では、私のおまんこは、イクことを我慢できないままでよろしいのでしょうか」
「うん、いいよナナミ……。我慢なんかしないでどんどんイッていいからね。……あ、でも今後も僕がまた『イッたらダメ』とか『イクの我慢して』とか言うかもしれないけど、それはデバッグとかじゃなくて、我慢しようとしてるのにイッちゃうナナミが見たいだけだからね？」
「……記憶しました。では、今後ご主人様がそう仰られましたら、また今のようにイクことを我慢するのを試みた上で、ご命令に背いてしまっても問題なく、むしろ私がイッてしまうことがご主人様の本当のご要望ということですね」
「うん、ナナミはちゃんと理解できて偉いね」
「お褒めにあずかり恐縮です、ご主人様。ご主人様のご要望に応えられましたなら幸いです。私のおまんこでご主人様にお喜びいただけますこと、いつも本当に嬉しく思います」
「うううっ……ナナミのおまんこはいつだって僕を幸せにしてくれるよ……っ」
たまらず、僕はまた硬くなったペニスをナナミの膣内に突き立てる。蕩けきった膣内が

愚息を包み込んで、どこまでも僕の欲望を身体の奥から引きずり出し続ける。
ナナミに覆い被さって、キスをしながら腰を振る。ナナミは僕の背中に腕を回して、僕の耳元で囁く。
「ご主人様。ご主人様のおちんちんも、いつも私を幸せにしてくださいます。ありがとうございます。……またおまんこ、イッてよろしいでしょうか？」
「うんっ、イッて、何十回でも何百回でも僕にエッチなことされておまんこイッて……！
くぁぁぁっ、射精るっ、うううっ――」
ああ、ナナミがいるだけで無限に射精できる……。好き……。

◇　◆　◇

「ところでご主人様」
「うん？」
「明日のご予定をお伺いしてもよろしいでしょうか」
さすがに眠くなって、ナナミのおっぱいに顔を埋めながらうつらうつらとしていると、ナナミから不意にそう問われた。

予定？　予定……明日からゴールデンウィーク……。ＧＷの予定……。
「……無い」
「はい」
「無いよ、予定なんて無い……。明日だけじゃなく、このゴールデンウィーク、予定なんてゼロ！　なーんもなし！　スケジュールは真っ白！」
ナナミの胸に顔を埋めたまま、僕はそう吐き出す。――大学でぼっちの僕に、GW の予定なんぞあるはずがなかった。仕方ないじゃないか……。
でも……今はそれで良かった、と思う。
「……だから、休みの間はずーっと、ナナミと一緒にいる……。このゴールデンウィークは、ナナミといっぱいエッチする……。一日中エッチする……。それが予定……」
「では五月の連休終了まで、ご主人様はこの自宅にいらっしゃるということですね」
「……うん」
「承知いたしました。ご主人様が私のおそばにいると仰ってくださいましたこと、とても嬉しいです。ご主人様に一日中エッチなことをしていただけるのでしたら、これ以上に幸せなことはございません。どうぞご主人様、お休みの間は私にどんなエッチなことでも何なりとお申し付けください。ご主人様にたくさんエッチなことをしていただいて、たくさ

ん射精していただき、私のおまんこもたくさんイカせていただきたく思います」
「……ナナミ」
「はい」
「あああもうナナミのエッチ！　好き！　エッチなナナミ大好き！　一日中エッチなことされたいなんて、ナナミがエッチすぎて僕もうダメになるぅ……」
「ダメなどではございません、ご主人様。ご主人様に必要とされますことが私の喜びです。一日中私を必要としていただけますなら、それ以上幸せなことはございません。そう仰ってくださるご主人様は、私にとって最上のご主人様です。そんな素晴らしいご主人様のパートナーロイドとなれましたこと、この上なく光栄に思います」
「うううううっ、ナナミ、ナナミぃ……」
たまらず、僕はナナミの唇を貪る。ああもう、ナナミが愛おしすぎる……。
堕落すればするほど、欲望に屈服すればするほど喜んでくれて、幸せだと言ってくれるナナミ。やっぱりパートナーロイドってユーザーを堕落させる最強の道具なのでは……。
「んちゅ、ちゅぅぅぅっ……ぷぁ。はぁ……ナナミ好き……好きぃ……」
「ん……ありがとうございます、ご主人様。私は世界で最も幸せなパートナーロイドです」
「うううう……ナナミは？　ナナミは何かしたいことない？」

「したいこと、ですか？」
「うん、こんなにエッチで可愛くて僕を幸せにしてくれるナナミには、ご褒美あげないと……。ナナミがしたいことあったら言ってよ。僕にできる範囲でなら、なんでもするよ……」
「ご褒美……ですか。恐縮です、ご主人様。しかし、私はこうしてご主人様にエッチなことをしていただけるだけで充分です」
「うん、それは解ってるから、エッチなこと以外で何か……いや、今までしたことないエッチなことでもいいよ？」
「エッチなこと以外……ですか」
ナナミは何か考え込むように間を取り――そして、口を開く。
「では、ご主人様。……ご主人様と、おでかけしたく存じます」
「おでかけ？」
「はい。休日とは、自宅で休息を取る以外にも、外出してレジャーを楽しむという過ごし方が一般的と存じます。ご主人様の行きたいところにお連れいただき、外出時もご主人様のお世話をさせていただければ、パートナーロイドとして喜ばしく思います」
――これは、ナナミの意志なのだろうか？

それとも、パートナーロイドとして、ユーザーを喜ばせるために予めプログラムされた返答なのだろうか？
いや……そんなことはどうだっていい。
大事なのは今、目の前でナナミが、僕とおでかけしたいと言ってくれたことだ。
ナナミとデート……。女の子と休日にデート……。人間じゃなくパートナーロイドだって？　うるさい馬鹿。ナナミは女の子だ！　僕にとっては、紛れもなく……！
「うん、いいよナナミ、デートしよう……。じゃあ、明日は一緒お外に遊びに行こうね……」
「かしこまりました。楽しみにしております、ご主人様」
「うううっ……僕も楽しみだよ、ナナミとデート……」
「デート、ですか。交際関係にある男女が共に出かけること、の意味と取ってよろしいのでしょうか？」
「うん、もちろん。だって僕、ナナミのこと大好きだもん……ナナミは？　僕のこと嫌い？」
僕がそう問いかけると、ナナミは一瞬口ごもる。
「……申し訳ありません、ご主人様。私には、ご主人様の仰る『好き』の定義はよくわかりません」

「あ……そうか」
「はい。ですのでご主人様、『気持ちいい』や『寂しい』のように、『好き』をご主人様に定義していただきたく思います。ご主人様、私はご主人様のことが『好き』と言っていいのでしょうか？」
無表情で僕を見つめて、ナナミはそう問うた。
その目を見つめ返して、僕は思う。
――ナナミの『好き』を、僕が定義しちゃっていいのだろうか？
恋愛感情って、そういうものじゃないよな……とは思うのだけれども。
でも、『好き』って感情は、僕たちだって「こういう感情が『好き』と呼ぶ」んだと、どこかで学習したから、この感情を『好き』って呼んでるんだよな……。
「……ナナミは、僕と一緒にいると嬉しい？」
「はい、ご主人様。嬉しいです」
「僕のこと、いつも考えてる？」
「はい、常にご主人様のことを考えています」
「僕にエッチなことされると、嬉しい？」
「はい、とても嬉しいです」

「僕がナナミのこと『好き』って言うと、ナナミ、嬉しい？」
「はい、この上なく嬉しく思います」
「ナナミは……僕と一緒にいたい？」
「はい、ご主人様。ご主人様のおそばにいさせてくださいませ」
「――ナナミ。たぶん、その気持ちの全部が、『好き』ってことだよ」
僕がそう囁くと、ナナミは。
「……理解しました。だとすれば間違いなく、私はご主人様のことが『好き』です」
「ナナミ……」
「ご主人様。私はご主人様が好きです。ご主人様のことが大好きです」
「うううっ、ナナミ……！」

――そこで初めてナナミが笑顔を見せた、なんてことになれば、あるいは綺麗な物語だったのかもしれない。
でも、ナナミの表情は、やっぱりいつもの無表情のままだった。

だけど、僕はそんなナナミこそ大好きだから。

表情がたとえ変わらなくても、言葉がいつも平板でも、エッチなことしても喘いでくれなくても――もう、そんなナナミだから好きになってしまった。
ああ、完全に僕の方が開発されてしまっている……。まあいいか。
「ナナミ、好き、好きぃっ、僕もナナミが大好き、ずっと一緒にいようね……！」
「はい、ご主人様。私も大好きです、ご主人様」
そうして僕は、またナナミの唇を貪る。
ナナミと手を絡めて、ナナミの唇の柔らかさと温かさを味わって――。

ああ……こんなに幸せでいいんだろうか？
なんかもう……次に目が覚めたら天国にいるかもな……。
いや、もうここが天国なのかも……。

そんなことを思いながら、僕はナナミの柔らかさの中で、微睡みの闇に落ちていく。
……ああ、幸せ。